

長野県松本市

ERIANA

エリ穴遺跡

—発掘調査報告書—

(遺構編2・第2分冊)

2018.3

松本市教育委員会

長野県松本市

ERIANA

エリ穴遺跡

—発掘調査報告書—

(遺構編 2・第 2 分冊)

2018.3

松本市教育委員会

例 言

1 本書は平成25年度から平成30年度にかけて実施したエリ穴遺跡遺物整理・報告書刊行事業に係る、エリ穴遺跡発掘調査報告書の遺構編2・第2分冊である。

2 エリ穴遺跡遺物整理・報告書刊行事業のうち、平成26年度から平成29年度については、国庫補助事業として実施している。平成29年度の事業に関する文書記録等は以下のとおりである。

2月8日「平成29年度国宝重要文化財等保存整備費補助金交付申請書の提出について」

4月3日「市内遺跡発掘調査等事業費補助について」(29教文第1-27号)

3 平成8年度に刊行した概要報告書に記載された所見と、本書の所見が異なる部分が若干あるが、本書をもって最終所見とする。

4 本書の執筆は、発掘担当者の所見をもとに百瀬長秀が担当した。

5 本書に関連する作業分担は以下のとおりである。

遺物洗浄・注記：内田和子、佐々木正子、中澤温子

接合など：天野雅代、市川二三夫、白鳥文彦、竹平悦子、中澤温子、前沢里江、宮本章江

実測・拓本・トレース：阿形文、石川真理子、柏原佳子、久保田瑞恵、竹内直美、竹平悦子、

直井知導、前沢里江、宮本章江、村山牧枝、百瀬長秀

遺構図調整・トレース：荒井留美子

遺構写真：竹原 学、竹内靖長、澤柳秀利、近藤 潔、長畦和正、荒木 龍

遺物写真：宮嶋洋一

画像処理等：荒井留美子、直井知導、前沢里江

総括・編集：三村竜一、百瀬長秀

事務局(平成29年度)：松本市教育委員会 大竹永明(課長)、竹原 学(課長補佐・史跡整備担当係長)、

竹内靖長(課長補佐・南・西外堀整備担当係長)、三村竜一(課長補佐・埋蔵文化財担当係長)、

百瀬耕司(主査 H29.10～)、原田健司(主事～H29.9)、林 祥平(主事)、島岡祐輔(事務員)、

吉見寿美江(嘱託)

6 本書掲載の遺構の表示方法は以下のとおりである。

(1) 配石、溝、土坑、ピットなどの縮尺は、1:30を原則とした。

(2) 土層図や遺構断面図の土質(色調・混入物)は、発掘所見に基づき、以下のとおりに記号化した。エリ穴遺跡に隣接する小池遺跡・一ツ家遺跡の報告書[竹原学他1997]の表記基準を適用した。

[色調] 1 褐色 2 暗褐色 3 黒褐色 4 明褐色 5 赤褐色 6 黄褐色 7 茶褐色
8 灰褐色 9 橙褐色 10 灰色 11 暗灰色 12 黒灰色 13 赤灰色 14 黄灰色
15 青灰色 16 黄色 17 暗黄褐色 18 暗茶褐色 19 黒色 20 焼土 21 砂
22 砂礫 23 緑灰色

[混入物] A 小礫 B 礫 C 焼土粒 D 焼土塊 E 炭化物粒 F 炭化物塊
G 炭化材 H 黄色土粒 I 黄褐色土粒 J 橙褐色土粒 K 茶褐色土粒 L 黄色土塊
M 黄褐色土塊 N 橙褐色土塊 O 茶褐色土塊 P 砂粒 Q 黒色土粒 R 黒色土塊
S 暗褐色土粒 T 暗褐色土塊 U 灰色土粒 V 灰色土塊 W 赤褐色土粒 X 赤褐色土塊
Y 鉄分

[混入量] a 少量 b 中量 c 多量

7 本書掲載の土器の表現方法は以下のとおりである。

- (1) 縮尺は、土器実測図は1:4、土器拓影は1:3に統一し、土器写真は約1:2を主とした。
- (2) 特記すべき胎土をもつ土器は、第1分冊に準じ以下のように区分し、断面図中や側面図脇に示した。

無：標準的(在地的)胎土

△：標準的ながら、岩石・鉱物が少ない胎土

●：標準的ながら、岩石・鉱物が著しく多い胎土

◎：ローリングを受けたガラス質石英を多含する胎土

▲：後期緑帯文土器と類似した胎土

◆：晩期末条痕文系土器に類似した胎土

■：その他、違和感のある胎土

- (3) 塗彩がある場合は、断面図・側面図周辺の塗布された面の側に記号を付した。赤色塗彩は、「◀」、黒色塗彩は「◁」である。顕著な2次焼成が認められる場合は、断面図外の上端外面側(場合によっては内面側)に「☆」を付した。
- (4) 遺構出土土器の個体番号は、「遺構の種類・遺構の番号」-「個体番号」の順に表記した。遺構の記号は、配石・S、土坑・D、ピット・P、溝・Mとした。それぞれの遺構関連グリッド出土土器は、「遺構記号・番号」-「G」-「個体番号」の順に表記した。谷状低地の廃棄場W出土土器は、該当グリッドにa~jの略号を与え、「W」-「略号」-「個体番号」の順に表記した。グリッドごとの略号は本文中に示す。

以下に具体例を挙げる。

配石：S15-22(配石 15-22) 土坑：D237-9(土坑 237-9) ピット：P51-3(ピット 51-3)

溝：M3-14(溝 3-14) 遺構関連グリッド：D200・G12(土坑 200 関連グリッド-12)

廃棄場W：Wc-14(廃棄場W、cのグリッド-14)

- 8 動物遺存体に関しては、同定と分析を吉井理氏に依頼して玉稿を頂戴し、付編として掲載した。
- 9 土器の放射性炭素年代測定、土器の胎土分析、赤色顔料分析を、パリオ・サーヴェイ株式会社に業務委託し、測定・分析結果を付編として掲載した。
- 10 土製耳飾の赤色顔料の分析を明治大学理工学部応用科学科に依頼、明治大学資源利用史研究クラスター研究推進員・本多貴之准教授と同佐々木美保研究補助員から玉稿を頂戴し、付編として掲載した。
- 11 縄文時代中期の年代観については、長野県史の年代観[寺内・野村・三上 1988]に従った。
- 12 本書作成に当たり、会田進氏、阿部芳郎氏から指導・助言・援助を戴いた。記して感謝申しあげる。

目 次

例言

目次

第IV章 縄文時代の遺構と遺物出土状況(続き)	1
第3節 遺構	1
3 配石と廃棄場W	1
(1) 配石2・3と廃棄場W	1
(2) その他の配石	3
4 溝	9
5 土坑・ビット・遺物集中出土地点	10
(1) 土坑	10
(2) ビット	33
(3) 遺物集中出土地点	34
6 谷状低地の廃棄場	36
(1) 概観	36
(2) 廃棄場E	36
(3) 廃棄場M	38
(4) 谷状低地中央の利用	38
7 礫群と遺構	39
図版・表	41
第V章 平安時代以降の遺構と遺物	189
第1節 A区の遺構と遺物	189
第2節 B区の遺構	189
第3節 C区の遺構と遺物	189
図版	191
付編1 動物遺体 [鎌倉市教育委員会・吉井理]	197
付編2 エリ穴遺跡出土縄文土器の放射性炭素年代測定 [パリノ・サーヴェイ株式会社]	199
付編3 エリ穴遺跡出土縄文土器の胎土分析 [パリノ・サーヴェイ株式会社]	203
付編4 エリ穴遺跡の自然科学分析 [パリノ・サーヴェイ株式会社]	215
付編5 エリ穴遺跡の土製耳飾の顔料分析 [明治大学理工学部・本多貴之、佐々木美保]	229
写真図版	

第IV章 縄文時代の遺構と遺物出土状況

第3節 遺構

3 配石と廃棄場W

(1) 配石2・3と廃棄場W【晩期中葉】(図1～27、第1分冊図25・26)

ア 概況

配石2と配石3はS9W42グリッドに隣合って位置する。両者は30cm程度しか離れておらず、調査中から一体の遺構の可能性が高いと認識され、遺物も配石2・3出土としてまとめて取り上げた。調査所見に従い、一体の遺構と考えて報告する。S9W42グリッドは谷状低地の底に近く、谷が大きく湾曲して南微高地を挟りこんでいる場所である。三方を南微高地に囲まれ、入り江のような位置に例えてもよいだろう。以下、「入り江状谷状低地」と称したい。

配石2・3周辺出土土器は大形破片・半完形品などが多く、それらをグリッド出土遺物として取り上げた後に、配石が確定できた。その半完形品等の大半は佐野式であった。また、S9W42グリッド以外の入り江状谷状低地出土土器も、佐野式の半完形品・大形破片を多数含んでいた。周辺グリッドの時期別個体数(表1)を見れば、S9W42のように晩期中葉が卓越するか、晩期前葉と中葉が相半ばするグリッドばかりである。ただし、谷状低地上流側、N9E3～S6W27グリッド付近の廃棄場(廃棄場E、廃棄場M)に比べれば、遺物出土量・密度は1/3程度に留まる。この入り江状谷状低地は南微高地北縁の廃棄場になってもおかしくない微地形で、遺物量もそれなりにある。配石2・3の存在が、他の廃棄場とは少々異なる性格を生み出し、時期的にも限定的にさせるのだろう。廃棄場Wと呼び、配石2・3とひとまとめにして、本項で報告する。廃棄場Wに該当するグリッドは、S6W36、S6W39、S6W42、S6W45、S9W36、S9W39、S9W42、S9W45、S9W48、S12W39、S12W42である。なお、廃棄場Eと廃棄場Mについては本節6で報告する。

イ 配石2・3

配石2・3はⅢ層中の礫群と共に検出し、礫群を除去したところで構成する礫の集中を確定した。切り合う遺構はない。2基の配石はいずれも整った長円形ではないが、北西—南東方向に長い。配石2は90×60cm程度の範囲に、人頭大の礫数個と拳大の礫20個ほどを密集させる。配石3は200×80cm程度の範囲に、径40cmほどの大礫1個と人頭大～拳大の礫40個ほどを密集させ、その北西側に20cmほど離して、径40cmの大礫2個を並べる。どちらも礫の上面は揃いきらず、礫が重ねられることもほとんどない。これらの礫の多くは被熱した痕跡を残しており、これは他の配石にはない特徴である。配石周辺の土に被熱による赤化は確認できなかった。下部構造は不明である。

配石2・3出土土器で図示するのは5点しかない。完形に近いS2-1の器体の大半はS9W42グリッド出土で取り上げられ、配石2・3出土の小破片が接合したのだが、破片の多くは配石3の直上に乗っており、配石2・3出土といっても問題はないだろう。S2-1～S2-3の3点は佐野式、S2-4は加曽利B式、S2-5は上ノ段式の小破片である。佐野式が最新で、S2-1はもとより、S2-2・S2-3もその破片は大きいので、それを根拠に配石2・3の帰属時期を佐野式としてよいだろう。S2-1は配石2・3を代表する土器である。肩部文様帯型の深鉢で、口縁部はほぼ直立し、肩部は緩く張り、肩部より下位はケズリが卓越する。肩部が主要文様帯となるが、口縁部にも文様帯が設定され、二帯構成となる。図柄はすべて太く深めの線描で、縄文などの充填要素はない。肩部文様帯はその上下を点列界線帯で画し、その中にクランク構図が連続する。その

クランクの真ん中及び下限の界線から短線が突出し、これらの短線がハンガー形構図を誘発すると推測する。もう1つ重要なのはクランクが界線から遊離することで、クランクの祖形は鍵ノ手モチーフだが、これは界線に接しない限り成り立たない。クランク構図も同様なので、界線からの遊離はクランクの決定的変質と理解すべきだろう。S2-1 肩部文様帯はクランク構図からハンガー形構図へ、すなわち粗大工字モチーフへ、という変遷を示唆する。粗大工字文が佐野 2b 式のメルクマールなら、その祖形たる S2-1 は佐野 2a 式の設定の鍵を握ることが期待できる。口縁部文様帯は接合気味の入組構図の先端が大きく鋭く屈曲する。線描で硬直化した雲形構図とも、安行 3d 系譜の構図とも言えるだろう。口縁内面の太い沈線にも注意を払ってきたい。ガラス質の石英を大量に含む胎土ではないが、体部の整形技法も佐野式そのものである。

ウ 廃棄場Wの土器出土状況 (図 115～123)

入り江状谷状低地の廃棄場Wは、S6W36～S12W42 グリッドをその範囲と考える。図 115 に示した出土土器の全重量からの判断である。廃棄場Wは谷状低地に向かう斜面を中心とし、そこから2次的に転落した遺物が、谷状低地中央にまで散漫に広がったことが推測できる。次に図 117～123 に示した時期別の口縁部重量分布をご覧いただきたい。後期前葉～後期末葉までの間、廃棄場Wの位置からの出土量は皆無に近い。廃棄場Wは後期末まで成立しない。廃棄場Eは後期後葉に突然確立し、廃棄場Mも同時期に成立し始めるように見受けられるのに対し、廃棄場Wの成立は晩期前葉まで待たねばならない。その晩期前葉もさしたる出土量ではなく、廃棄場M出土重量の2割にも満たない。廃棄場Wがそれらしい姿を見せるのは、晩期中葉、佐野 1b 式～2 式の間だけで、この時期だけは廃棄場Mと拮抗する最大の廃棄場となる。晩期後葉には廃棄量は再び皆無に戻る。廃棄場Wはほぼ晩期中葉限定とみてよい。

図 115 に示した土器の全重量が最も多いのは、配石 2・3 のある S9W42 グリッドではなく、その上流側に隣接する S9W39 グリッドである。次が S9W42 と S9W36 グリッドで、廃棄場Wの中心は配石 2・3 とは微妙にずれる。後期後葉～晩期後葉の無文土器の口縁部の重量 (図 116) でも、S9W42 グリッドよりその両脇のグリッドのほうが明らかに多い。これだけなら廃棄行為は配石 2・3 をある程度避けて行なわれたかに見える。だが、肝心の晩期中葉の口縁部重量で比較するなら、配石 2・3 が位置する S9W42 グリッドが断然多い。配石 2・3 の直上から出土した S2-1 の破片はそれを象徴するかのようで、飾られた土器 (それゆえ帰属時期が判断できる土器) は意図的に配石周辺に置かれた、あるいは位置を選んで廃棄された可能性が指摘できる。期間限定の祭祀行為は配石 2・3 を中心にして執行され、廃棄行為もまた配石 2・3 の位置が中心となった。廃棄場Wは配石 2・3 と連動し、一体化したスペースであったと推測する。

晩期前葉の口縁部重量分布 (図 121) は S9W39 と S9W36 グリッドが最大である。配石 2・3 を囲む東側の斜面から、廃棄場としての利用が始まったと推測する。ところが、配石 2・3 を中心とした入り江状谷状低地の中央が、本格的に利用される晩期中葉には、S9W36 グリッドは土器出土量が半減し、廃棄場の中心から外れてしまう。微妙ながら廃棄行為の位置は変動しているように見える。S9W36、S9W39 グリッドを廃棄場 W1、それ以外を廃棄場 W2 と細分することも可能で、廃棄場Wは晩期前葉に W1 が成立し、晩期中葉には W2 に中心が移動した、と表現することもできるだろう。

エ 廃棄場Wの土器

前段で廃棄場Wの様相を推測したが、その根拠として、廃棄場W出土土器をグリッド別に図示する。グリッドごとの微妙な違いが読み取れるかもしれないと考えたからである。なお、出土状況を示す図 1 で、個体番号を表示しやすくする為に、グリッド名を a～j に簡略化した。

出土土器の逐一の説明は省略するが、全体を通じて言える特徴を挙げる。第 1 は後期以来伝統の隆帯文

土器が少量に留まることである。S2-G16～S2-G20を除けば、We-1～We-8、Wf-5～Wf-9などS9W36とS9W39グリッド限定で、破片も小さい。口唇肥厚鉢(S2-G13)や安行3式にかかわりそうな土器(Wa-5、We-15～We-17、Wf-17・Wf-18など)のほうがむしろ多く出土している。第2には鍵ノ手構図やクランク構図をもつ土器が点々と存在し、その系譜が追えそうなことである。器種の相違を無視すれば、Wf-23⇒Wf-24、Wg-12⇒Wc-6、S2-G34⇒S2-1といった配列は魅力的である。第3には雲形モチーフを取り入れた丸底の小形器種が多いことである。皿状の鉢(S2-G60、S2-G61、Wb-8、Wb-18、Wi-10)や、口縁部が外反する鉢(S2-G59、Wg-32、Wi-3)が目立つが、それらは完形に近く、選択的に毀損を免れたのかと、憶測したくなる。第4には佐野2b式の特徴であるハンガー形構図の粗大工字文をもつ土器が、S2-G36、Wa-16などわずかしかないことである。廃棄場Wの時間幅の下限を示すのかどうか。

オ 廃棄場Wの土製品

廃棄場W出土の土製品にも、注目すべきものがある。遮光器系土偶3点と人面付異形土器2点である。遮光器系土偶の中空の頭部d-313は、配石2・3に隣接するS6W42グリッド出土で、配石からわずかに離れてはいるが、極めて近い位置を占める。壊れやすいはずの中空の頭部が完形に近い状態で遺存したからには、頭部だけを切り取って、埋置や安置など何らかの措置を講じたことを考えたい。遮光器系土偶胴部のd-322はS12W39グリッド、中空の腕部d-319もS12W42グリッド出土で、ともに配石2・3の隣接グリッドである。この2点も配石2・3とのかかわりを考慮しないわけにはいかない。遮光器系土偶3点は、配石2・3や廃棄場Wと時間的に整合する可能性が十分ある。

一方、土製耳飾は第3分冊の図90～96で示すとおり、ごくわずかししか出土せず、変遷の末期に位置付くものは皆無である。エリ穴遺跡の土製耳飾は佐野1b式以降には残らないことを示すだろう。

(2) その他の配石

配石5【時期不明】(図28・29、第1分冊図26)

S12W36～S15W36グリッドにかけて位置する。Ⅲ層中の礫群と共に検出し、礫群を除去したところで配石5を構成する礫の集中を確定した。切り合う遺構はない。なお、配石5が3つの塊に分かれることを把握した段階で、それぞれの塊の外周に掘り方の可能性があるラインを発見し、下部構造の土坑が存在する可能性を認めたが、配石撤去後の精査では掘り方は確認できなかった。単なる認識かもしれないが、ごく浅い掘り方があった可能性は残る。配石5は径160cm程度の広がりをもつが、3つの塊にわかれ、それぞれは径50～90cmの範囲に、人頭大～拳大の円礫・垂角礫を、密接させて配置する。3ブロックを統合した配石と見るべきか、中央に礫の空白域がある配石と見るべきか。礫の上面は概ね揃えてはいるが、それぞれの礫の平坦面を上にするとは限らない。礫は積み重ねられてはならず、平面的に敷き詰めた状態である。

配石5出土土器はわずかで、破片も小さく、中期後葉～佐野式と幅が大きい。散漫に過ぎ、全点混入の可能性もある。配石5に隣接するS15W36グリッドから山形土偶d-170が出土しているが、これも断片にすぎない。配石の帰属時期を決めるのは困難である。

配石6【中期中葉Ⅲ期より新】(図29、第1分冊図25)

S15W39～S15W42グリッドにかけて位置する。Ⅲ層中の礫群と共に検出し、礫群を除去したところで配石6を構成する礫の集中を確定し、続いてその下から34号住居の掘り方も検出した。配石6の一角が34号住居の埋土の上に乗っており、配石6のほうが新しいのは確実である。径60cmほどの範囲に、人頭大～拳大の円礫・垂角礫を20個以上、密接させて配置する。礫の上面を概ね揃えるが、礫が重ねられることはない。下部構造は不明である。配石6から取り上げられた遺物はなく、帰属時期は中期中葉Ⅲ期の34号住

居より新しいとしか言えない。

配石 7 【佐野 1 式より新】(図 29、第 1 分冊図 31)

S21W36 グリッドに位置する。Ⅲ層中の礫群を除去し、Ⅳ層上面で配石 7 を検出した。その完掘後に直下から 13 号住居の掘り方を検出した。配石 7 は 13 号住居埋土中に構築されたと見られ、13 号住居より新しいのは確実である。径 100cm ほどの範囲に、人頭大～拳大の円礫・垂角礫を 40 個以上、密接させて配置する。礫の上面を概ね揃えるが、礫が重ねられることはない。下部構造は不明である。配石 7 から取り上げられた遺物はなく、帰属時期は佐野 1 式の 13 号住居より新しいとしか言えない。

配石 9 【時期不明】(図 29、第 1 分冊図 29)

S27W54～S30W54 グリッドにかけて位置する。Ⅲ層中の礫群と共に検出し、礫群を除去したところで配石 9 を構成する礫の集中を確定した。切り合う遺構はない。径 100cm ほどの範囲に、径 40cm ほどを最大に、人頭大多数を含む円礫・垂角礫を 40 個以上、密接させて配置する。礫の上面をある程度揃え、礫が重なる部分もいくらかある。配石北西縁辺には石棒の破片が配石の一部として置かれている。下部構造は不明である。出土土器は少量で破片も小さい。堀内式～佐野式まで幅があるが、大多数が無文粗製深鉢で、隆帯文土器と共存しそうなタイプばかりである。とは言え、配石 9 周辺は後期以降の遺構が存在しないこともあって、この土器だけで隆帯文期の遺構と断定するのは危険だろう。

配石 10 【時期不明】(図 30、第 1 分冊図 36)

S42W33 グリッドに位置する。Ⅲ層中の礫群と共に検出し、礫群を除去したところで配石 10 を構成する礫の集中を確定した。切り合う遺構はない。径 80cm ほどの範囲に、径 40cm ほどを最大に、人頭大を含む拳大の円礫・垂角礫を 30 個以上、密接させて配置する。礫の大きさに差があって上面は揃わないが、むしろ底面のほうが揃えられており、礫が重なる部分もいくらかある。下部構造は不明である。出土土器はわずかで破片も小さい。加曽利 B 式～氷式まで散漫で幅があり、遺物から帰属時期を決めることはできない。

配石 11 【後期末～佐野 1 式】(図 30、第 1 分冊図 31)

S30W30～S30W33 グリッドにかけて位置する。Ⅲ層中の礫群と共に検出し、礫群を除去したところで、配石 11 を構成する大形の礫の配置を確定した。精査の中でⅣ層上面まで掘り下げたところ、下部構造の掘り方と土坑 200 を検出し、土坑 200 に切られることを平面で確認した。東西 150cm、南北 80cm 程度の範囲に、径 40cm の大礫 5 個を密接させ、周辺にも人頭大の礫を数個配置する。礫の上面はある程度揃っている。礫の直下には径 90cm、深さ 30cm の掘り方が構築される。礫は掘り方内部に落ち込んでいないので、掘り方埋没後に配置されたと推定できる。配石墓の可能性もあるが、深さが不足する。

土坑 200 は晩期中葉佐野 2 式の良好な一括資料を保有しており、配石 11 はそれより古いことは確実である。出土土器は少ないが、S11-8 は大きめの破片である。無文粗製深鉢もしくは深鉢体下半の無文部位で、製作技法から見て、隆帯文期か佐野式期か判断に迷う。小破片の中では、S11-4 は後期末、S11-5～S11-7 は後期末から晩期前葉の隆帯文期、S11-9 は佐野 1 式期の可能性がある。断定は難しいが、後期末～佐野 1 式の幅の中に位置つきそうである。

配石 12 【晩期初頭】(図 31、第 1 分冊図 27)

S9W27 グリッドに位置する。Ⅲ層中の礫群と共に検出し、礫群を除去したところで、配石 12 を構成する大形の礫の配置を確定した。精査の中でⅣ層上面まで掘り下げたところ、土坑 467 を検出した。配石 12 が土坑 467 の上に乗るのは確実である。配石は径 30cm 弱の大礫 3 個の上面を揃えて密接配置し、周囲に人頭大～拳大の礫を 10 個ほど並べる。数は少ないが、礫が大きいので配石と判断した。土坑 467 は径 80cm、深さ 50cm ほどで、墓坑の可能性のある大きさである。配石 12 はわずかにずれつつその上に乗る。両者を一体の遺構と理解するならば、礫が土坑内に転落していないので、埋没後に礫が配置されたことになる。

配石 12 出土土器で図示できるのは 7 点だが、S12-6 だけは大き目の破片である。隆帯文第 4 段階の装飾浅鉢で、晩期初頭に位置付く。配石 12 の帰属時期の根拠とする。それ以外は後期中葉～末葉の小破片だが、S12-2～S12-4 は上ノ段式と思われる。一方、土坑 467 出土土器もわずかで、中期の小破片が主体だが、1 点だけ上ノ段式小破片がある。配石 12・土坑 467 とも上ノ段式を含むが、破片はごく小さく、混入品の可能性を排除できない。配石 12 と土坑 467 が一体の遺構で配石墓である可能性は残るが、晩期初頭に配石墓があるのかどうか。別々の遺構で配石 12 は晩期初頭、土坑 467 は時期不明とするのが穏当かと思われる。

配石 13 【時期不明】(図 31、第 1 分冊図 27)

S3W21～S6W21 グリッドにかけて位置する。Ⅲ層中の礫群と共に検出し、礫群を除去したところで、配石 13 を構成する大形の礫の配置を確定した。切り合う遺構はない。北側半分は谷状低地の埋土中に構築されている。径 50cm 以上の大礫 3 個を中心にし、人頭大の礫を加えて、礫の上面を揃えて配置する。その上面は谷状低地側がやや低くなっているため、構築当時の地表面は緩やかに谷状低地に傾斜していたのだろう。下部構造は不明である。伴出遺物はなく、帰属時期は決められない。

配石 14 【加曾利 B2 式より新】(図 31、第 1 分冊図 37)

S39W21 グリッドに位置する。Ⅲ層中の礫群の一部として検出し、礫群直下のⅣ層上面で 28 号住居の掘り方を検出すると共に、住居埋土中に構築される配石 14 に帰属する礫を確定した。加曾利 B2 式の 28 号住居の上に乗るのは確実である。140×80cm 程度の範囲に、人頭大の礫 4 個ほどを中心とし、拳大の礫 40 個ほどの上面をほぼ揃えて配置する。礫のうち 1 個は長辺を立てており、埋置された可能性がある。下部構造は不明である。伴出遺物はなく、28 号住居との切り合い関係から、加曾利 B2 式より新しいとしか言えない。

配石 16 【晩期初頭】(図 32、第 1 分冊図 28)

N6W9～N3W9 グリッドにかけて、谷状低地に位置する。中ノ沢 K 式を中心に佐野式まで継続する廃棄場 E1 の末端にあたる。また、隣接する S0W12 グリッドは上ノ段式の中心的廃棄場 E1 に属す。Ⅲ層中の礫群の一部として検出し、礫群を除去したところで、配石 16 を構成する大形の礫の配置を確定した。精査の中で、礫群直下のⅣ層上面で配石の下部構造と思われる掘り方とピット 80 を検出、配石 16 がピット 80 に切られることを平面で確認した。配石 16 を構成する礫は上下に重ねられており、上位の礫は径 140～160cm の範囲に配置され、下位の礫は 100×60cm 程度の掘り方の中に取まっている。いずれも径 30cm 程度の礫が最大で、人頭大を主体とし、風化が著しい礫を含む。上面を揃えているようには見えないが、密接して配置される。下部構造の掘り方は深さ 30cm 程度で、下位の礫でほぼ埋まっている。下位の礫の中に大きめの土器片が 1 点入り込んでいる。遺構写真からは晩期初頭の平縁隆帯文深鉢(第 4 段階)と判断され、これを配石 16 の帰属時期の根拠とする。それ以外の土器は小破片ばかりだが、S6-10～S6-13 は晩期初頭～前葉に属する。上ノ段式の小破片 8 点は先行する時期の廃棄場からの転落品、佐野式の細片 2 点は廃棄場からの混入品だろう。土製耳飾 e-1080 は時期は整合するがあまりに小さく、配石に帰属するとは言いきれない。なお、ピット 80 からは上ノ段式を中心とした小破片が数点出土しているが、廃棄場由来の混入品と判断する。

配石 17 【加曾利 B 式期以降】(図 33、第 1 分冊図 28)

S9W6～S9W9 グリッドにかけて位置する。Ⅲ層中の礫群の一部として検出し、礫群を除去したところで、配石 17 を構成する礫の配置を確定した。精査の中で、Ⅳ層上面で配石 17 の下部構造の掘り方と土坑 292 を検出、配石 17 が土坑 292 を切ることを平面で確認した。配石 17 は 100×70cm ほどの範囲に、長辺 50cm ほどの大礫 1 個を中心とし、径 20cm 程度～拳大の礫 10 個以上を密接配置する。礫上面はほぼ揃って

いる。下部の掘り方は120×90cm程度と推定され、配石範囲とは完全に重複する。検出できた深さは10cm程度だが、本来はもっと深かったのではなかろうか。そうならば、掘り方の中に配石がすっぽり収まっていた可能性もある。サイズから見て配石墓の可能性を考えたいが、断定は困難である。

配石17出土土器で図示できるのは細片3点に過ぎない。堀ノ内式と加曾利B式があるが、これで配石の帰属時期を決めるのは強引だろう。配石17に切られる土坑292は加曾利B式期に属するので、土器細片はそちらに由来する可能性もある。切り合い関係から、配石17は加曾利B式期以降であることは確実である。

配石18【佐野1b式～2a式】(図33～35、第1分冊図28)

S12W15～S15W18グリッドにかけて位置する。Ⅲ層中の礫群の一部として検出し、礫群を除去したところで、配石18を構成する礫の配置を確定した。精査の中で、Ⅳ層上面で配石18の下部構造の掘り方と土坑235、土坑580を検出、配石18が土坑235を切り、土坑580に切られるのを平面で確認した。下部構造の掘り方は東西260cm、南北160cm、深さ30cm程度と規模が大きく、その東側2/3程度の範囲に配石がすっぽり収まる。底面は平坦ではなく、柱痕サイズの深い部分も1カ所ある。径20cmほどの大礫10個程度が点在し、その中間に拳大の小礫が重なり合って詰め込まれている。最大の礫は掘り方底面に置かれており、それ以外の礫も全て掘り方の中に入っていたのだろう。

配石18からはかなり多くの土器が出土した。重量分布では佐野式が突出しており、佐野1b式～2a式が大多数を占めると考えてよい。無文土器も半分以上は佐野式に伴うタイプである。S18-36～S18-66がそれらに該当し、図化できた大き目の破片のほとんどが含まれる。配石18の帰属時期は、これらの土器で決めてよいだろう。一方、晩期初頭～前葉に位置つきそうな破片も一定量あり、S18-17～S18-35が該当する。晩期最初頭と思われる土製耳飾e-5は、これらに共伴するのだろう。S18-33の無文粗製深鉢は、整形技法から見ると、隆帯文土器に伴うか佐野式土器に伴うか判断に迷う。晩期前葉までの土器が少なくないのは、配石18がそれ以前の遺構または包含層を壊して、構築されたことが考えられる。後期以前の土器は混入品、浮線文期に属するS18-67～S18-70も小破片なので除外できるだろう。なお、切り合う土坑235は出土土器がなく時期不明、土坑580は堀ノ内式～晩期前葉型式の細片が少量出土したが、やはり時期不明である。

配石19【晩期?】(図36・37、第1分冊図32)

S15W24～S18W27グリッドにかけて位置するが、大半はS18W24グリッドの範囲に収まる。Ⅲ層中の礫群の一部として検出し、礫群を除去したところで、配石19を構成する礫の配置を確定した。精査の中で、Ⅳ層上面で配石19の下部構造の掘り方と、竪穴3の掘り方を検出した。配石を構成する礫の1/3以上は竪穴3の埋土上に乗っており、竪穴3埋没後に配石19が構築されたのは確実である。配石を構成する礫は、下部構造の掘り方の範囲に収まっており、東西280cm×南北200cmほどの広がりをもつ。礫は上下に重なって、最大40cm程度の厚みがある。配石上部のほうが礫は大きく、径40cmほどを最大として、人頭大の礫10個程度と拳大の礫が密集する。礫の上面は揃わず、中央が高く、外縁ほど低くなっている。配石下部も径40cmほどの礫が最大で、10個弱の人頭大礫が点在し、その間に拳大の小礫が密集する。密集度合いは下部のほうが濃い。下部構造の掘り方の深さは10cm程度だが、本来は40cm以上あって礫の大半は掘り方の中に置かれたのだろう。掘り方の底面は平坦で、小さく浅いくぼみが4カ所残る。

配石19出土土器は40点ほど図示できたが、小破片ばかりである。堀ノ内1式～氷1式まで幅があり、加曾利B1式がやや多い。切り合う竪穴3からは堀ノ内2式～加曾利B1式前半の土器が多数出土しており、配石19の加曾利B1式は竪穴3に由来するのだろう。晩期初頭～浮線文期の土器が少量あるので、配石19は晩期のいずれかに帰属する可能性がある。なお、配石19からは動物骨が778g出土しており、これは遺跡全体の出土量の37%に当たる。

配石 20 【時期不明】(図 38、第 1 分冊図 37)

S36W27 グリッドに位置する。Ⅲ層中の礫群と共に検出し、礫群を除去したところで、配石 20 を構成する大形の礫の配置を確定した。切り合う遺構はないが、すぐ脇から人面付土版 c-1 が出土しており、炉のみ発見された 26 号住居の広がりの中に収まる可能性もある。推定される c-1 埋納土坑との関係は、本節 5 (3) で後述するとおり、一体の遺構であった可能性は低いだろう。一方、配石 20 を構成する礫のレベルは 26 号住居炉縁石のレベルにほぼ等しい。配石 20 は 26 号住居縁辺、壁近くの施設の可能性が残るだろう。だが、方形石囲い住居のような構造が晩期にまで継承されたかどうかは不明なので、その可能性を強く主張するわけではない。

配石 20 は径 50cm ほどの大礫 2 個の周囲に人頭大～拳大の礫 6 個ほどを密集させただけで、規模は小さい。掘り方は確認できないので下部構造は不明、確実な伴出遺物もないので、帰属時期不明とせざるをえない。時期不明の配石の可能性が高く、晩期中葉 26 号住居の壁際施設とする案を併記しておく。

配石 21 【堀ノ内 2 式より新、もしくは晩期】(図 38、第 1 分冊図 32)

S27W21～S30W24 グリッドにかけて位置するが、大部分が S30W21 グリッドに収まる。Ⅲ層中の礫群と共に検出し、礫群を除去したところで、配石 21 を構成する大形の礫の配置を確定した。同時に配石下のⅣ層上面で竪穴 4 の掘り方を検出した。竪穴 4 の上に配石 21 が乗るのは確かだが、竪穴 4 の掘り方東縁にちょうど重なっていて、竪穴 4 の中に礫を並べたようにも見える。別遺構との調査所見に従うが、若干の不安も残る。配石 21 は長辺 50～70cm の長い大礫 3 個を南北に並べ、径 30cm ほどの礫を加えて、ほぼ一列に配置する。拳大の礫はほとんど使用しない。これが竪穴 4 の東辺と重なる。礫の大きさや配置方法は他の配石とは少々異なっている。下部構造は不明で、伴出遺物は仮面土偶の中空脚部 d-5 だけだが、比較的大きめの破片で、堀ノ内 2 式期の可能性がある。切り合う竪穴 4 は堀ノ内 2 式もしくは晩期のいずれかである。竪穴 4 が晩期だとすれば切り合いには大きな矛盾が生じ、堀ノ内 2 式だとすれば同一型式内の切り合いで整合するものの、竪穴 4 出土の晩期土器小破片の説明はまるでつかなくなる。土偶の破片 1 点で配石 21 の帰属時期を決めるのは無理がある。

配石 22 【時期不明】(図 38、第 1 分冊図 37)

S39W24 グリッドに位置する。Ⅲ層中の礫群と共に検出し、礫群を除去したところで、配石 22 を構成する大形の礫の配置を確定した。切り合う遺構はない。南北 100cm、東西 60cm ほどの範囲に、径 40cm ほどの大礫 2 個を中心に、人頭大～拳大の礫 15 個ほどを列状に配置する。小規模ながら礫の上面は揃う。下部構造は不明で、出土遺物もないので、帰属時期は不明である。

配石 23 【加曾利 B1 式前半】(図 38、第 1 分冊図 32)

S30W24～S30W27 グリッドにかけて位置するが、中心は S30W27 グリッドである。Ⅲ層中の礫群と共に検出し、礫群を除去したところで、配石 23 を構成する大形の礫の配置を確定した。同時に周辺のⅣ層上面で 33 号住居の掘り方を検出し、中期中葉の 33 号住居埋土中に配石 23 が構築されることを確認した。配石 23 は東西 150cm、南北 90cm ほどの範囲に、長辺 50cm 程度を最大に、人頭大の礫 9 個を長円もしくは長方形に配置する。礫で囲った状態の配石だが、北東隅には礫がない。配石中央の空白域の、礫底面の 10cm 下から、完形の浅鉢が水平に伏せられた状態で出土した。S23-1 がそれで、加曾利 B1 式前半に帰属する。当初は切り合う 33 号住居帰属の土器と考えられたが、33 号住居は中期中葉の埋土炉をもつことが判明し、この浅鉢は配石 23 に帰属すると判断を変更した。発掘時には把握できなかったが、33 号住居埋土中に東西に長い土坑が構築され、その中に浅鉢が置かれ、土坑縁辺に礫が並べられたのだろう。後期前葉～後葉の配石墓に浅鉢を伏せて埋置する例は多数あるので、その類例と考える。S23-1 以外にも後期中葉～晩期中葉の土器小破片が出土しているが、墓坑のくぼみ上部に混入したものだろう。

配石 24 【晩期?】(図 39、第 1 分冊図 23)

N12E9～N9E6 グリッドにかけて位置する。Ⅲ層中の礫群と共に検出し、礫群を除去したところで、配石 24 を構成する礫の配置を確定した。同時にⅣ層上面で下部構造の掘り方を確認した。切り合う遺構はない。径 160cm ほどの略円形の範囲に、長辺 40cm ほどを最大に、人頭大の大礫 5 個を集中させ、周辺に拳大の礫を密集させる。礫の重なりはほとんどない。掘り方は径 200cm 程度の円形で、深さは 20cm 程度確認でき、底面は平坦である。配石を構成する礫はすっぽり掘り方の中に収まるが、掘り方底面より若干浮かせて置かれている。墓坑とするには大きすぎるだろう。図示しうる出土土器は小破片 14 点で、上ノ段式 2 点、晩期前葉～中葉 8 点を含むが、晩期土器の詳細は不明である。中空動物形土製品 c-16 は比較的大きな破片だが、文様はない。晩期土器のどれかと整合する可能性は高い。仮面土偶 d-2 は整合しない。配石 24 は晩期に帰属する可能性はあるが、遺物が小さすぎ、断定できない。

配石 25 【時期不明】(図 39、第 1 分冊図 27)

S12W21～S15W18 グリッドにかけて位置するが、概ね S15W21 グリッドの範囲に収まる。Ⅲ層中の礫群と共に検出し、礫群を除去したところで、配石 25 を構成する礫の配置を確定した。同時に配石周囲のⅣ層上面で土坑 503 と土坑 680 を検出、配石 25 が土坑 680 の上に乗る、土坑 503 に切られることを平面で確認した。配石 25 は南北 220cm、東西 100cm 程度の範囲に、径 40cm ほどの板状礫 2 個を並べ、50cm 程離して同大の垂角礫を置いて、その周囲に人頭大～拳大の礫 30 個以上をやや散漫に配置する。南北に長い列状で、礫の重なりはほとんどない。下部構造は不明で、出土遺物で図示しうるのは S25-1 の 1 点だけである。S25-1 は加曾利 B2 式の小破片で、これで配石の帰属時期を決めるのは強引に過ぎる。配石を切る土坑 503 からは加曾利 B2 式の小破片 1 点が出土し、配石の上に乗る土坑 680 は出土遺物なしである。配石 25 の北隣には加曾利 B 式期の 31 号住居があり、これらの土器は 31 号住居に由来する可能性もある。配石 25 の帰属時期を決めるのは困難である。

配石 26 【加曾利 B1 式】(図 40・41、第 1 分冊図 27)

S9W18～S12W21 グリッドにかけて位置するが、大部分が S9W21 グリッドの範囲に収まる。Ⅳ層上面で礫の集中箇所と掘り方を検出し、精査の結果、配石 26 のまともと下部構造の掘り方の範囲を認定した。同時に 31 号住居の石囲炉縁石も検出し、その精査の結果 31 号住居の P1 が配石 26 の一角を切ることを確認した。また、配石 26 の基底部と同レベルまで下げたところで 18 号住居の掘り方を検出した。18 号住居埋土の上に配石 26 が構築されるのは確実である。配石 26 の掘り方は南北 320cm、東西 220cm と竪穴 3・竪穴 4 と遜色ない大きさで、確認できる深さは 10cm 程度であり、配石はこの掘り方の中に完全に収まる。配石の中心は、長辺 70cm を最大とする径 30cm 以上の大礫 10 個ほどである。掘り方東辺と、中央南辺寄りに、4～5 個ずつ南北に配置するが、これらは掘り方底面に食い込んでいる。大礫に接して掘り方北辺に人頭大～拳大の礫を密接させる。礫の上面はほぼ揃う。大きな礫を使用するためか、礫の重なりはない。掘り方底面は平坦で、径 40cm 未満の小ピット 7 基が認められた。いずれも底面からの深さは 10～25cm と浅い。

遺構の切り合いから、18 号住居(堀ノ内 2 式～加曾利 B1 式前半) ⇒ 配石 26 ⇒ 31 号住居(加曾利 B1 式～B2 式)、の順に構築されたことは確実なので、配石 26 は加曾利 B1 式に帰属する可能性が高い。配石 26 出土土器は一定量存在し、大きめの破片もある。土器の重量分布では加曾利 B 式は 2 番目に多い。S26-12～S26-19 の 8 点は B1 式、S26-20～S26-29 の 10 点は B2 式で、切り合い関係から推定した加曾利 B1 式はさほど多くない。問題なのは S26-30～S26-35 の上ノ段式並行、S26-36～S26-39 の中ノ沢 K 式並行、S26-40～S26-43 の晩期前葉型式が加曾利 B1 式を上回り、やや大きい破片も含まれることである。加曾利 B 式に後続する諸型式も完形品はなく、まともが良いわけでもないで、時期の推定が覆されるまでは考えないが、推定に整合的なあり方とは言いにくい。問題は残るが、切り合い所見に基づき、配石

26は加曾利 B1 式に帰属すると考えておく。

配石 27 【時期不明】(図 39、第 1 分冊図 31)

S33W39 グリッドに位置する。Ⅲ層中の礫群と共に検出した。長辺 40cm 程度の大礫 2 個が重なっているだけなので、遺構と認定するには少々難がある。大きな礫が自然状態で重なるかどうかである。下部構造は不明で、出土遺物もない。時期不明の配石遺構としておく。

配石 28 【佐野 2 式以降】(図 39、第 1 分冊図 22)

N18E9～N15E6 グリッドにかけて位置するが、大半は N18E6 グリッドに取まる。Ⅲ層中の礫群と共に検出し、礫群を除去したところで、配石 28 を構成する礫の配置を確定した。配石の周囲を含めた精査の中で、Ⅳ層上面で溝 3 を検出した。配石 28 が溝 3 の上に乗るのは確実である。配石 28 は南北 180cm、東西 140 cm ほどの範囲に、人頭大～拳大の礫 70 個以上を密接配置する。拳大の小ぶりの礫がほとんどで、礫の重なりはない。下部構造は不明で、出土遺物もない。配石 28 に先行する溝 3 からは後期末葉～晩期中葉の土器がある程度出土している。それより新しいとなると、配石 28 は佐野 2 式以降ということになる。

4 溝

縄文時代に属する溝が 2 基あり、溝 3 と溝 4 が該当する。人為的な掘り方の溝かどうか不安が残り、個別の遺構実測図は作成しなかったので、第 1 分冊の割付図、図 22・23 をご覧いただきたい。

(1) 溝 3 【晩期初頭～佐野 1a 式】(図 42、第 1 分冊図 22・23)

谷状低地の南微高地縁辺寄り、N18E3～N15E15 グリッドに位置する。谷状低地の土層は地点によってかなり異なり、溝 3 周辺の状況はつかめないが、Ⅲ層中で検出した配石 28 の下位、Ⅳ層上面で検出したと思われる。配石 28 は溝 3 の北西端の真上に構築され、より新しいのは確実である。溝 3 は幅 40～80cm、延長 400cm 程度で、S 字状に緩く蛇行する。深さは 20cm 程度で、最深部は 30cm ある。底面の横断面は緩やかな曲線を描き、シャープな掘り方は見られないようである。埋土には拳大の礫が入る。谷状低地は遺構検出が難しく、溝 3 もその底面近くだけを把握できたと思われる。規模も形態も本来の姿ではないかもしれない。その方向は谷状低地の傾斜とは必ずしも同一ではなく、また付近が湧水地点だったとは思われない。

溝 3 出土土器は中期中葉～佐野式まで幅があるが、晩期初頭～佐野 1a 式が大形破片を含み、充実している。晩期初頭は M3-12～M3-17、佐野 1a 式やそれと並存するのは M3-18～M3-27 が該当する。ただし、無文粗製深鉢 M3-32 は佐野 2 式で、それ以外の粗製土器も佐野式深鉢の技法なので、後出する土器も含まれる可能性は残る。溝 3 の位置は廃棄場 E の縁辺に当たり、溝 3 を含むグリッドでは、廃棄場からの転落品と思われる土器が一定量出土している。溝 3 出土土器は積極的に溝 3 に投棄・遺棄されたとは限らず、廃棄場 E からの転落品の可能性が十分あるが、溝が機能していた時期に入り込んだと考える。溝の帰属時期は晩期初頭～佐野 1a 式の間と判断する。

溝 3 は遺存状況が良くなく、湧水とも関わりそうもなく、遺物も積極的に置かれたり遺棄されたりしたとは言えないので、縄文時代の溝として積極的に認定できるかどうかには不安が残る。

(2) 溝 4 【縄文時代】(第 1 分冊図 23)

谷状低地の南微高地縁辺寄り、N18E12～N15E15 グリッドに位置し、溝 3 に隣接する。Ⅳ層上面で検出したと思われる、時期不明の土坑 471 に切られるのを平面で確認した。幅 30cm に満たず、延長は 130cm ほどで、深さは 10cm 程度、最深部でも 20cm しかない。出土遺物はなく、検出状況から縄文時代の遺構と判断したが、溝として積極的に認定してよいかどうかには不安が残る。

5 土坑・ピット・遺物集中出土地点

(1) 土坑

縄文時代の土坑は716基検出されたが、整理作業の結果、住居の施設の可能性が高いと判断されるものが若干生じた。確定しきれないのでそれらも土坑の中にカウントしておくが、実数は716基より若干減少するだろう。第1分冊の遺構配置・土層図(図17～42)に、その平面図・土層図(断面図)を掲載した。それらのほとんどはⅢ層の礫群を除去したⅣ層上面で検出され、切り合いなどは平面で確認されたはずだが、状況に関する詳細な記録を欠くものが少なくない。土坑の時期決定は難しい。遺物を含まない土坑が多く、土器等が含まれる場合でも、破片が小さければ混入の恐れを排除できない。土器の細片1点で時期を決めるのは強引に過ぎよう。また、破片数が多くても時間幅が大きすぎれば、その中の最新の土器以降、としか位置付けられない。そんな中から、特記すべき構造や出土遺物をもつ土坑、時期決定が可能な土坑などを抜き出して、出土土器とともに個別に報告する。土坑出土土器時期別個体数の表も付した(表3～8)が、データに欠落があったり不合理の生ずる土坑もある。土坑出土土器の総重量は水洗時の計測値で、時期別の重量は接合終了時の計測値であるのが最大原因だが、訂正のしようがないので矛盾を含んだままとする。また、土坑一覧表を付録のデータに掲載したので、参照頂きたい。

土坑1【中期中葉Ⅲ期】(図43、第1分冊図31)

S30W39グリッドに位置する。Ⅳ層上面で検出したと思われる、切り合う遺構はない。直径60cm程度の円形で、外周より中心部分が深く、最深20cm弱を測る。その中心部分に把手の頂部と底部を欠く深鉢D1-1が正位で埋置される。土層所見では中心部分と周辺部分が分層できたので、中心部分はD1-1埋置の折に掘削しなおされた可能性がある。D1-1は中期中葉Ⅲ期の深鉢で、把手の頂部は発掘に伴う欠損の可能性が大だが、底部は埋設時には欠損していたと推定され、意図的な毀損だと推定する。周辺に中期の住居はなく、また、中期住居の検出漏れは考えられないので、住居に伴わない屋外埋設土器だと判断する。

土坑15【晩期初頭】(図43、第1分冊図21)

谷状低地のN12W6～N9W6グリッドに位置する。Ⅳ層上面で検出したと思われる、切り合う遺構はない。長径70cm弱、短径50cm弱の楕円形で、壁の残存高は20cmに満たないが、谷状低地の遺構は検出が難しく、土坑の底部付近だけが把握できたと思われる。埋土は水平に分層できたが、地山由来の土壌の多寡で分けたと推測できる。遺物はわずかだが、中ノ沢B類型の浅鉢D15-3は比較的大きいので、それを根拠に晩期初頭の土坑と判断する。

土坑16【堀ノ内2式】(図43、第1分冊図25)

谷状低地のN3W42～N3W45グリッドに位置する。検出や土層に関する所見はないが、隣接する1号住居と同様に、Ⅲ層中の礫群を除去して検出したと推定する。切り合う遺構はない。直径120cmほどの略円形で、壁の残存高は20cmに満たないが、1号住居の遺存状況の悪さを考えれば、土坑の底部付近がかるうじて検出できたものとする。出土土器は小破片だが、堀ノ内2式のD16-4以下、無文粗製土器も堀ノ内式に限定できる。1号住居直後の遺構だと判断する。

土坑24【中期中葉～後葉】(図43、第1分冊図25)

S12W48グリッドに位置する。2号住居に隣接し、住居とともにⅣ層上面で検出した。切り合う遺構はない。長径90cm、短径75cmの略円形で、壁の残存高は40cmを測る。底部付近は地山由来の土壌が分層できた。全面に縄文を施す深鉢体部～底部の大破片D24-1が入っていたが、出土状況は不明である。D24-1の詳細な位置付けはわからないが、中期中葉～後葉と推測でき、土坑24もこの時間幅の中に入れてよいだろう。

土坑35【堀ノ内2式】(図44、第1分冊図30)

S15W48～S15W51 グリッドに位置する。4号住居、5号住居の周辺に相当し、住居とともに第IV層上面で検出した。時期不明の土坑675を切り、時期不明の土坑33に切られる。一辺が120～130cmの方形で、残存する深さは50cmほどあり、南北方向の断面形は袋状を呈する大形の土坑である。D35-4～D35-9は堀ノ内2式と見られ、D35-5は大き目である。これらを根拠に、堀ノ内2式期の土坑だと判断する。

土坑37【中期中葉Ⅲ期】(図44、第1分冊図30)

S18W48～S21W48 グリッドに位置する。加曾利B2式後半の可能性のある7号住居の炉周辺を精査中に検出したので、住居に先行する遺構だと判断し、土坑669を切ることを確認した。隣接する中期後葉Ⅰ～Ⅱ期の4号住居との前後関係は発掘調査時点では確定しきれず、土坑37の帰属時期が未確定だった第1分冊の遺構配置図では、土坑37が4号住居を切るように図示した。

直径90cm強の不整形円形で、深さ15cm程度しか残らない。土層に関する所見はない。出土土器は少なく、破片も大きくはないが、全点、中期中葉Ⅲ期前後に位置付き、まともな方は非常に良いので、この時期の土坑だと判断する。そうなれば土坑37が4号住居に先行することになるが、遺構配置図は訂正しようがないのでそのままとする。引用される場合には、御注意いただきたい。関連する遺構は、「土坑669 ⇒ 土坑37 ⇒ 4号住居 ⇒ 7号住居」の順に構築された、と確定する。

土坑38【堀ノ内1式】(図45、第1分冊図30)

S18W42 グリッドに位置する。4号住居の周辺に相当し、住居とともに第IV層上面で検出した。切り合う遺構はない。直径100cmほどの円形だが、南縁と北側で深さが大きく異なる。断面図からは、2基の土坑が重複し、南側の深さ30cm程度の土坑が、北側の深さ90cmほどの土坑の上に乗っているとも解釈できるが、発掘所見を優先して、底部に段差のある土坑だと考えておく。出土土器の量は少ないが、堀ノ内1式ばかりなので、同期の遺構であると判断する。

土坑41【時期不明】(図45、第1分冊図31)

S18W39～S18W42 グリッドに位置する。13号住居の周辺に相当し、住居とともに第IV層上面で検出した。切り合う遺構はない。長径200cm、短径80cmの不整形で、深さは50cm程度ある。小礫の有無の相違で水平に分層できたが、土質の違いはないらしい。土器片は多く、土製耳飾e-1224もあるが、いずれも小破片である。堀ノ内式から浮線文期まで時間幅が大きく、土器から帰属時期を決めるのは困難である。

土坑54【中期後葉Ⅱ期より新】(図46、第1分冊図30)

S24W45 グリッドに位置する。第IV層上面で9号住居とともに検出し、土坑54が9号住居を切ることを平面で確認した。9号住居埋土中に構築された土坑である。径90～100cmの円形で、断面はすり鉢形を呈し、深さは30cm程度である。出土土器片で大きめなのは中期後葉Ⅱ期で、後期前葉の小破片が混じる。9号住居も中期後葉Ⅱ期と思われるので、これら中期の土器は土坑54に帰属すると見るよりは、9号住居埋土に由来する可能性のほうが高そうである。土坑54は中期後葉Ⅱ期よりは新しいとするに留めたい。

土坑57【中期中葉Ⅰ期～Ⅱ期】(図46、第1分冊図30)

S24W48～S27W48 グリッドに位置する。第IV層上面で中期後葉Ⅱ期の9号住居とともに検出し、土坑57が9号住居に切られることを平面で確認した。径70～80cm程度の円形で、円筒形に近い断面形を呈し、壁の残存高は60cm程度である。出土土器片は中期中葉前半が多く、中期後葉Ⅰ期の小破片が混じる。発掘時の切り合いに関する所見と整合するので、土坑57は中期中葉Ⅰ期～Ⅱ期に属すると考える。

土坑67【中期中葉前半】(図47、第1分冊図29)

S27W54 グリッドに位置する。IV層上面で検出し、他の遺構との切り合いはなく、周囲に住居など規模の大きな遺構もない。径60cmほどの円形で、深さは30cm弱、断面所見は壁際の崩落土が分層されたと推測できる。無文深鉢口縁部の大破片D67-1が出土したが、顕著なオサエ痕跡が残るので、中期中葉前半の産

と思われ、土坑の時期も同期であると判断する。

土坑 68 【中期中葉後半】(図 47、第 1 分冊図 29)

S27W51～S27W54 グリッドに位置する。IV 層上面で検出し、他の遺構との切り合いはなく、周囲に住居など規模の大きな遺構もない。径 90cm ほどの円形で、深さは 50cm 弱、埋土は水平に分層されたが、土質の差はほとんどないらしい。いわゆる焼町土器のやや大き目の破片 D68-1 が出土しており、中期中葉後半に帰属する可能性があるだろう。

土坑 73 【中期中葉 1 期】(図 47、第 1 分冊図 30)

S27W48 グリッドに位置する。9 号住居の周辺に相当し、住居とともに第 IV 層上面で検出した。時期不明の土坑 701 を切ることを平面で確認した。径 70cm 程度の円形で、残存する深さは 15cm 程度だが、西側縁辺は 30cm ほどの深さがある。断面所見でもそこが分層されており、径 15cm 程度の小規模な柱穴もしくは杭を打ち込んだような痕跡が、土坑 73 を切っている可能性もある。調査所見を優先するが、別の解釈もありうるだろう。出土したやや大きめの土器片 D73-3 は、中期中葉 1 期かと思われる。これだけでは少々貧弱だが、土坑 73 の帰属時期の根拠としたい。

土坑 78 【晩期初頭～佐野 1a 式】(図 47、第 1 分冊図 26)

谷状低地の S3W36 グリッドに位置する。検出や土層に関する所見はないが、III 層中の礫群を除去して検出したと推定する。切り合う遺構はない。長径 110cm、短径 70cm ほどの楕円形で、深さは 10cm に満たず、土坑底面をかるうじて検出したと考える。土層の所見はない。出土土器のうち D78-2～D78-5 は晩期初頭から佐野 1a 式、D78-6 以下の無文粗製土器や、無文の環形耳飾 1 点もそれに整合する。土坑 78 の帰属時期は、これらの遺物と同期だと判断する。

土坑 80 【氷 1 式】(図 48・49、第 1 分冊図 27)

谷状低地に面する南微高地縁辺の、S6W27～S6W30 に位置するが、ここは廃棄場 M の末端にも該当する。隣接する 17 号住居とともに、IV 層上面で検出し、切り合う遺構はなかった。径 100cm の円形で、深さは 40cm 以上ある。埋土は土坑北辺の前崩土が分層されただけで、土坑中央には拳大から人頭大の礫が多量に入り、その間から土器片が多数出土した。その中で最も新しく、最も量が多く、かつ破片が大きいのは D80-34～D80-45 の浮線土器で、氷 1 式の細密条痕をもつ甕が目立つ。土坑 80 は氷 1 式期に帰属すると判断する。土坑 80 は廃棄場を掘削して設けられたので、廃棄場由来の土器が多数混入したと解釈でき、ハート形系板状土偶 d-35 や土製耳飾 e-771 も混入品だろう。

土坑 81 【氷式以降】(図 49・50、第 1 分冊図 27)

S9W27 グリッドに位置する。配石 12 に隣接し、その精査中に土坑 467 などとともに IV 層上面で検出した。切り合う遺構はない。径 80cm の円形で、深さは 30cm ほどあり、埋土の所見はない。中期中葉～晩期までの土器片と土製耳飾 e-1595 が出土したが、いずれも小さく、散漫で集中する時期はない。氷 1 式が 3 片あるが、これも小さすぎて時期決定の根拠には弱すぎる。土坑 81 は氷式以降とまでは言えるだろうが、それ以上は限定できない。

土坑 91 【佐野 2 式】(図 50、第 1 分冊図 31)

S15W33～S18W36 の 4 グリッドにかけて位置する。中期中葉の 15 号住居の精査中に検出し、15 号住居を切ることを平面で確認した。長径 100cm、短径 80cm ほどの楕円形で、深さは 30cm ほどある。底面は南側が深く、その段差にあわせるように埋土が分層されるので、2 基の土坑の切り合いの可能性や、土坑の掘り直しの可能性なども考えられるが、調査所見を優先して底面に段差のある土坑とする。人頭大の礫数点とともに土器片が出土したが、佐野 2 式の無文深鉢 D91-1 は大きく、かつ最新なので、これで帰属時期を決めてよいと考える。D91-9～D91-12 も整合する。

土坑 101 【堀ノ内式】(図 51、第 1 分冊図 30)

S30W45 グリッドに位置する。Ⅳ層上面で検出し、時期不明の土坑 75 に切られるのを平面で確認した。長径 80cm 以上、短径 60cm ほどの楕円形で、深さは 45cm ほどあり、すり鉢形に近い断面形らしいが、埋土の所見はない。半完形の無文土器 D101-1 が出土している。平面図には土器片だけが記録されているので、完形に近い形で埋納ではなく、潰れた状態で投入されたと推測するが、出土状況の詳細は不明である。D101-1 は口縁部形態が堀ノ内式そのもので、エリ穴遺跡に類例が何点かあり、同期の粗製土器と考える。D101-1 を根拠に、土坑 101 は堀ノ内式であると判断する。

土坑 114 【不明】(図 51、第 1 分冊図 29)

S30W54 グリッドに位置する。配石 9 に隣接し、その下部構造の精査時にⅣ層上面で検出したと思われる。切り合う遺構はない。長径 100cm、短径 75cm ほどの楕円形で、深さはごく浅く、土坑の底面付近をかくらうじて検出したのだろう。底面には段差があるが、埋土所見がないので詳細は不明である。出土土器 2 片は中期中葉前半で整合性があるが、あまりに小さく、これで時期を決めるのははばかれる。

土坑 115 【中葉Ⅳ期～Ⅴ期】(図 51、第 1 分冊図 29)

S30W54 グリッドに位置し、Ⅳ層上面で検出した。他の遺構との切り合いはなく、周囲に住居など規模の大きな遺構もない。長径 150cm 弱、短径 100cm 強の楕円形で、深さは 30cm ほどあり、底面は 2 段になっている。底面付近の崩落土が分層されるだけなので、一気に埋め戻された埋土だと判断できる。略完形で土偶装飾の付いた深鉢 D115-1 が出土しているが、調査時には特に注目されなかったようで、遺構図中に出土状況は記載されておらず、発掘時の写真記録や、調査所見も残されていない。完形状態を保って埋納されていたなら、サイズからして遺構図作図時点でその存在が把握されていたはずなので、恐らくは完全に潰れた状態で土坑中に入れられていたのだろう。胴部中に欠損が多いのも、埋納以前の毀損を示すのではなからうか。

土偶装飾付土器 D115-1 は底部直上で屈曲するキャリパー形の深鉢で、中山真治の分類 [中山 2000] に従えば、A2 器形に該当する。底部から底部直上の屈曲部まではケズリとナデで整え、口縁屈曲部までの間の体部には全面単節縄文が充填される。体部上位は緩く内湾して、二段に屈曲する口縁部に至る。口縁部の二段屈曲のうち、下位の外に開く屈曲部には太い隆帯を巡らせ、その上に羽状の短線を充填する。上位の内に折れる屈曲までの間はミガキ、内傾する口縁部までの間もミガキだが、この内傾面に土偶装飾が乗る。また、土偶の対面側は欠損するが、内傾面に沈線が確認できるので、土偶と対になる何らかの装飾が施されたのは確実である。

土偶装飾は把手でもある。口縁部内傾面に乗るが、その下端は環状となり、体部上半の最大径付近に到達する。土偶装飾は大きく 4 つの部位に区分できる。左図で見れば 3 段に括れるのは明瞭で、把手下段、把手中段、把手上段である。3 段把手の外側面、右図で示した外縁部が加わる。口縁屈曲部を一周する短線付隆帯は、把手外縁部に接合するが、欠損して擦りつき方は不明である。

把手下段は 3 個のブロックを連結させる。下段中央は中実で、その内側面に腕の先端が表現される部分だが、把手の中核を構成する。その左右に厚い環状部位が繋げられるが、それは口縁部内傾面の幅の中に収まる。下段中央だけは内傾面には収まらず、外側面に大きく張り出し、把手外縁部が取り付けられる。

把手中段も 3 個のブロックからなり、それぞれが把手下段のブロックの上に乗る。中段中央は中実で、中空の把手上段の基部でもある。中段の左右は同形態で、中空で丸く膨らんで、上方に張り出す。下段と中段の間は明瞭にぐびれる。中央は単純なくびれだが、左右はぐびれの上に短線付の隆帯を加える。この隆帯は内側面～側面に限定で、外側面には延伸しないが、内側面は把手下段に延伸し、末端の下段中央で手首と指 4 本が表現される。この隆帯は長い腕を示すといえよう。

把手上段は把手中段中央の上に乗る中空のブロックで、把手中段と把手上段の間はくっきりと括れる。把手上段の内面側は全面的に欠損するが、ここに人面表現が描かれたのは確実である。把手上段は土偶の中空の頭部と見ることができ、外面側の後頭部しか残存しない。把手中段と把手上段の間のくびれは後頭部でも明瞭に示され、そのくびれ部分が把手外縁部の上端になる。くびれ部の上位、把手上段の最大径付近に短線付隆帯を巡らせ、それは側面から頭頂に向かって延伸するが、頭頂は欠損する。この隆帯の上位に1対の円孔が穿たれる。土偶頭部上半の円文に該当し、縁取りの隆帯で装飾される。1対の円文の間にも弧状隆帯が貼付されるので、二重の縁取りがなされたように見える。

把手外縁部は上下に区分できる。上半は把手上段と把手下段をつなぐ環状部分、下半は把手下段から大きく下方に延伸する環状部分で、その下部は欠損して不明である。

肝心の顔面が欠損するので、これ以上の土偶の説明はできそうもない。観察できた限り、D115-1には瀬口眞司の主張する土偶装飾付土器の3つの特徴〔瀬口2013〕を認めることができる。「①土偶は頭部のない体部と、体部のない頭部に分けて描かれる」という見解は、D115-1の把手上段と把手中段の間のくびれを境界と見れば、そのとおりに成り立つ。「②2組4本の腕」は、把手中段の左右に張り出すブロックを第1の腕、把手中段と把手下段の間のくびれ部の隆帯が延伸して、把手下段中央の指先に至るのを長い第2の腕と見れば成立する。「③土器の内側を向き、第2の長い腕を大きく広げる」という見解もそのとおりでらう。大きく広げた第2の腕が、把手の基盤である把手下段中央に収斂するのは、土偶の体部を抱く姿の一種だと見ることが可能だろう。

D115-1はその装飾状況から、中葉Ⅳ期～Ⅴ期のいずれか位置付くのではなからうか。土坑115の帰属時期も同様である。

土坑133【中期中葉Ⅲ期】(図52、第1分冊図31)

S24W36～S27W36グリッドに位置する。Ⅳ層上面で検出し、時期不明の土坑134に切られるのを平面で確認した。長径160cm、短径100cmほどの不整形円形で、底面は平坦ではなく、最深部の深さは50cm近くある。埋土所見からは自然埋没ではなさそうなのが読み取れる。出土土器片はさほど大きくないが、中期中葉Ⅲ期に集中する。少々貧弱だが、土坑の帰属時期の根拠とする。

土坑136【中期後葉Ⅱ期】(図52、第1分冊図31)

S27W33～S27W36グリッドに位置する。Ⅳ層上面で検出し、切り合う遺構はない。長径130cm、短径100cmほどの楕円形で、底面は平坦だが、深さは10cmに満たず、土坑の底面だけが検出されたと思われる。埋土所見はない。大きめの土器片D136-1は、中期後葉Ⅱ期の浅鉢らしく、これを時期決定の根拠とする。

土坑137【晩期前葉】(図52、第1分冊図31)

S27W36グリッドに位置する。土坑136などと同時にⅣ層上面で検出し、切り合う遺構はない。径100cmの略円形で、深さは30cmほどある。拳大ほどの礫が入っていたが、埋土所見はなく、状況は不明である。図示しうる土器片はいずれも小さいが、D137-1を除くと晩期前葉に集中し、無文粗製土器も整合する。かなり貧弱ではあるが、晩期前葉の可能性を考えたい。土偶d-301はこれらの土器よりは古いだろう。

土坑144【晩期前葉】(図53、第1分冊図31)

S30W36～S30W39グリッドに位置する。Ⅳ層上面で検出し、時期不明の土坑721を切る。径100cmの略円形で、底面は平坦だが、深さは10cmしかなく、土坑の底面だけが検出されたと思われる。埋土所見はない。中期の略完形土器や後期の大形破片もあるが、完形に近いD144-5～D144-7の3点は晩期前葉の隆帯文土器で、同時期の産だと判断できる。小破片D144-8～D144-12もこの3点と整合性をもつ。晩期中葉の小破片D144-14は問題だが、土坑144は晩期前葉と判断してよいだろう。土製耳飾4点(e-148、e-1232、e-1585)はe-148を除けば断片で、2次移動の可能性が高いが、晩期初頭～前葉の産ではあろう。

土坑 146 【中期中葉V期～VI期】(図 53、第 1 分冊図 30)

S33W42 グリッドに位置する。IV層上面で検出し、切り合う遺構はない。長径 120cm、短径 100cmほどの不整形円形である。深さは 30cmほどだが、底面は平坦ではなく、部分的には 45cmほどの深さがあり、埋土はそこで縦位に分層できた。径 30cmほどの柱痕跡のようにも見えるが、発掘所見は特にない。状況は不明だが、深鉢底部大破片 D146-1 が出土しており、これを根拠に土坑 146 は中期中葉V期～VI期に属すると判断する。

土坑 167 【中期中葉I期】(図 54、第 1 分冊図 35)

S36W45～S39W48 の 4 グリッドにかけて位置する。IV層上面で検出し、切り合う遺構はない。長径 120cm、短径 90cmほどの楕円形で、深さは 30cm強あるが、断面所見はない。拳大の礫数個が散漫に入り、土坑南縁から大形の深鉢口縁部 D167-1 が出土した。D167-1 を根拠に、土坑 167 は中期中葉I期に属すると判断するが、エリ穴遺跡最古の遺構である。

土坑 170 【中期中葉IV期】(図 54、第 1 分冊図 35)

S36W48～S39W48 グリッドに位置する。土坑 167 などと同時にIV層上面で検出し、切り合う遺構はない。径 80cm～90cmほどの略円形で、深さは 50cmほどあるが、埋土は分層できなかった。より新しい時代の D170-10 と D170-11 を含むものの、土器破片の大半は中期中葉IV期に属する。少々問題は残るが、それなりにまとまった資料と見て、時期決定の根拠とする。

土坑 172 【中期中葉IV期～V期】(図 54、第 1 分冊図 35)

S36W48～S36W51 グリッドに位置する。土坑 167 などと同時にIV層上面で検出し、時期不明の土坑 124 を切ることを平面で確認した。径 90～100cmほどの略円形で、深さは 60cm以上ある。埋土は上下に分層できたが、下層は地山由来の土壌が主体となる土層だろう。出土土器片は中期中葉IV期～V期に限定するので、これらを根拠に土坑の帰属時期を決定した。

土坑 176 【加曾利 B2 式後半】(図 55、第 1 分冊図 31)

S30W36～S33W36 グリッドに位置する。IV層上面で検出し、切り合う遺構はない。径 90cmほどの円形で、深さは 15cmほどしかない。土坑の西縁寄り、平坦な底面から 15cmほど浮いて、略完形の浅鉢 D176-1 が伏せられた状態で出土した。D176-1 は加曾利 B2 式後半で、浅鉢を遺体の上に被せる埋葬方法が盛行する時期に該当するので、土坑 176 もその類例だと推定する。一緒に出土した土器片は加曾利 B2 式前半なので、埋葬時の混入品と思われ、晩期の土製耳飾 2 点 (e-1387) の混入は説明がつかない。

土坑 178 【中期後葉I期】(図 55、第 1 分冊図 36)

S33W39～S36W39 グリッドに位置する。11 号住居に隣接し、それと同時にIV層上面で検出、時期不明の土坑 179 と土坑 718 を切ることを平面で確認した。長径 180cm、短径 100cmの不整形円形で、深さは 10cmに満たないが、底面は平坦ではなく、部分的には 30cmほどの深さがある。埋土は縦方向に分層できたが、解釈は難しい。略完形の深鉢 D178-1 が出土したが、遺構図には図示されていないので、出土状況は不明である。直径 16cmほどの小形品で、土坑のサイズよりもはるかに小さく、埋葬のような性格は考えられない。D178-1 を根拠に土坑 178 は中期後葉I期に帰属すると判断する。

土坑 196 【時期不明】(図 55、第 1 分冊図 35)

S39W48 グリッドに位置し、発掘範囲の南端にあたる。IV層上面で検出し、切り合う遺構はない。長径 150cm、短径 60cmの不整形楕円形で、底面は 2 段になっており、西側は深さ 30cm、東側は深さ 50cmほどである。断面や埋土の所見はないが、2 基の土坑の切り合いの可能性が残る。図示しうる土器片はすべて時期が異なり、有文品は後期、深鉢底部 D196-4 は晩期、白形で無文の耳飾 e-379 は後期末に属す。土坑 196 の時期決定は困難である。

土坑 200 【佐野 2a 式】(図 56～図 59、第 1 分冊図 31)

S27W30～S30W33 の 4 グリッドにかけて位置する。Ⅲ層中の配石 11 の下部構造を調査中に、Ⅳ層上面で配石 11 の掘り方とともに土坑 200 を検出し、土坑 200 が配石を切ることを平面で確認した。出土土器を見ると、配石 11 には後期末～佐野 1 式しかないのに対し、土坑 200 の主体は佐野 2a 式で、遺物も発掘所見と整合する。径 130～140cm の略円形だが、角がある平面形にも見える。深さは 30cm 以上あり、底面は平坦である。人頭大～拳大の礫と、略完形品や半完形品 10 点近くを含む多量の土器が出土した。土器は埋置状態ではなく、潰れた破片が折り重なっていた。略完形品や半完形品はほぼ同時期と思われるので、それらの一括廃棄のために設けられた土坑だと考えるべきだろう。

図示した破片のうち、中期～晩期前葉の D200-1～D200-13 は土坑周辺の包含層に由来すると判断できるが、晩期末の条痕土器小片 D200-44 は説明がつかない。それ以外が一括廃棄のまとまりだと推測する。有文土器は点列を挟んだ 2 条 1 組の沈線帯で文様帯を画するのが特徴である。沈線帯に挟まれた狭い文様帯が設定され、そこに独自の図柄を挿入する D200-25 が、指標となる深鉢である。太く浅めの描線で、上向きに開く緩い弧線と並列するように見えるが、これの祖形は「鍵ノ手」モチーフから派生した「クランク」モチーフで、クランクが上下の界線から遊離し、変形したと判断する。これがさらに変形して「ハンガー形」の図柄を生み出すのだが、中村豊の佐野 2a 式 [中村 1997] や、中沢道彦の佐野 2 式古段階 [中沢 2008] に対応し、その内容をいっそう豊かにしてくれる土器である。その評価は第 4 分冊で報告する資料を含めて考えるべきなので、第 2 分冊ではこれ以上は触れない。それ以外の有文器種は D200-25 と共伴し、半数を占める無文粗製深鉢も同様であろう。土坑 200 は佐野 2a 式期に帰属すると判断する。なお、土坑 200 の属するグリッド出土土器の一部を参考までに掲載した。

土坑 200 出土土器が一定の一括性をもつのなら、土坑 200 出土の土製品の一括性に触れておく必要がある。土坑 200 からは図示困難な土偶断片 1 点と、土製耳飾 5 点 (e-162、e-333、e-1709、e-4055) が出土した。土偶は時期不明で、一括性は不明である。耳飾のうち e-1709 は中期の可能性が高く、e-162、e-333 は後期に属する。残りの 2 点は時期が特定できない。土器との共伴が積極的に認められる土製品はない。

土坑 204 【時期不明】(図 59、第 1 分冊図 31)

S24W30 グリッドに位置する。Ⅳ層上面で検出し、切り合う遺構はない。長径 150cm、短径 100cm ほどの不整楕円形で、すり鉢形の断面形を呈し、最深部は 60cm ほどある。西側縁辺寄りの底面に拳大程度の礫が入り、埋土は縦方向に分層される。図示できた出土土器は中期中葉～後期後葉まで散漫で時間幅がある。山形土偶 d-137 も出土したが、D204-8 と近い時期の可能性はある。土坑 204 出土遺物からの時期決定は難しい。

土坑 207 【時期不明】(図 59、第 1 分冊図 31)

S21W30 グリッドに位置する。Ⅳ層上面で検出し、切り合う遺構はない。長径 100cm、短径 60cm ほどの楕円形で、底面は 2 つの窪みが残りと、深さは 20cm 程度しかない。埋土は分層できなかった。出土土器、耳飾 2 点 (e-142、e-1517) とともに小さく、時期決定の根拠には貧弱すぎる。

土坑 208 【氷 1 式～2 式】(図 60、第 1 分冊図 31)

S21W30 グリッドに位置する。Ⅳ層上面で検出し、切り合う遺構はない。長径 140cm、短径 110cm ほどの楕円形で、深さは 10cm に満たず、断面や埋土の所見はない。ここは 1968 年及び 1970 年の発掘調査範囲に重なるので、過去の発掘調査で削平された可能性がある。晩期中葉の土器がひとまとまりあり、D208-8 は破片も大きい、それ以上に浮線文期の土器がまとまる。氷 1 式～2 式の裏の体部破片や条痕土器小破片が最新で、土坑 208 の時期決定の根拠とする。土製耳飾 1 点は混入とみなした。

土坑 209 【氷 1 式】(図 61、第 1 分冊図 27)

S6W24 グリッドの中央、谷状低地に臨む南微高地縁辺に位置する。Ⅳ層上面で上ノ段2式～3式の17号住居とともに検出し、検出時点で土坑209が住居を切ることを平面で確認した。径90～100cmの略円形で、残存高は20cmに満たないので、土坑の底面近くでようやく検出できたものと思われる。埋土は水平に分層された。出土土器片の大半は氷1式で、D209-10等の大形破片を含み、それより新しい土器はない。土坑209の帰属時期の根拠とする。土坑209周辺の谷状低地は浮線文期の廃棄場に利用されており、それと関連性のある土坑なのだろう。

土坑210【氷1式】(図61・62、第1分冊図27)

谷状低地のS3W24グリッドに位置し、周辺のⅢ層ともども近世の流路1に切られる。周辺のⅢ層は浮線文期の廃棄場で、流路1とⅢ層を除去して検出したが、深さは20cmに満たないので、Ⅲ層中から掘り込まれた土坑だと推定する。110～120cmの略円形で、埋土は壁際だけ分層され、ほぼ平坦な底面には人頭大～拳大の礫が入る。図示しうる出土土器の半数は浮線文期で、氷1式が主体を占める。後期末葉～晩期中葉の土器や、土製耳飾e-1485は混入品と考えてよいだろう。大洞A式の可能性があるD210-17、樗王式と見られるD210-18、遠賀川式壺らしいD210-19など、異系統の土器が含まれる。

土坑212【氷1式】(図62、第1分冊図28)

谷状低地中央のN3W15グリッドに位置する。近世の流路1に近接し、Ⅲ層直下で検出したが、切り合う遺構はない。長径70cm、短径50cmほどの楕円形で、底面には段差があり、西側の深さは15cmほどだが、東側は10cmに満たない。埋土は分層できなかった。図示しうる土器はD212-1のみだが、氷1式の甕の体部で、破片は大きめなので時期決定の根拠とする。土製耳飾3点(e-157、e-212、e-786)は混入品だろう。

土坑213【時期不明】(図62、第1分冊図28)

谷状低地だが南微高地縁辺に近いS0W12グリッドに位置する。Ⅲ層除去後に検出し、切り合う遺構はない。長径70cm、短径50cmほどの楕円形で、底面は平坦だが深さは10cmに満たない。埋土はブロック状に分層された。図示しうる土器は少ないが、大きめの破片が2点ある。D213-1は甲信地域では類例が乏しいが、後期中葉～後葉の可能性がある高台付浅鉢で、D213-5は中ノ沢K式前半の平縁深鉢である。小破片D213-2・D213-3は上ノ段式で、時間幅は広くないが、まとまりが良いとも言えない。その中では最新の中ノ沢K式前半だとは言いきれない。

土坑215【堀ノ内1式】(図63、第1分冊図28)

谷状低地を臨む南微高地縁辺の、S3W12グリッドに位置する。Ⅳ層上面で検出し、時期不明の土坑214を切る。長径140cm、短径110cmほどの楕円形で、底面には凹凸があるが、30cmほどの深さがある。埋土は底面直上でブロック状に分層できたが、大きくは単層であった。底面から若干浮いて人頭大～拳大の礫が入り、土坑北辺寄りから深鉢の大破片D215-1が出土した。D215-1は堀ノ内1式で、無文深鉢の大破片D215-8・D215-9も堀ノ内式の粗製土器だと推定する。小破片D215-10～D215-15は堀ノ内2式～加曽利B2式だが、それ以外は堀ノ内1式の範疇でまとめることができる。若干の不純物は問題だが、土坑の帰属時期は堀ノ内1式と判断したい。

土坑222【時期不明】(図63・64、第1分冊図31)

S30W27～S33W30の4グリッドにかけて位置する。Ⅳ層上面で検出し、切り合う遺構はない。長径250cm、短径90cmほどの曲がった長円形で、壁際の埋土が分層できた。底面には窪みが残るが概ね平坦で、深さは30cmほどある。出土土器のうち、大破片D222-1は堀ノ内2式だが、それ以外の小破片は加曽利B2式～晩期初頭とばらつくので、土坑の帰属時期の決め手がない。山形土偶頭部のd-121は土器の時間幅の中に入るが、土製耳飾2点(e-235)はより新しいかもしれない。

土坑229【時期不明】(図64、第1分冊図36)

S42W30 グリッドに位置する。IV層上面で検出し、時期不明の土坑 228 を切る。径 75cm 程度の略円形で、底面は平坦だが、深さは 20cm に満たない。埋土や断面に関する所見はない。出土土器は小破片ばかりで、中期中葉～中ノ沢 K 式まで幅が大きく、まとまらない。山形系土偶頭部 d-109 はこの幅の中には入る。土坑の帰属時期は決め手がない。

土坑 231 【佐野 1a 式～佐野 2b 式】(図 64・65、第 1 分冊図 28)

S12W15 グリッドに位置する。IV層上面で検出し、時期不明の土坑 232 を切ることを平面で確認した。底部には段差があり、それに対応するように埋土が分層できた。2 基の土坑の切り合い、埋まりかけた土坑の掘り直しなどの可能性が考慮されるが、発掘時の所見はない。長径 150cm、短径 120cm の楕円形で、より深い南側で 30cm、北側で 20cm の深さを測る。人頭大の礫若干とともに、ひとまとまりの土器が出土したが、出土層位に関する記録はない。そのうち、D231-2・D231-3 は佐野 1a 式対応、D231-10・D231-11 は佐野 2b 式、D231-7～D231-9 はその中間的様相に見える。土坑に切り合いや掘り直しの可能性があるのなら、出土土器に時間幅が生じても不思議はないので、土坑 231 は佐野 1a 式～佐野 2b 式の幅の中に位置付けておく。土製耳飾 e-787 は後期末なので混入品である。

土坑 233 【時期不明】(図 65、第 1 分冊図 28)

S12W15 グリッドに位置する。IV層上面で検出し、時期不明の土坑 382 に切られる。径 100cm 前後の不整形形で、底面には柱痕跡に似た段差があるが、埋土に関する所見は残されていない。出土土器小破片 2 点は時期が異なり、土製耳飾 e-443 との整合性も不明である。土坑 233 の帰属時期は決められない。

土坑 234 【佐野式】(図 66、第 1 分冊図 27)

S12W18 グリッドに位置する。IV層上面で検出し、時期不明の土坑 235 を切る。長径 110cm、短径 90cm の楕円形で、底面北西寄りに径 20cm ほどの窪みがあり、拳大の礫が入っていた。出土土器の小破片は後期中葉～晩期前葉だが、唯一の大破片 D234-13 は佐野式の無文粗製深鉢である。無文土器の詳細な位置付けは困難だが、佐野 2 式の有文深鉢とは技法・器厚が一致する。これを根拠に、土坑 234 は佐野式の幅の中に帰属すると判断する。小形で完形の耳飾 e-106 は内周帯巴文系統第 5 段階で、晩期初頭～佐野 1a 式の幅の中には位置付く期待がもてる。D234-13 との共伴は微妙だが、ぎりぎりでは整合する可能性は残る。整合するなら e-106 は埋納品の可能性も期待できるだろう。

土坑 242 【佐野 1b 式～2a 式】(図 66、第 1 分冊図 38)

S45W12～S48W15 の 4 グリッドにかけて位置する。IV層上面で検出し、切り合う遺構はない。長径 200cm、短径 110cm の楕円形で、深さは 15cm 程度しかないが、窪んでいる北端は 50cm 近くある。この窪み部分の埋土は分層できたが、土坑の中心部分は単層であった。土坑の南辺付近には拳大の礫が入っていた。出土土器片で最大の D242-4 は佐野 1b 式～2a 式で、大洞系譜の小破片 D242-5・D242-6 はそれに整合するだろう。残りは後期土器で、土偶 d-264 は晩期前葉、土製耳飾 (e-4112) は時期不明である。少々貧弱だが、D242-4 を根拠に土坑 242 を佐野 1b 式～2a 式期と判断する。

土坑 247 【時期不明】(図 67、第 1 分冊図 38)

S45W15 グリッドに位置する。IV層上面で検出し、切り合う遺構はない。径 60cm 弱の略円形で、深さは 30cm 弱、拳大の礫が若干入るが、土層や断面に関する所見はない。土器は小片で、土製耳飾 (e-4100) との整合性は不明である。土坑 247 の帰属時期の決め手はない。

土坑 249 【時期不明】(図 67、第 1 分冊図 37)

S45W18～S48W18 グリッドに位置する。IV層上面で検出し、切り合う遺構はない。長径 100cm、短径 70cm の楕円形で、深さは 45cm、底面は若干段差がつく。埋土は水平方向に分層できたが、上層と下層で土質が異なるので、時間をかけた自然埋没の可能性がある。土器小破片の出土層位は不明だが、D249-1 は中

期中葉Ⅰ期～Ⅲ期、D249-2は中期中葉Ⅲ期と思われる。中期中葉Ⅲ期のまとまりとするには貧弱に過ぎるので、帰属時期不明とせざるをえない。

土坑 250 【晩期初頭～前葉】(図 67、第 1 分冊図 37)

S45W18～S45W21 グリッドに位置する。Ⅳ層上面で検出し、切り合う遺構はない。長径 100cm、短径 40cmの不整形円形で、深さは 30cmほどあるが、底面西側は若干窪む。この窪み部分の埋土が分層できた。底面には拳大の礫が若干入る。出土土器は深鉢体部の大形破片 D250-1で、成形技法やプロポーシオンは、平縁隆帯文深鉢そっくりである。後期末葉～晩期前葉、特に晩期初頭～前葉の可能性が高い。これを根拠に土坑の帰属時期を判断した。

土坑 251 【中期後葉Ⅱ期】(図 67、第 1 分冊図 37)

S45W21 グリッドに位置する。Ⅳ層上面で検出し、時期不明の土坑 252 に切られる。土坑 252 は土坑 253 に切られるが、こちらも時期不明である。土坑 251 は径 70cm程度の不整形円形で、深さは 10cmに満たない。底面から半完形の深鉢 D251-1 が潰れた状態で出土した。D251-1 はキャリバー形の深鉢で体部下半を欠く。埋置されたのではないと判断する。中期後葉Ⅱ期と思われ、これを決め手に土坑の帰属時期を判断した。

土坑 255 【加曾利 B2 式後半より新】(図 67・68、第 1 分冊図 37)

S42W21～S42W24 グリッドに位置する。加曾利 B2 式後半の 25 号住居の炉から 2m 程度しか離れておらず、それと同時にⅣ層上面で検出した。土坑 555 と切り合い、土坑 555 は土坑 470 とも切り合うが、土坑 555 が他の 2 基の土坑に切られることを平面で確認した。土坑 255 は径 70～80cm程度の略円形で、残存高は 15cm程度しかないで、底面付近がかるうじて把握できた土坑だと考える。出土土器片は小さいが加曾利 B2 式後半が主体で、土坑 555 も同様である。この 3 基の土坑は、輪郭を把握できなかった 25 号住居の埋土中に構築された可能性があり、加曾利 B2 式土器は土坑に帰属するというよりは、25 号住居埋土に由来する可能性を否定できない。晩期土器の小片(D255-7)の存在を積極的に評価すれば、土坑 255 は 25 号住居を切って構築された、住居より新しい時期の遺構の可能性が高いが、時期の特定は困難である。なお、D255-6 は脚が 3 つ付く異形の精製鉢で、加曾利 B1 式前後かと推測するが、類例を知らない。

土坑 256 【佐野式及び浮線文期】(図 68、第 1 分冊図 37)

S39W21～S42W21 グリッドに位置する。Ⅳ層上面で検出し、切り合う遺構はない。径 100cmほどの略円形で、深さは 30cm強ある。底面はほぼ平坦で、埋土は水平方向に分層できた。底面の中央を 20cmほど窪めて、深鉢底部 D256-9 が正位に埋置されていた。また、D256-9 の真上の埋土上層中に、深鉢 D256-10 の底部が正位に置かれていた。D256-9 は肩の張る裏に近いプロポーシオンと推測され、内外面ともケズリが卓越するので、佐野式の形態・技法だと判断する。一方、D256-10 の底部は外面のケズリの方法が浮線文の裏と一致する。同一個体の肩部には細密条痕や燃糸文はないが、無文の裏も少なからず存在するので、D256-10 は浮線文期と判断できる。小破片の出土層位は不明だが、D256-6・D256-7 は佐野式、D256-8 は浮線文の水 1 式、それ以外は後期の混入品である。

以上の事実から、以下のような経過を推測する。土坑 256 は佐野式深鉢 D256-9 を埋置するために掘削され、恐らく埋め戻された。大きな掘り方をもつ埋裏だったと推測する。その後、暫く間をおいて、浮線文の裏 D256-10 を埋置するために再度掘削されたが、その底面が埋土の分層線で、それより上位は掘り返され、深鉢 D256-9 も底部を残して撤去された。新たな底面に D256-10 が置かれて埋め戻されたが、後世の攪乱で底部以外が毀損し、肩部以外を喪失した。D256-10 も埋裏だと思われる。2 回に渡る埋裏の構築・埋置場所が完全に重なったのは偶然ではなく、佐野式埋裏の位置がわかる地表の目印が残され、浮線文期の埋裏は取って同じ場所を選んだのではなからうか。

土坑 257 【時期不明】(図 69、第 1 分冊図 37)

S39W21～S42W21 グリッドに位置する。Ⅳ層上面で検出し、切り合う遺構はない。径70cmほどの略円形で、底面には若干段差があり、最深部の深さは50cmほどある。埋土に関する所見はないが、人頭大～拳大の礫若干が底面付近に入っていた。出土土器はわずかな小破片でまとまりがなく、土坑の帰属時期は決められない。環形の土製耳飾 e-4164 の破片が出土し、隣接する土坑 258 出土の破片とも接合して、完形近くまで復元できた。また e-916 も土坑 257 出土だが、両者は同時期ではない。耳飾破片は軽く、2 次的な移動が起こりやすいので、この 2 点が土坑 257 に確実に帰属するとは言いきれないだろう。e-4164 を破断して、隣接する 2 基の土坑に分けて埋納したなどという解釈は、強引過ぎるだろうし、小さな耳飾で土坑の帰属時期を決めるのも、無理があるだろう。ちなみに、e-916 は晩期最初頭、e-4164 はそれより若干後出だが土器との対比は難しい。

土坑 258 【時期特定困難】(図 69、第 1 分冊図 37)

S39W18～S42W21 の 4 グリッドにかけて位置する。Ⅳ層上面で検出し、時期不明の土坑 259 を切り、時期を確定できない土坑 447 に切られることを平面で確認した。長径 250cm、短径 80cm の長円形を基調とした不整形で、底面の深さも 20～40cm と一定ではない。径 70cm 前後の 4～5 基の土坑の切り合いを確定できずに調査を進めてしまった可能性があるだろう。埋土や断面、遺物出土状況に関する所見はない。出土土器の量は多いが小破片ばかりである。土坑全体から出土したのか、集中箇所があるのかはわからず、前者なら散漫で時期決定の根拠としては弱い。後期土器は除外できるとしても、晩期土器は初頭～佐野 2 式と幅がある。佐野 2 式は D258-16～D258-22 が該当すると思われるが、小破片では細別が難しい。土坑の重複の可能性も考慮すれば、最新の佐野 2 式に帰属すると断定するのは躊躇される。

土坑 258 からは土製耳飾が 14 点 (e-670、e-746、e-972・e-973、e-996、e-1033、e-1040、e-1247、e-1394、e-1412、e-1518、e-1523、e-1582、e-1597) 出土しており、すべて環形で最大でも 1/4 程度の断片である。その一括性の当否が問われる資料だが、第 3 分冊で報告する編年案の、環形耳飾新 1～新 6 段階にある程度集中し、おおむね晩期初頭の範囲に収まると期待でき、まとまり方は悪くない。だが、佐野 2 式土器との共存は考えにくく、耳飾の破片が小さいこともあって、土坑の時期決定の根拠には使いがたく、耳飾だけ取り出して一括性があるとか意図的な埋納品だとも言いがたい。土偶の脚部断片の d-246 は後期末葉の可能性が高い。

土坑 262 【佐野 2a 式以降】(図 70、第 1 分冊図 38)

S42W12～S42W15 グリッドに位置する。佐野 1b 式～2a 式の 40 号住居の検出に伴って、その埋土中で検出し、住居と時期不明の土坑 632 を切ることを平面で確認した。径 90cm ほどの略円形で、断面形は楕円形を呈するが、埋土に関する所見はない。図示しうる出土土器は小破片 3 片だけで、内 2 片は後期土器の混入である。切り合いの所見から、佐野 2a 式以降だと判断するが、それ以上はわからない。無文の白形耳飾 e-434 も、この土坑に帰属するかどうか不明である。

土坑 270 【時期不明】(図 70、第 1 分冊図 37)

S36W18 グリッドに位置する。Ⅳ層上面で検出し、切り合う遺構はない。径 80cm ほどの略円形で、深さは 75cm ほどあるが、埋土に関する所見はない。石鏃が 8 点多出するのが目を引くが、土器は小片ばかりのうえ、堀ノ内式～佐野式まで 1 片ごとに時期が異なる。土坑 270 の帰属時期は不明で、石鏃の一括性は肯定しにくい。

土坑 272 【佐野 2 式 (2b 式)】(図 70、第 1 分冊図 37)

S36W18～S39W18 グリッドに位置する。Ⅳ層上面で検出し、切り合う遺構はない。長径 110cm、短径 80cm ほどの不整形円形で、底面には段差があり、西側は 40cm ほど、東側は 75cm ほどの深さがある。埋土に関する所見はない。出土土器は小破片ばかりだが、やや大きめの D272-4 は佐野 2b 式である。佐野 1a

式並行の D272-1・D272-2 を除けば、佐野 2 式の範疇に入りそうで、D272-4 と共存する可能性がある。少々貧弱な資料だが、土坑 272 は佐野 2 式 (2b 式) に帰属すると考える。石籤が 6 点と多出しており、純度に不安はあるものの、概ね佐野 2 式に共存するのではなかろうか。

土坑 290 【佐野 2 式 (佐野 2b 式)】 (図 71、第 1 分冊図 28)

S9W9 グリッドに位置する。IV 層上面で検出し、切り合う遺構はない。長径 110cm、短径 90cm ほどの楕円形で、底面は平坦、40cm 弱の深さがある。全体に礫が多く、底面より浮いて入っており、中央から南寄りにかけて人頭大の平石が重ねられているのが目立つ。出土土器は多く、無文粗製深鉢の大形破片が 5 点ほどある。その中で D290-9 は内面に 2 条の凹線をもち、器壁が厚く、内外面ともケズリが卓越する。佐野 2 式でも 2b 式の可能性が高いだろう。それ以外も D290-5～D290-18 は佐野 2 式の範疇で、晩期前葉以前の小破片は混入品と見てよい。米 1 式らしい D290-19 だけは問題だが、ごく小さい破片なので重視する必要はないだろう。出土土器の大半は佐野 2 式、特に 2b 式の可能性のある一括資料だと見てよく、これらを根拠に土坑 290 の帰属時期を判断した。

土坑 292 【加曾利 B2 式後半】 (図 72、第 1 分冊図 28)

S9W6～S9W9 グリッドに位置する。Ⅲ層中の配石 17 の精査中に、IV 層上面で配石 17 の下部構造の掘り方と土坑 292・土坑 293 を検出した。土坑 292 は配石 17 にも土坑 293 にも切られるのを平面で確認した。配石 17、土坑 293 とも時期不明である。土坑 292 は径 160cm 程度の略円形で、南東寄りが窪んでいる。窪み部分は 30cm、それ以外は 15cm ほどの深さで、埋土は窪み部分が分層できた。出土土器は小破片が大半だが、深鉢底部は大きめである。その D292-12 は後期中葉前後か佐野式か判断に迷う。残りはすべて後期で、特に D292-5～D292-8 は加曾利 B2 式後半でまとまり、浅鉢底部 D292-11 や東海系の D292-13 もそれと並存する可能性が高い。D292-1～D292-4 の堀ノ内式は混入品でよい。D292-12 の判断は課題だが、土坑 292 は加曾利 B2 式後半に帰属するのではなかろうか。

土坑 296 【佐野 1a 式～佐野 2a 式】 (図 72・73、第 1 分冊図 28)

S12W12～S15W12 グリッドに位置する。IV 層上面で検出し、切り合う遺構はない。径 100cm ほどの略円形で、底面は緩やかに窪み、20cm 程度の深さしかない。底面近くの埋土が水平方向に分層できた。出土土器のうち D296-3～D296-9 は佐野 1a 式並行、D296-12・D296-13、D296-21 は佐野 2 式 (2a 式) 並行の可能性があり、D296-14～D296-20 は佐野式の幅の中に収まるだろう。小破片ばかりで時期の細別が難しく、土坑 296 の帰属時期は佐野 1a 式～2a 式の幅で考えておく。土製耳飾 e-801 は後期末で、混入品である。

土坑 304 【中期後葉 IV 期】 (図 73・74、第 1 分冊図 33)

S27W12～S30W15 の 4 グリッドにかけて位置する。IV 層上面で検出し、いずれも時期不明の土坑 303 と土坑 476 を切る。径 80cm 弱の略円形で、楕円形に近い底面は 50cm 弱の深さがある。底面西縁は深さ 60cm ほどと窪んでおり、そこの埋土が縦方向に分層できたので、柱痕跡の可能性があり、土坑 304 は柱穴だったのではなかろうか。出土土器の大半は中期後葉で、大き目の破片は唐草文系、小さい破片は加曾利 E 系が多い。土坑 304 の帰属時期は、両者が並存する中期後葉 IV 期と考える。そこからはみ出す称名寺式 D304-12 と堀ノ内式 D304-13 は問題だが、小破片なので重視しなくてもよいだろう。

土坑 308 【加曾利 B 式】 (図 74、第 1 分冊図 32・33)

S30W15～S30W18 グリッドに位置する。21 号住居とともに IV 層上面で検出し、佐野 2 式期の 21 号住居を切ることを平面で確認した。径 100cm 前後の不整形円形で、深さは 70cm 以上ある。埋土は斜めに分層できたが、このような分層線には違和感をもつ。出土土器の大半は後期で、加曾利 B 式が主体を占め、図化できた大形破片も同様である。晩期土器は無文深鉢 D308-2 しかない。土坑 308 の帰属時期は加曾利 B 式

と見るのが順当だが、そうだとすれば、21号住居との切り合いは逆転することになる。土坑308、21号住居とも、出土土器から見た帰属時期認定に問題はない。発掘所見の誤認も考えにくい。第1分冊図106の21号住居平面図で、土坑308との切り合いが曖昧に表現されているのは、前後関係に不安があったからかもしれない。ところで、土坑308の断面図は、ちょうど21号住居と切り合う位置で作図している。その断面図が裏返っていたとすれば、違和感のある斜めの分層線は、21号住居壁の掘り方の線に対応する位置に来る。遺構図原図を裏返して作図してしまった可能性がある。この推測が正しければ、断面図には土坑308が21号住居に切られることが表現されていることになる。以上、発掘所見に関しては検証の仕様がないので、確定することはできないが、切り合い関係が逆転する可能性が大きいことが判明した。第1分冊の図32・33と図106は訂正できないが、利用される場合には注意していただきたい。

土坑311【堀ノ内1式】(図74、第1分冊図32)

S30W18～S33W18グリッドに位置する。Ⅳ層上面で検出し、切り合う遺構はない。長径90cm、短径70cm程度の楕円形で、深さは50cmほどあるが、底面は北西側が深く窪み、80cm近い深さがある。埋土の上部が水平方向に分層できた。出土土器はわずかだが、堀ノ内1式注口土器の破片D311-1は比較的大きく、それ以外は細片なので、これで土坑の帰属時期を決めてよいだろう。

土坑314【堀ノ内2式以降】(図75、第1分冊図32)

S27W18グリッドに位置する。堀ノ内2式後半の38号住居と同時に検出し、同住居と時期不明の土坑713を切ることを平面で確認した。土坑314は38号住居の真ん中に構築され、住居の床を掘り抜いており、土坑の埋土には38号住居埋土に由来する土や遺物が混じっているのは確かだろう。土坑314は長径130cm、短径80cmほどの楕円形で、40cmほどの深さがある。底面は平坦で、底面付近に人頭大の礫数点、拳大の礫多数が入る。土器は小破片ばかりだが量は多い。D314-7～D314-16は堀ノ内2式で、大きめの破片を含み、土偶d-3も同時期とみられる。これらは切り合う38号住居出土土器と同時期で、土坑314に帰属するのか、それとも38号住居埋土に由来するのかの判別は困難である。D314-17～D314-19は加曾利B1式～佐野2式だが、細片なので取り上げ時の混入や部分的攪乱層などに由来する可能性があり、これらで土坑314の時期を決めるべきではない。土坑314の帰属時期は、堀ノ内2式以降とするしかないだろう。

土坑315【帰属時期不明】(図75、第1分冊図28)

S12W9～S15W9グリッドに位置する。長径90cm、短径45cm程度の楕円形で、深さは30cmほどあるが、埋土や断面に関する所見はない。出土土器はわずかだが、やや大きめの破片D315-4が最新で、佐野1b式か2a式か迷う。それ以外は晩期初頭以前で混入品と見てよいが、D315-4のみを根拠に帰属時期を決めるのは少々強引だろう。佐野式の可能性を認めつつ、帰属時期不明とする。土製耳飾e-1192がどの土器に伴うのかは不明である。

土坑317【佐野1式】(図76、第1分冊図28)

S12W6グリッドに位置し、土坑の東端は調査対象エリアからはずれる。Ⅳ層上面で検出し、切り合う遺構はない。径80cmほどの略円形で、断面は楕円形、南端には柱痕状の深い窪みがある。埋土に関する所見はないので確定できないが、柱穴の可能性はあるだろう。深さは30cm、柱痕状部分の深さは70cm弱である。出土土器は小破片だが、唯一大きい無文浅鉢D317-5の口唇突起は佐野2式より古相なので、佐野1式の可能性はある。D317-1以外の小破片も整合性があるので、貧弱ではあるが、土坑317は佐野1式に帰属すると判断する。

土坑319【佐野1b式～2a式?】(図76、第1分冊図33)

S18W6グリッドに位置する。Ⅳ層上面で検出し、切り合う遺構はない。径100cmほどの不整形円形で、底面は楕円形もしくは段をもって中央が窪み、最深部の深さは50cmある。この窪み部分の埋土が分層できた。

出土土器は小破片ばかりだが、やや大きめの D319-6 は佐野 1b 式～2a 式の幅の中に位置付く。D319-5、D319-7 も整合性があるが、残りの小破片の多くは整合するかどうか判然としない。D319-6 を根拠に土坑 319 の帰属時期を決めるのは、少々強引かもしれない。

土坑 321 【佐野 2 式】(図 76、第 1 分冊図 33)

S15W9～S15W12 グリッドに位置する。IV 層上面で検出し、土坑 322 を切ることを平面で確認した。径 100cm 前後の略円形で、底面は平坦、深さは 15cm に満たない。埋土は分層できなかった。出土土器は小破片ばかりだが、加曾利 E 式 D321-1 を除けば、佐野式の粗製深鉢ばかりで、D321-2 は佐野 2 式だろう。貧弱ではあるがまとまりが良いので、土坑 321 は佐野 2 式に帰属すると判断する。耳飾 2 点 (e-303) は断片的だがほぼ同時期の産で、変遷の末期に近い。土器との対応はなんとも言えない。

土坑 322 【(佐野 1a 式)】(図 76・77、第 1 分冊図 33)

S15W12～S18W12 グリッドに位置する。IV 層上面で検出し、土坑 321 に切られることを平面で確認した。径 100cm 前後の不整形円で、底面は楕円形に近く、深さは 50cm ほどある。底面の中心付近から、埋土が縦方向に分層できたので、柱痕跡の可能性がある。出土土器は小破片だが、佐野 2 式以降はないので、土坑 321 との切り合いの所見が裏付けられる。最大の破片 D322-6 は佐野 1a 式の可能性が高いが、D322-7～D322-10 の晩期土器片との整合性は判然としない。土坑 322 は佐野 1a 式に帰属しそうだが、すっきりしない点も残る。耳飾 2 点 (e-432) は無文白形で、時間幅を広く見ざるをえず、土器との整合性はなんとも言えない。

土坑 326 【時期不明】(図 77、第 1 分冊図 33)

S15W15 グリッドに位置する。39 号住居に隣接し、住居の調査に伴って IV 層上面で検出した。切り合う遺構はない。径 80cm 程度の略円形で、深さは 20cm 程度しかないが、西寄りが大きく窪んでおり、深さも 40cm ほどある。柱痕跡の可能性があるものの、埋土や断面に関する所見がないので確定できない。出土土器は小破片ばかりでまともならず、最新の氷式 D326-8 も小さい。土坑の帰属時期は不明である。

土坑 329 【堀ノ内 2 式前半】(図 77、第 1 分冊図 32)

S27W18 グリッドに位置する。堀ノ内 2 式後半の 38 号住居の埋土中に構築されており、住居の調査に伴って検出し、住居を切ることを平面で確認した。径 60cm 弱の略円形で、深さは 20cm に満たず、埋土や断面に関する所見はない。土器は出土状況不明の大形破片が 2 点あるだけである。D329-1 は堀ノ内 2 式前半の深鉢、D329-2 は堀ノ内式の注口土器で、堀ノ内 2 式前半でまとめることができそうだが、一方で 38 号住居との切り合いの所見とは整合しなくなる。切り合い誤認、38 号住居の帰属時期不適切、編年観不適切などの可能性があるが、解決は難しく、矛盾点を残したままの報告とせざるをえない。

土坑 339 【堀ノ内式?】(図 78、第 1 分冊図 33)

S27W12 グリッドに位置する。IV 層上面で検出し、時期不明の土坑 340 を切ることを平面で確認した。径 120cm 前後の略円形で、底面は平坦で深さは 50cm ほどある。埋土は水平方向を基調に上下に分層でき、上層はさらに細分できるので、自然埋没の可能性がある。堀ノ内 2 式の小形精製深鉢完形品 D339-3 は埋土上層から、無文粗製深鉢の大破片 2 点 (D339-8・D339-9) のうち 1 点も埋土上層からの出土で、自然埋没の土坑の時期決定根拠には、少々難があることになる。D339-8 はプロローションや整形技法から堀ノ内式～加曾利 B1 式の粗製土器だと推定する。D339-9 は上ノ段式前後の粗製土器の可能性があるが、断定はしにくい。2 点の出土状況は特定できない。それ以外の小破片の大半は堀ノ内式の範疇である。土坑 339 の帰属時期は堀ノ内式の可能性があるが、大破片 D339-9 の問題が解決できないので、確定は避ける。耳飾 e-1538 の細片は晩期の産である。

土坑 347 【晩期初頭～前葉前後】(図 78、第 1 分冊図 33)

S24W12 グリッドに位置する。Ⅳ層上面で検出し、切り合う遺構はない。径 60cm 強の略円形で、底面にはかなり段差があり、北寄りには 30cm、南寄りには 50cm の深さである。埋土や断面に関する所見はない。出土土器で唯一の大破片は無文粗製深鉢 D347-4 で、技法から見て晩期隆帯文土器と共伴するが、その時間幅はまだ確定できない。そのほかの小破片は後期中葉以前の混入品である。土坑 347 は D347-4 を根拠に晩期初頭～前葉前後と判断する。

土坑 350 【時期不明】(図 79、第 1 分冊図 33)

S24W15 グリッドに位置する。Ⅳ層上面で検出し、切り合う遺構はない。径 60cm 強の略円形で、底面には大きな段差があり、北寄りには 50cm、南寄りには 15cm の深さである。埋土は段差より上位で上下に分層できたので、2 基の土坑の切り合いの可能性はない。出土土器は堀ノ内式 D350-2 を除けば小破片ばかりだが、大半が加曽利 B 式以降である。出土状況に関する所見はないので、D350-2 は埋土下層、それ以外は埋土上層などという都合の良い解釈はできない。耳飾 3 点 (e-51、e-1472、e-1532) は変遷の後半でまとまるが、土器は D350-8・D350-9 くらいしか共伴する可能性はない。土坑 350 の帰属時期を特定するのは難しい。

土坑 351 【堀ノ内 1 式?】(図 79、第 1 分冊図 33)

S24W15 グリッドに位置する。土坑 350 と並んでⅣ層上面で検出し、切り合う遺構はない。径 80cm 強の略円形で、底面には大きい段差があり、北寄りには 30cm、南寄りには 60cm の深さである。埋土や断面に関する所見はない。出土土器は小破片ばかりだが、中期 D351-1 を除外すれば、堀ノ内 1 式とそれに共伴する可能性がある土器に限られる。破片が小さいのが難点で、これだけで土坑の時期を決めるのは強引かもしれない。

土坑 352 【佐野 1 式】(図 79・80、第 1 分冊図 32)

S24W15 ～ S14W18 グリッドに位置する。Ⅳ層上面で検出し、切り合う遺構はない。径 110cm 程度の略円形で、底面は平坦、深さは 30cm 弱、埋土は水平方向に分層できた。人頭大の礫とともにひとまとまりの土器が出土したが、層位に従って取り上げられてはいない。断面図には底面付近に大形破片が記されているが、特定できない。精製浅鉢 2 点を含む大洞系土器は大洞 BC 式～C1 式の範囲で、佐野 1 式並行だろうが、無文精製鉢 D352-12 は佐野 2b 式に関わる可能性がある。無文粗製土器は佐野式の技法を示すが、その時間幅はまだ確定できない。土製耳飾の断片は晩期初頭より若干新しいだろう。土坑 352 の帰属時期は佐野 1 式段階の可能性が高いが、断定しきれない点を残す。

土坑 354 【時期不明】(図 80、第 1 分冊図 32)

S24W18 ～ S27W18 グリッドに位置する。堀ノ内 2 式後半 38 号住居の調査に伴って、住居埋土中で検出し、住居を切ることを平面で確認した。径 60 ～ 70cm の不整円形で、底面は概ね平坦、深さは 45cm 程度ある。埋土は水平方向に分層でき、自然埋没の可能性はある。出土土器は層別に取り上げられてはいない。小破片ばかりだが、堀ノ内 2 式 (D354-1、D354-4) と晩期土器に大別される。堀ノ内 2 式は 38 号住居埋土に由来すると思われ、土偶 d-40 も同様だろう。晩期土器は全点型式が異なってまとまらない。最新は浮線文期の可能性がある底部 D354-8 で、土偶 d-338 も浮線文期だが、これだけでは貧弱すぎて、土坑の帰属時期は決められない。

土坑 362 【時期不明】(図 81、第 1 分冊図 33)

S18W12 ～ S21W15 の 3 グリッドにかけて位置する。Ⅳ層上面で検出し、いずれも時期不明の、土坑 377 を切り、土坑 360 と土坑 364 に切られることを、平面で確認した。長径 270cm、短径 150cm ほどの不整楕円形で、ほぼ平坦な底面までの深さは 20cm 程度である。底面西半には人頭大の大形礫が 10 個以上、隙間なく置かれ、その上には拳大の礫が散漫に乗っていた (写真図版 6)。埋土は分層できなかった。掘り方を伴う配石遺構とほとんど様相が変わらないので、そちらに含めたほうがよい遺構なのかもしれない。出土

土器は細片で、中期が多いが最新は晩期前半の可能性のある無文土器である。貧弱すぎて土坑の時期決定の根拠にはならない。

土坑 363 【時期不明】(図 81、第 1 分冊図 33)

S21W15 グリッドに位置する。土坑 362 に隣接し、IV 層上面で検出したが、切り合う遺構はない。長径 90cm、短径 70cm の楕円形で、底面には段があり、最深でも 20cm 程度しかない。埋土は分層できなかった。出土土器は小破片で、最新は加曾利 B2 式末もしくは上ノ段式初期の D363-4・D363-5 だが、土坑の帰属時期を判断するには貧弱すぎる。

土坑 372 【佐野式】(図 81、第 1 分冊図 33)

S21W9 グリッドに位置する。IV 層上面で検出し、時期不明の土坑 634 を切ることを平面で確認した。長径 110cm、短径 80cm の楕円形で、底面は傾斜し、最深部は 50cm 近い深さがある。埋土や断面に関する所見はない。拳大の礫とともに、出土した土器小破片は、無文深鉢や底部ばかりなので細別はできないが、すべて佐野式の範疇である。有孔球状土製品 c-215 は器種認定に不安を残すが、その形態は晩期の可能性が高い下膨れ形で、土器との整合性が期待できる。貧弱な資料だが純度は高いので、これらを根拠に土坑 372 は佐野式に帰属すると判断する。

土坑 380 【上ノ段 3 式】(図 82、第 1 分冊図 32)

S21W18～S24W18 グリッドに位置する。IV 層上面で検出し、切り合う遺構はない。径 120cm ほどの略円形で、底面は平坦、深さは 100cm ほどある。埋土は最上部が部分的に分層できただけで、ほぼ単層である。出土土器で大きめの破片はすべて上ノ段 3 式で、小破片には上ノ段 1 式が含まれる。問題があるのは中ノ沢 K1 式 D380-11 と、大洞 BC 式細片 D380-12 で、取り上げ時の混入などを考えるにしても、除外できるとは言いきれない。問題は残るがかなり純度の高い資料なので、土坑 380 は上ノ段 3 式に帰属すると判断する。

土坑 384 【佐野 2a 式】(図 82・83、第 1 分冊図 32)

S21W18 グリッドに位置する。土坑 380 に隣接して IV 層上面で検出し、切り合う遺構はない。径 100cm ほどの略円形で、底面はほぼ平坦、深さは 40cm ほどある。埋土は上下に分層でき、自然埋没の可能性はある。出土土器は佐野式とそれ以前に大別でき、後者は上ノ段式がまとまり、佐野式との間に空白がある。略完形の浅鉢 D384-20 は佐野 2a 式の典型例で、D384-14～D384-19 が共存する可能性がある。土製耳飾 2 点 (e-1126、e-1410) は断片で、時期が若干離れているが、新しい方の e-1126 でも佐野 2 式に伴う可能性はほとんどない。遺構図中に示された底部らしい破片は、上ノ段式深鉢 D384-11 で、埋土下層レベル出土である。上ノ段 3 式の小破片 D384-7～D384-10 が伴うだろう。埋土上層は佐野 2a 式、下層は上ノ段 3 式ならば都合だが、遺物は層別に取り上げられてはいない。もはや確認はできないが、埋土上層、下層で時期が異なるようなケースは極めて稀だろうから、土坑 384 の帰属時期は、最新の佐野 2a 式と考えておく。

土坑 388 【堀ノ内 2 式末】(図 83、第 1 分冊図 26)

S12W39 グリッドに位置する。中期中葉 III 期の 34 号住居の調査に伴って、その埋土中で検出し、住居を切ることを平面で確認した。径 50cm 弱の略円形で、深さは 30cm 程度、埋土や断面に関する所見はない。略完形の朝顔形深鉢 D388-1 が出土しており、堀ノ内 2 式末ではなかろうか。土坑 388 の帰属時期は D388-1 で決めてよいが、埋葬とは思えず、墓坑には小さすぎ、土坑の性格は特定できない。

土坑 390 【佐野 2 式?】(図 83・84、第 1 分冊図 27)

S12W27 グリッドに位置する。IV 層上面で検出し、切り合う遺構はない。径 120cm 程度の略円形で、平坦な底面の深さは 30cm ほどである。土坑中央に底面から浮いて拳大の礫が入り、埋土は縦方向に分層できた。出土土器は小破片で、中ノ沢 K 式～佐野 2 式まで幅があり、集中しない。最新は D390-8～D390-11 の佐野 2 式並行で、土坑の帰属時期の決め手としたいところだが、少々貧弱である。耳飾 3 点 (e-262、e-1525)

は同時性がなく、末期的様相のe-262も佐野2式には伴いそうもない。

土坑 391 【時期不明】(図 84、第 1 分冊図 31)

S18W33～S21W33 グリッドに位置する。IV層上面で検出し、切り合う遺構はない。径 40～50cm程度の略円形で、深さは 15cm程度しかない。埋土や断面に関する所見はなく、図示しうる土器もない。完形の白形耳飾 e-448 は耳飾としては小さくはないが、土器と比べれば軽量で、二次的移動の可能性を排除できない。土坑 391 は時期不明とせざるをえない。

土坑 399 【堀ノ内 2 式】(図 84、第 1 分冊図 32)

S18W21 グリッドに位置する。39号住居に隣接し、住居と一緒にIV層上面で検出したが、切り合う遺構はない。径 90cm程度の不整形形で、底面までの深さは 15cm程度しかない。埋土や断面に関する所見はない。出土土器は大破片 D399-3 を始としてほとんどが堀ノ内 2 式である。D399-8 だけは加曾利 B2 式で、これを除外できる根拠はないが、土器の純度はかなり高いので、土坑 399 の帰属時期は堀ノ内 2 式と判断する。

土坑 400 【晩期初頭】(図 84・85、第 1 分冊図 32)

S18W24～S21W24 グリッドに位置する。竪穴 3 に隣接し、IV層上面で検出したが、切り合う遺構はない。径 100cm程度の略円形で、底面には段があり、最深部は 60cm、浅い部分は 30cm程度の深さがある。埋土や断面に関する所見はない。土器片は多いが、称名寺式～中ノ沢 K 式まで後期は満遍なく含まれる。晩期土器は前葉の可能性がある無文深鉢 D400-17 と、佐野式無文深鉢の小破片 D400-18 のみである。一方、内周帯巴文系統の土製耳飾完形品 e-100 は目立つ存在で、壊れやすい遺物だけに、意図的な埋納の可能性が考えられる。同系統の変遷の第 3 段階に当たり、晩期初頭だろう。後期土器はすべて混入品で、佐野式小破片 D400-18 を除外できれば、e-100 で土坑の帰属時期を決めてよいことになる。e-100 は墓坑への副葬品の期待もできなくはないだろう。

土坑 401 【時期不明】(図 85、第 1 分冊図 32)

S21W21 グリッドに位置する。第 1 分冊で報告したとおり、佐野 1b 式～2 式土器が集中するグリッドで、埋裏 5 に関連した現象かと推測した。土坑 401 はIV層上面で検出し、時期不明のピット 141 を切る。長径 70cm、短径 50cmほどの楕円形で、底面には段差があり、最深部の深さは 40cmほどある。埋土や断面に関する所見はない。土器は断片的で、後期ばかりだが、1 点ごとに時期が異なる。土製耳飾 1 点 (e-474) は晩期の産と思われる、土器とは整合しない。いずれも貧弱に過ぎ、土坑の帰属時期の根拠にならない。

土坑 405 【佐野 2 式】(図 85・86、第 1 分冊図 32)

S21W18～S21W21 グリッドに位置する。佐野 1b 式～2 式土器が集中するグリッドの一角である。IV層上面で検出したが、切り合う遺構はない。掘り方は 2 段になっており、上半部は径 160cm前後の不整形で、楕円形断面、深さは 20cm程度ある。下半部は径 80cm程度の略円形と、径 50cm弱の略円形が並列し、掘り方は直で、深さは 70cmほどある。埋土は上半部で水平方向に分層できるので、複数の土坑が切り合う可能性はないとみられる。土器片で唯一大きいのは D405-15 で、佐野式の無文粗製深鉢である。D405-11～D405-19 の小破片もこれに整合的で、有文土器は佐野 2 式の可能性を示す。これらが最新でまとまりも良いので、土坑 405 の帰属時期の根拠となる。それ以外はより古い時期の混入品だろう。

土坑 406 【古相主体の加曾利 B1 式】(図 86～90、第 1 分冊図 32)

S24W21 グリッドに位置する。IV層上面で検出し、時期不明の土坑 745 に切られる。長径 160cm、短径 130cmほどの不整形楕円形を呈すると推測され、平坦な底面には円形の窪みが 1 カ所ある。深さは 20cm程度で、窪み部分は 40cmほどになる。埋土は窪み部分も含めて水平に分層されたので、この窪みが別遺構の可能性はないだろう。出土土器は非常に多く、30 点以上図上復元できたが、その半数は加曾利 B1 式で、最古に近いものが多数含まれる。残り半数は無文土器で精製浅鉢と粗製深鉢がある。この純度の高さからみて、無

文土器も加曾利 B1 式の構成員だと判断でき、無文土器の変遷観を確立するのに大きく貢献する一括品だと判断する。ただし問題もあり、小破片のうち拓影で示した土器には不純物が多い。堀ノ内式は混入品でよいが、D406-60 以下は加曾利 B2 式から佐野 1b 式まで 20 片にもなり、これらの説明がつかない。破片の大きさがまるで異なるので、一括資料の上により新しい小破片が入り込んだと考えるにしても、推測でしかない。問題点を残しながらも、土坑 406 の帰属時期は加曾利 B1 式（古相主体）と判断する。S24W21 グリッドには加曾利 B1 式が多く、それらも参考のために図示した。

土坑 407 【加曾利 B1 式前半】（図 90・91、第 1 分冊図 32）

S24W21 グリッドに位置する。土坑 406 に隣接し、切りあった可能性もあるが、中間に両者を切る土坑 745 が入るので、関係は不明である。IV 層上面で検出し、いずれも時期不明の土坑 411 と土坑 745 に切られる。径 100cm 前後の不整形形で、底面には段差があり、南半が大きく窪む。北半の深さは 15cm、南半は 45cm ほどで、埋土や断面に関する所見はない。出土土器は少ないが中期の 2 片を除外すると、加曾利 B1 式前半に集中するので、これで土坑の帰属時期を判断した。ほぼ同時期の土坑 406 と接するように構築されており、何らかの意図があつてのことなのだろう。

土坑 408 【佐野式】（図 91、第 1 分冊図 32）

S24W21 グリッドに位置する。土坑 406・土坑 407 に隣接しており、IV 層上面で検出し、切り合う遺構はない。径 80cm 弱の略円形で、底面には段差があり、深さは 40～50cm ほどである。埋土や断面に関する所見はない。出土土器で唯一の半完形品 D408-3 は異相の口唇肥厚鉢で、晩期初頭に納まるとは限らない。D408-5～D408-10 は佐野式で、文様が少なく細別は難しい。土坑 408 は、佐野式の幅の中に位置付くだろう。D408-3 の評価は難しいが、佐野式との接点がないとは言いきれない。耳飾 e-4049 は時期不明である。

土坑 414 【時期不明】（図 91・92、第 1 分冊図 32）

S24W24 グリッドに位置する。IV 層上面で検出し、切り合う遺構はない。長径 160cm、短径 80cm ほどの楕円形で、底面は平坦で深さは 30cm 程度だが、2 か所に窪みがある。西端の窪みの深さは 50cm ほどあり、埋土は垂直方向に分層できたので、柱痕跡か別遺構の可能性もある。出土土器は小破片で、D414-1～D414-6 は堀ノ内 2 式のまとまりだが、D414-9 は加曾利 B1 式で、中ノ沢 K 式や中ノ沢 B 類型などもあって散漫である。ハート形板状土偶 d-29 は堀ノ内 2 式土器と整合するだろう。土坑 414 の帰属時期は決め手がない。

土坑 422 【氷 1 式】（図 92、第 1 分冊図 32）

S24W18 グリッドに位置する。堀ノ内 2 式後半の 38 号住居の調査に伴って、IV 層上面で検出し、住居を切ることを平面で確認した。径 80cm 程度の略円形、底面は斜位で、30～40cm の深さがある。埋土は単層で、検出面付近に人頭大以上の礫 1 個が入り、拳大の礫も伴っていた。出土土器は少ないが、その中で最新の氷 1 式の破片（D422-4～D422-7）が、最多で大きめなので、土坑の帰属時期の根拠とする。

土坑 429 【佐野 1 式】（図 92～94、第 1 分冊図 32）

S27W24～S27W27 グリッドに位置する。中期中葉の 33 号住居の調査に伴って IV 層上面で検出され、住居を切ることを平面で確認した。長径 200cm、短径 130cm ほどの楕円形で、長径の両端の底面は窪む。底面中央までの深さは 50cm 弱、窪みまでの深さは 70cm ほどある。埋土や断面に関する所見はない。出土土器は多く、大形破片も含まれる。その半分は後期土器だが、晩期土器（D429-28～D429-40）は佐野 1a 式～1b 式の幅の中に入る。無文粗製土器では D429-47 以外は晩期の隆帯文土器と同一技法のものばかりで、佐野 2 式よりは古い様相だと判断できる。D429-47 は佐野 2 式の大破片だが、そのほとんどがグリッド出土破片で、それに土坑出土の細片 1 片が接合しただけなので、純然たる土坑 429 出土品とは言い難い。土坑 429 は佐野 1 式の幅の中に帰属すると判断する。

土坑 431 【佐野 1a 式?】(図 94・95、第 1 分冊図 32)

S27W27 グリッドに位置する。晩期初頭～佐野 1a 式の 29 号住居の調査に伴ってその埋土中で検出し、住居を切ることを平面で確認した。長径 100cm、短径 60cm の楕円形で、深さは 15cm に満たず、埋土や断面に関する所見はない。出土土器は少ないが、最大破片 D431-5 や D431-6～D431-8 は佐野 1a 式の構成・共存要素で、それより新しい土器はないので、まとめ方は良好である。ただし、土坑 431 が切る 29 号住居も佐野 1a 式を含んでいる。住居の真ん中に位置するので、土坑 431 の埋土は 29 号住居に由来するはずで、土器はすべて 29 号住居に由来する可能性が捨てきれない。土坑 431 の帰属時期は佐野 1a 式の可能性を残しつつも、確定できない。

土坑 433 【時期不明】(図 95、第 1 分冊図 32)

S30W18～S30W21 グリッドに位置する。IV 層上面で検出し、土坑 561 を切ることを平面で確認した。径 110cm 程度の略円形で、底面は緩くくぼみ、最深の中央部分の深さは 40cm ほどある。埋土は水平方向に 3 層に分層され、自然埋没の可能性がある。出土土器は少ないが、小破片を繋げて図上復元できた D433-5 が目立つ。安行 3a 式と思われ、D433-6 も総合的で、これで土坑の帰属時期を判断したいところだが、大きな問題がある。それは土坑 433 に切られる土坑 561 出土土器の中に浮線文土器が確実に含まれ、その破片が一番大きいことである。切り合いの誤認もありえなくはないが、D433-6 は接合した小破片からの推定復元なので、その破片が 2 次的に動いている可能性も排除できず、土坑の時期の判断根拠にするのは無理だった可能性もある。土坑 433 は時期不明とせざるをえない。

土坑 447 【時期不明】(図 95、第 1 分冊図 37)

S39W18～S39W21 グリッドに位置する。28 号住居に隣接し、それと同時に IV 層上面で検出した。時期を確定できない土坑 258 を切る。径 70cm 程度の略円形で、深さは 40cm ある。水平方向に分層でき、下層には拳大の礫が多数含まれていた。出土土器は小破片ばかりで、図化した D447-7 も破片は小さい。佐野 1a 式並行～佐野 2b 式の範囲に収まるが、その中で集中する時期はない。切り合う土坑 258 の時間幅とも重なり、似たような散漫さである。量も多いとは言えないので、土坑の時期決定の根拠には使にくい。ハート形中実土偶と併存する別系統の土偶 d-99 の主要部位が出土しているが、土器の時間幅より大幅に古く、混入品だと判断する。

土坑 451 【時期不明】(図 96、第 1 分冊図 37)

S39W27～S42W27 グリッドに位置し、IV 層上面で検出した。25 号住居の炉から 2m も離れておらず、住居と重なる位置にあると思われるが、相互の関係は不明で、他に切り合う遺構はない。長径 300cm、短径 160cm の不整楕円形で、40cm 弱の深さがあるが、埋土や断面に関する所見はない。出土土器は中期末～佐野式までである。佐野式の無文土器(D451-13～D451-15)は破片が小さくて細別が難しく、D451-10 などと整合するかどうかかわからない。土坑 451 の帰属時期の決め手にはなりにくい。土製耳飾 3 点(e-1099、e-4058・e-4059)はどの土器に伴うのか決められない。

土坑 457 【佐野 1b 式～2a 式】(図 96～99、第 1 分冊図 37)

S36W24～S36W27 グリッドに位置する。26 号住居炉、配石 20、人面付土版埋納土坑などと隣接し、ほぼ同時に IV 層上面で検出した。直接的な切り合いは把握できなかった。径 120～110cm の略円形で、深さは 50cm ほどある。埋土や断面に関する所見はない。

出土土器は多く、後期～晩期中葉まで時間幅があるが、破片が大きく量もあるのは佐野 1b 式～2a 式である。D457-21・D457-22 は佐野 1b 式、D457-29～D457-31 は佐野 2a 式の可能性があるが、断定には少々不安を残す。無文粗製深鉢には、晩期隆帯文深鉢の技法をもつ D457-37～D457-40 と、佐野 2 式深鉢の技法をもつ D457-45～D457-55 があり、後者のほうが多い。前者から後者へ主体が入れ替わると推

測するが、その切り替え時期はまだ把握できておらず、佐野式の幅の中としか言えない。土器の様相から土坑 457 は佐野 1b 式～2a 式の幅の中に帰属すると判断する。26 号住居とほぼ同時期で、土製耳飾 2 点 (e-1188、e-1398) は佐野 2 式より古いだろう。土坑 457 は 26 号住居から 1m も離れておらず、時期も一致するなら、26 号住居の施設であった可能性が出るが、確定のしようはない。後述する人面付土版 c-1 埋納土坑の項で示すとおり、c-1 は 26 号住居や土坑 457 の年代観より若干古そうなので、土坑 457 が c-1 埋納土坑を切っていた可能性はあるが、これも確定はできない。

土坑 459 【時期不明】(図 100、第 1 分冊図 28)

S6W9 グリッドに位置する。IV 層上面で検出し、時期不明のピット 118 を切ることを平面で確認した。径 50cm 程度の略円形で、底面には小さな窪みが残り、底面中央までの深さは 30cm 弱である。図示できた土器片 3 片は晩期に属するが、小さすぎて土坑の帰属時期を決める資料にならない。

土坑 462 【中期中葉 IV 期】(図 100、第 1 分冊図 31)

S30W39～S30W42 グリッドに位置する。IV 層上面で検出し、切り合う遺構はない。径 60cm 程度の略円形で、底面には段差があり、深さは西寄り が 40cm ほど、東寄り は 30cm ほどである。埋土は段差付近で柱痕跡状に縦方向に分層できたので、土坑 462 は柱穴の可能性がある。中期中葉 IV 期の深鉢把手 D462-1 が出土しており、大きくて重量もあるので、これを根拠に土坑の帰属時期を判断した。

土坑 468 【時期不明】(図 100、第 1 分冊図 32)

S27W21 グリッドに位置する。IV 層上面で検出し、切り合う遺構はない。径 50cm 程度の略円形で、深さは 30cm ほどある。埋土や断面に関する所見はない。後期中葉～末葉の土器小破片が出土しているが、小さすぎる上散漫で、土坑の帰属時期決定根拠にはできない。

土坑 469 【氷 1 式後半～氷 2 式】(図 100・101、第 1 分冊図 28)

S6W9 グリッドに位置する。IV 層上面で検出し、切り合う遺構はない。径 70cm 程度の略円形、底面は平坦で、深さは 20cm ほどしかない。埋土は斜め方向に分層できたが、ブロック状の埋土の可能性があり、意図的な埋め戻しを考慮しておく。出土土器の最新は浮線文期で、大形破片を含むので、土坑 469 が浮線文期に帰属するのは間違いない。浮線文土器は D469-15～D469-22 が該当する。大半は細密条痕が多用される氷 1 式以降の甕や深鉢である。大破片 D469-21 は口外帯が形骸化しかけており、肩部の稜も失われるが、D469-23 と一括して取り上げられた。口外帯と細密条痕をもつ D469-17 は、2 次焼成を受けて器壁が発泡しており、観察は不能である。これらは氷 1 式後半～氷 2 式と考えざるをえない。D469-23 は遠賀川式の壺で、遺構断面図で遺構検出面より上位から出土した破片が該当する。復元はできたが、径の 1/3 程度しか残っておらず、半完形品というよりは大形破片である。埋置ではなく、投棄・遺棄したような状況だと推測する。D469-23 の底面は全面的に欠失する。胎土が異なり、器面の風化も進んでいる。粘土帯の接合線が欠損する傾向が強く、粘土帯を乾燥させすぎたまま成形したと推測する。内傾接合に見える部位が何力所かあるが、欠損に邪魔されて少々不安である。体部は丸く、扁平さは感じられない。肩部には微かな段が残され、その下位に細く鋭い沈線が 2 条描かれる。段はその上位側をわずかに削って作出するが、痕跡化している。その位置は粘土帯の接合線に一致するが、内面側には対応する段や粘土帯の食い違いは見られない。頸部には 1 条の隆帯が貼り付けられ、その裾を丁寧にナデて、削り出したかのように見える。口縁部は大きく開き、丸い口唇部は外面側を向く。口端直下に焼成前穿孔の小孔 1 個が残される。対になる孔はない。石黒立人の編年案 [石黒 2011] に従えば、前期の 2 期か 3 期に該当しそうである。氷式甕と遠賀川式壺が共存する絶好例だと推測されるが、土坑 469 での組み合わせが最近の編年観に合致するかどうか、不安が残る。

土坑 470 【時期不明】(図 101、第 1 分冊図 37)

S42W24 グリッドに位置する。土坑 255 で記述したとおり、25 号住居の調査中にⅣ層上面で検出したと思われる、土坑 555 が土坑 470、土坑 255 に切られるのを平面で確認した。径 60cm 弱の正円形で、深さは 30cm ほどである。出土土器は加曾利 B2 式の小破片 2 点のみで、石製垂飾が 1 点出土している。土器片は土坑の時期決定の根拠としてはいかにも貧弱で、土坑 255 と同様に加曾利 B2 式期の 25 号住居埋土中に構築された為に混入した破片の可能性が高いだろう。

土坑 475 【時期不明】(図 101、第 1 分冊図 27)

S12W18 ～ S12W21 グリッドに位置する。Ⅳ層上面で検出し、切り合う遺構はない。径 60cm ほどの略円形で、底面には段差があり、深さは 20 ～ 45cm ほどである。埋土や断面に関する所見はない。出土土器は小破片ばかりで、加曾利 B2 式～佐野 2 式まであり、散漫でまとまらない。土坑 475 の帰属時期は不明である。

土坑 478 【時期不明】(図 102、第 1 分冊図 28)

S12W12 ～ S12W15 グリッドに位置する。Ⅳ層上面で検出し、切り合う遺構はない。長径 80cm、短径 40cm の不整形で、小穴が 2 個残される底面までの深さは 20cm ほどしかない。出土土器はわずかで小破片ばかりだが、中ノ沢 K 式でまとまり、山形土偶 d-154 も整合する可能性がある。とはいえあまりに貧弱なので、これらを土坑 478 の帰属時期の根拠とするのははばかれる。

土坑 481 【時期不明】(図 102、第 1 分冊図 33)

S15W9 グリッドに位置する。Ⅳ層上面で検出し、切り合う遺構はない。径 60cm ほどの円形で、底面には段差があり、そこで縦方向に分層できたので、2 基の土坑の切り合いか、木柱などの埋設の可能性もある。深さは北側が深く 30cm 強、南側が浅く 10cm 強である。出土土器は細片ばかりで、帰属時期は決められない。土製耳飾 3 点 (e-773、e-970、e-4005) はすべて時期が異なるが、そのうちのどれかとポスト山形系土偶新段階の d-251 が整合する可能性はある。耳飾も土偶も小さすぎて 2 次の移動を排除できず、共存関係は保証できない。

土坑 486 【時期不明】(図 102、第 1 分冊図 22)

谷状低地の N9W0 グリッドに位置する。Ⅲ層を除去したところで検出したが、検出面の層位は判然としない。B 区調査区域の南端にあたり、一部は調査区域外になった。長径 150cm 以上、短径 100cm 程度の不整形で、底面は平坦だが小さな段差があり、深さは 10 ～ 20cm しかない。埋土は分層できなかった。細長い形態からして、溝の一部の可能性もあろう。出土土器は比較的多く、中ノ沢 K 式がまとまっていて大形破片もある。だが、晩期初頭 (D486-9) や前葉 (D486-12・D486-13) もあって、帰属時期は特定できない。ボタン状の土製品 c-78、変遷の末期に近い土製耳飾 e-1198 も、どの土器と整合するのかわからない。

土坑 499 【時期不明】(図 103、第 1 分冊図 27)

S12W21 グリッドに位置する。加曾利 B1 式～B2 式の 31 号住居の調査に伴って検出され、住居床面と時期不明の土坑 680 を切ることを平面で確認した。径 70cm ほどの不整形円形、底面は斜めで、最深部の深さは 40cm ほどになる。埋土は水平方向に分層できた。出土土器は小破片ばかりで、最新は佐野式の無文粗製深鉢 D499-4 や深鉢底部 D499-7 である。土坑の時期決定根拠としては少々貧弱で、時期不明とせざるをえない。土製耳飾 2 点 (e-396、e-1343) は佐野式土器と整合するかどうかかわからない。

土坑 502 【佐野 1b 式～2b 式】(図 103～106、第 1 分冊図 32)

S15W21 グリッドに位置する。堀内 2 式前半の 39 号住居の調査に伴って検出され、住居の張り出し部を切り、時期不明のピット 130 に切られるのを平面で確認した。径 120cm ほどの略円形で、底面は鉢形、最深部の深さは 40cm ほどである。埋土は上下に分層でき、自然埋没の可能性もある。出土土器はかなり多く、大破片もあるが、層別に取り上げられてはいない。土坑の帰属時期を判断する材料としては、D502-48 ～

D502-78を挙げることができる。半完形品を含み、精製土器も多い。丸底で中仕切をもつ小形浅鉢 D502-52は、その特異な形態で注目されるが、底面全体を画面にして描かれる図柄は、土坑 384 出土の D384-20 と近似し、同一系譜で前後関係にあるだろう。D384-20 は併用される単位文から佐野 2a 式だと判断され、D502-52 はそれに先行しそうだが、その確定には慎重な検討を要する。この特異な器種の変遷過程を把握する鍵は、この 2 点にあるだろう。その他の精製土器も D502-52 と近接するのは確実で、佐野 1b 式～2b 式の時間幅の中に入ると考える。第 4 分冊で改めて検討することにし、この時間幅を土坑の帰属時期の範囲としておきたい。土製耳飾 e-413 は時期不明だが混入品の可能性が高い。

土坑 509 【晩期初頭?】(図 106、第 1 分冊図 27)

S12W18 グリッドに位置する。IV 層上面で検出し、切り合う遺構はない。径 70cm ほどの円形で、中央に柱痕跡サイズの窪みがあるが、埋土の所見がなく、確定できない。深さは 30～40cm ほどである。無文土器細片しか土器はない。晩期初頭との期待がもてる完形の土製耳飾 e-4162 は出土状況の所見を欠くが、欠損しやすい環形耳飾の完形品なので、土坑への埋納の可能性は十分にあり、副葬品の期待ももてる。埋納品なら土坑の帰属時期をこの耳飾で決めてよいことになる。

土坑 521 【時期不明】(図 106、第 1 分冊図 32)

S18W21 グリッドに位置する。IV 層上面で検出し、切り合う遺構はない。径 45cm ほどの円形で、深さは 45cm ほどある。埋土や断面に関する所見はない。出土土器は少量の小破片で、恐らくすべて後期だが、土坑 521 の帰属時期の根拠には貧弱すぎる。土製耳飾 3 点 (e-513、e-4056) は晩期の可能性が高い。

土坑 525 【佐野 1a 式後続】(図 106、第 1 分冊図 28)

S9W12 グリッドに位置する。IV 層上面で検出し、切り合う遺構はない。長径 60cm、短径 30cm の楕円形で、深さは 30cm ほどある。埋土や断面に関する所見はない。出土土器は小破片ばかりだが、精製土器は佐野 1a 式に後続する段階で、無文粗製深鉢もそれに整合的な資料に限られる。破片は小さいが純度は高いので、土坑 525 の帰属時期の根拠としたい。

土坑 526 【氷 1 式】(図 107、第 1 分冊図 28)

S6W6 グリッドに位置する。IV 層上面で検出し、切り合う遺構はない。径 50～60cm の略円形で、深さは 30cm ほどある。埋土や断面に関する所見はない。出土土器は小破片ばかりだが、最新は浮線文期・氷式で、半数以上を占める (D526-4～D526-7)。やや貧弱だが、これを土坑 526 の帰属時期の根拠にしたい。

土坑 530 【時期不明】(図 107、第 1 分冊図 32)

S30W18～S30W21 グリッドに位置する。IV 層上面で検出し、切り合う遺構はない。径 50cm ほどの略円形で、深さは 80cm ほどある。埋土や断面に関する所見はない。出土土器は小破片ばかりで、集中する時期もなく、土坑の帰属時期は決められない。

土坑 534 【佐野 2 式】(図 107、第 1 分冊図 37)

S33W18～S33W21 グリッドに位置する。IV 層上面で検出し、切り合う遺構はない。径 50～60cm ほどの略円形で、底面には段差があり、深さは 40cm ほどある。埋土や断面に関する所見はない。出土土器は小破片ばかりだが、最新の佐野 2 式がまとまっており (D534-1～D534-3)、貧弱ではあるが土坑 534 の帰属時期の根拠としたい。

土坑 554 【中ノ沢 K 式?】(図 107、第 1 分冊図 36)

S45W30 グリッドに位置する。IV 層上面で検出し、切り合う遺構はない。径 35cm ほどの円形で、深さは 30cm ほどある。埋土や断面に関する所見はない。出土土器はわずかだが、深鉢底部の大破片 D554-2 は、中ノ沢 K 式 D554-1 と整合しそうで、貧弱ながら一括性が期待できる。これで土坑 554 の帰属時期を決めるなら、中ノ沢 K 式期唯一の遺構になるが、少々弱い。土製耳飾 e-1006 は晩期初頭に位置付く。

土坑 555 【加曾利 B2 式後半より新】(図 108、第 1 分冊図 37)

S42W21～S42W24 グリッドに位置する。土坑 255 で述べたとおり、加曾利 B2 式後半の 25 号住居の埋土を切って構築された可能性があり、土坑 255 と土坑 470 に切られることは平面で確認できた。短径 70cm、長径 90cm 以上の楕円形で、深さは 30cm 程度に過ぎず、底面付近で検出できた土坑である。埋土は水平方向に分解できた。出土土器片はわずかで加曾利 B2 に限定されるが、25 号住居埋土に由来すると考えれば十分説明がつく。土坑 255 同様、25 号住居より新しいが時期は特定できない。

土坑 557 【加曾利 B2 式後半】(図 108、第 1 分冊図 37)

S39W24 グリッドに位置する。IV 層上面で検出し、切り合う遺構はない。径 50cm ほどの円形で、深さは 40cm ほどある。埋土や断面に関する所見はない。出土土器は小破片ばかりだが、加曾利 B2 式後半に集中している。上ノ段式細片 D557-11 だけは問題だが、土坑 557 の帰属時期は加曾利 B2 式後半と判断したい。

土坑 561 【浮線文期?】(図 108、第 1 分冊図 32)

S30W18 グリッドに位置する。堀ノ内 2 式後半の 38 号住居の調査に伴って IV 層上面で検出し、住居を切り、土坑 433 に切られるのを平面で確認した。長径 90cm、短径 60cm ほどの楕円形で、深さは 50cm ほどある。埋土や断面に関する所見はない。土器は小破片ばかりで、中期～晩期末までである。最新の浮線文土器は D561-9・561-10 の 2 点で、D561-9 は他より破片が大きい。これで土坑の帰属時期を決めてよいか少々迷う。山形土偶 d-125 に対応する土器はないだろう。なお、土坑 433 との切り合いの問題は、土坑 433 の項を参照されたい。

土坑 569 【加曾利 B2 式より新】(図 109、第 1 分冊図 37)

S39W21 グリッドに位置する。加曾利 B2 式の 28 号住居の調査に伴って検出され、住居を切ることを平面で確認した。径 45cm 程度の不整形円形、底面は摺鉢形で、深さは 30cm ほどある。埋土や断面に関する所見はない。出土土器は小破片で、加曾利 B2 式以降のものばかりだが、特定の時期に集中せず、散漫すぎて土坑の時期の決め手にはならない。

土坑 590 【時期不明】(図 109、第 1 分冊図 38)

S39W15 グリッドに位置する。佐野 1b 式～2a 式の 40 号住居の調査に伴って検出され、住居を切ることを平面で確認した。長径 100cm、短径 70cm の楕円形で、深さは 80cm ほどある。埋土や断面に関する所見はない。出土土器は中期後葉 IV 期でまとまっており、破片も大きい。だが、中期の土坑だとすれば、発掘所見の切り合い関係と完全に矛盾する。一方、佐野式の破片も 3 点あり (D590-10～D590-12)、これらは 40 号住居の埋土に由来するのではないか。土坑 590 は佐野 2a 式の 40 号住居を切って構築され、住居埋土の土器片が埋没に伴って入り込んだと見れば、矛盾は解決する。土坑 590 の帰属時期は特定できない。ただし深い土坑なので中期の可能性は残る。土坑 590 とほぼ同じ位置に中期の土坑もあったが、調査時には気づかず、1 つの土坑だと判断したという解釈だが、憶測交じりなので採用は控える。

土坑 609 【佐野 1a 式】(図 109～111、第 1 分冊図 36)

S36W33～S39W33 グリッドにかけて位置する。堀ノ内式 27 号住居の調査に伴い、その埋土中で検出され、住居を切ることを平面で確認した。径 80cm の円形で、深さは 20cm ほどしかない。埋土や断面に関する所見はない。土坑中には人頭大～拳大の礫が多量に入っていた。出土土器は多いが、大きな破片は少ない。後期末～晩期初頭も少々あるが、佐野 1a 式やそれと共伴する降帯文土器が主体を占め (D609-13～D609-30)、積極的に佐野 2 式だといえるのは D609-41 くらいしかない。無文粗製土器も大半は降帯文深鉢と同一技法で、佐野式の技法がまだ確立していないのではなかろうか。佐野 1a 式の良好なまとまりだと思われ、土坑 609 の帰属時期の根拠になる。

土製耳飾 7 点 (e-514、e-520、e-696、e-984、e-1115、e-1524) は、環形耳飾古段階の e-696 と、同新

段階初頭の e-984 を除けば、時期限定が難しい。土器と耳飾の編年対比はまだできないが、この 2 点は佐野 1a 式よりは古相なので、混入品とせざるをえないだろう。編年上の位置付けが困難な 5 点は、佐野 1a 式土器との整合性を欠くわけではない。不明土製品 c-374 や遮光器系土偶断片 d-312 の、土器との整合性はわからない。

土坑 624 【佐野式】(図 111、第 1 分冊図 31)

S21W33～S24W33 グリッドに位置する。Ⅳ層上面で検出し、切り合う遺構はない。径 70cm の円形で、深さは 30cm 弱である。埋土や断面に関する所見はない。大形破片が出土しており、復元できて無文粗製土器 D624-1 となった。佐野式の技法で製作されており、これを根拠に土坑 624 の帰属時期を判断した。

土坑 631 【時期不明】(図 111、第 1 分冊図 38)

S42W15 グリッドに位置する。佐野 1b 式～2a 式の 40 号住居の調査に伴ってその埋土中で検出され、住居を切り、時期不明の土坑 632 に切られるのを平面で確認した。径 30～40cm の不整形円形で、底面には段差があり、深さは 15cm に満たない。埋土や断面に関する所見はない。石冠が 1 点出土しているが、出土土器で図示しうるものはないので、帰属時期は決められない。

土坑 634 【時期不明】(図 111・112、第 1 分冊図 33)

S21W9 グリッドに位置する。Ⅳ層上面で検出し、佐野式の土坑 372 に切られるのを平面で確認した。長径 150cm、短径 100cm の楕円形で、底面中央が一段窪んでおり、中央部分は 50cm、縁辺部分は 40cm 弱の深さがある。埋土や断面に関する所見はない。出土土器は小破片で、中期が半数以上を占めるが、最新は佐野式の細片 D634-14・D634-15 である。取り上げ時の混入の可能性が排除できず、この 2 片で土坑の時期を決めることはできない。土坑 634 が佐野式期だったとしても、同時期ならば土坑 372 との切り合いに矛盾は生じない。

土坑 652 【時期不明】(図 112、第 1 分冊図 32)

S15W24 グリッドに位置する。Ⅳ層上面で検出し、切り合う遺構はない。長径 120cm、短径 80cm の不整形形で、深さは 10cm に満たず、土坑底面の残骸の様相である。埋土や断面に関する所見はない。人頭大以上の大形礫が底面付近に入っていた。図示しうる土器は細片 1 片しかなく、土坑の帰属時期は決められない。位置付け不明の土偶 d-348 が出土している。

土坑 654 【中葉Ⅴ期～後葉Ⅰ期】(図 112、第 1 分冊図 30)

S21W48～S21W51 グリッドに位置する。加曾利 B2 式後半 7 号住居の炉周辺の調査中に検出されたので、土坑 654 の上に 7 号住居の床が構築されたと判断した。また、平安時代の 6 号住居とわずかに切り合い、平面では確定できなかったが、住居に切られるのはまちがいない。径 100cm 程度の不整形円形、底面は楕円形で、深さは 50cm 弱である。埋土や断面に関する所見はない。出土土器は中期に限定され、中葉Ⅱ～Ⅲ期の D654-1・D654-2 と、中葉Ⅴ期～後葉Ⅰ期の D654-3～D654-5 に分けられるので、後者を根拠に土坑 654 の帰属時期を判断した。

土坑 750 【佐野 1b 式～2a 式】(図 112・113、第 1 分冊図 36)

S42W30 グリッドに位置する。Ⅳ層上面で検出し、時期不明の土坑 751 を切り、現代の暗渠排水路に切られる。径 70cm ほどの円形で、深さは 20cm に満たない。埋土や断面に関する所見はない。出土土器は小破片ばかりだが、ほとんどが佐野 1b 式～2a 式の幅の中に入り、それより新しいものはない。唯一の大形破片の無文粗製深鉢 D750-9 もそれに整合的で、これらを根拠に土坑 750 の帰属時期を判断した。

(2) ピット

縄文時代のピットは 206 基検出された。第 1 分冊の遺構配置・土層図(図 17～42)に、その平面図・土

層図(断面図)を掲載した。土坑と同様の課題を内包しており、矛盾も含んでいる。その中から特記すべき内容をもつピットを2基を取り上げる。

ピット 51 【晩期初頭～前葉前後】(図 113、第 1 分冊図 37)

S42W27 グリッドに位置する。IV層上面で検出し、切り合う遺構はない。径 30cm 弱の円形で、深さは 40cm ほどある。埋土や断面に関する所見はない。出土した大形破片 P51-1 は無文粗製深鉢で、晩期隆帯文深鉢の技法で製作されており、晩期初頭～前葉付近に位置付くだろう。P51-2 も整合しそうなので、これらを根拠に、ピット 51 の帰属時期を判断した。

ピット 89 【佐野式】(図 113、第 1 分冊図 28)

S6W6 グリッドに位置する。IV層上面で検出し、切り合う遺構はない。径 40cm ほどの略円形で、深さは 20cm ほどしかなく、底面には段差がある。埋土や断面に関する所見はない。出土した大形破片 P89-1 は深鉢底部で、佐野式深鉢の技法で製作されており、佐野式の幅の中に位置付くだろう。これを根拠に、ピット 89 の帰属時期を判断した。

(3) 遺物集中出土地点

ア 人面付土版埋納土坑(図 114、第 1 分冊図 37)

人面付土版 c-1(第 3 分冊図 158)は発見当初から注目を集めたため、概報[竹原 1997]の刊行以前に、研究ノート[竹原 1995]として早々に公表された。最終報告である本編では、その研究ノートの内容との重複を含みつつも、改めて報告する。事実関係のうち、出土状況については変更すべき点はないが、土層や出土位置などについては本報告に合わせて表現を変更し、隣接する遺構との関わりを追加して報告する。土版自体の観察結果や評価については第 3 分冊・遺物編 1 で報告する。2 つの分冊に分かれた報告となったが、第 3 分冊も併せてお読み頂きたい。

c-1 の出土地点は、南微高地上で S36W24 ～ S39W27 の 4 グリッドの境界付近の、S36W27 グリッドに位置する。周囲には 26 号住居があり、c-1 出土地点はその範囲と重複する可能性がある。また、土坑 457 と配石 20 も隣接するが、直接切り合うことはなかった。c-1 は第 III 層の黒褐色土層下部から発見された。長辺 15cm、上部が平坦で略三角形の自然礫を据え、その上に二分された c-1 が重ねて置かれていた。礫の上面は南方向に傾斜しているため、c-1 も南方向に傾いている。c-1 の重ね方は規則性がある。c-1 は上下方向にほぼ等分割されており、2 つの破片はほぼ同形・同大である。2 つの破片は正面(表面)を下に、背面(裏面)を上に向け、破断面を北向きに、端部を南向きに揃え、人面が付いた上半部の破片を上、下半部の破片を下にして、重ねられていた。掘り方は確認できなかったが、土坑かピットの中に埋納されていた可能性が高い。そうでなければ、このような規則的・意図的な位置関係が長期間保てるはずはない。2 つ重ねた土版の破片を、土坑・ピットの底面の礫の上に埋納した。その礫は南方向に傾いており、土版破片の重ねた端部は、南方向に向けられた。土版破片は水平ではなく、端部が幾分か下を向くように置かれたとみられる。埋納の仕方には一定の作法があったと考える。

二分された c-1 のうち、下半部の正面は最も遺存状況が良好で、ミガキによる強い光沢を保持し、赤色顔料も明瞭に観察できる。次に良好なのは上半部正面で、部分的ながら光沢を残す。それに対して下半部背面・上半部背面は、ミガキ部位であっても光沢はほとんど残らず、赤色顔料もごくわずかしか観察できない。埋納時に下向きにされた面のほうが明瞭に状況が良く、下側に置かれた方が最も良好であった。一方、上向きにされた面は明らかに風化が進んでいた。これは当然の現象だろうが、その差はかなり大きいので、上向きに置かれた面は、一定程度風雨に晒された可能性があるだろう。すなわち、土坑の底に置かれた後、一定の時間が経過してから埋められた、あるいは埋没したと考えるべきだろう。また深い土坑なら、c-1 の上向

き面が風化する間もなく早々に崩落するだろうから、土坑は浅かったと考える。c-1を浅い土坑底に置いたまま放置し、自然埋没に任せたという可能性もあるのではなかろうか。

c-1の出土地点が土坑かピットだったとすれば、人面付土版埋納土坑と呼ぶべきで、隣接する26号住居、土坑457、配石20との関わりを再検討しておく必要がある。発掘時点で切り合いは把握できなかったのだが、それぞれの遺構の構築時には重なり合う位置関係にあった可能性を残すからである。

縄文晩期中葉・佐野式期と推定される26号住居は、遺構編1で報告したとおり、炉の周辺以外では床面が把握できず、掘り方も不明であった。だが、人面付土版埋納土坑は炉の縁辺から150cm、炉の中心からは200cmしか離れておらず、26号住居がかなり小ぶりだったとしても、その掘り方の範囲と重なる可能性は高い。炉周辺出土の土器から、26号住居は佐野1式後半～2式期と判断したが、佐野2b式まで下がる可能性はないだろう。c-1の帰属時期は遺物編1で詳述するが、佐野1a式でも古相に対応するのではなかろうか。だとすれば、人面付土版埋納土坑が先行し、後続する26号住居の掘り方によって全面的に削平され、その底部だけが残ろうじて残された、という可能性がでる。c-1の出土レベルは26号住居床面より10cmほど高いが、床面は炉周辺にしか残存せず、傾斜をもっていたことも十分あるので、人面付土版埋納土坑底面が26号住居構築時の削平を免れたとする考え方は、無謀ではないだろう。

配石20は掘り方不明で、確実な帰属遺物もない。配石20とc-1は50cmしか離れていないが、人面付土版埋納土坑底面の礫の上と、配石20の上面がほぼ同レベルである。両者が一体の遺構であったのなら、人面付土版埋納土坑が配石20をも取り込む大規模な土坑でなければ、つじつまが合わなくなる。配石20とc-1を取り込んだ大規模土坑が、26号住居に削平されてその底面だけが残ったというのは、かなり強引な解釈だろう。それよりも、配石20を構成する礫のレベルは26号住居炉縁石のレベルにほぼ等しいので、住居縁辺、壁近くの施設の可能性のほうが残るだろう。方形石囲い住居のような構造が晩期にまで継承されたかどうかは不明なので、結論は出せない。

土坑457は佐野1b式～2a式土器が多数を占め、その幅の中に帰属する土坑だと判断した。26号住居とほぼ同時期の可能性が高く、人面付土版埋納土坑よりは新しいだろう。土坑457が人面付土版埋納土坑の一角を切っていた可能性はあるが、確定はできない。

c-1は意図的に均等に二分されたことは確実に、埋納という形で使命を終えた。土偶、土版、中空動物形土製品などは、祭祀における中核的な用具という共通性をもつだろう。それらの中で形態が単純な土版だけが、均等に叩き割ることが可能ではないか。c-1の均分にこだわるなら、それは土版ならではの現象だといえよう。エリ穴遺跡からは中核的な祭祀用具が多数出土している。それらはすべて使命を終えた後に、最終的には廃棄されている。廃棄の方法は2つある。1つは谷状低地縁辺の廃棄場や、南微高地上のいずれかの位置に、他の道具と同様に、投棄する方法である。もちろん、廃棄に伴う儀礼執行後のことだろうし、投棄ではなく安置だったかもしれないが、それは痕跡として残らない。祭祀用具の多くはこの第1の方法で廃棄された。c-1は土坑への埋納という第2の方法で廃棄された。丁寧な安置なのか、徹底した毀損や隔離なのか、ともかくも特別な扱いを受けたことは間違いない。遺物編1で取り上げる中空動物形土製品c-14も埋納による廃棄の可能性が残る。

イ 黒曜石集中出土地点(図114、第1分冊図31)

南微高地、S30W36グリッドに位置する。発掘では把握できなかったが掘り方が存在した可能性が高く、土坑やピットなどの遺構の中に含めて考えるべきだと判断する。この遺構からは黒曜石の原石4点がまとまった状態で出土した。原石の重量は91.0g～138.8gと比較的重い。いずれも表面は剝離面状を呈することから、流通の過程でサイズが均質化したものだろう。出土状況から見て、この遺構は小形剥片石器の素材

が貯蔵されていた場所であると推測する。

6 谷状低地の廃棄場 (図 115～123)

(1) 概観

南嶺高地の北縁、谷状低地にかかる斜面には大量の遺物が廃棄される。炬と土坑も少数ながら分布するので、斜面～谷状低地の一角も居住に利用されているものの、居住域は南嶺高地上が中心である。時には部分的に居住に利用され、その結果原生林が損なわれて密林状態ではなくなった斜面は、最終的な廃棄場として利用しやすくなったのではなかろうか。

グリッド別出土土器総重量の分布 (図 115) を見ると、廃棄場の上流側の末端は N9E3 グリッド付近、下流側の末端は S9W45 グリッド付近である。その中に 2 カ所分布の希薄なグリッドがあり、そこを境界にして廃棄場を 3 つに区分する。明瞭に区分できる境界は S6W33 グリッド付近、明瞭とは言いきれないが境界が設定できそうなのは SOW15 グリッド付近である。詳しくは後述するが、廃棄場の範囲は時期によってかなり変動する。その変動を加味すると、SOW15 グリッドではなく、SOW18 グリッドを境界線とすべきであることがわかった。廃棄場の三分割は必須である。N9E3～SOW18 グリッドの間を廃棄場 E (East)、S3W18～S3W30 グリッドの間を廃棄場 M (Middle)、S6W36～S9W45 グリッドの間を廃棄場 W (West) に区分する。廃棄場の外側の谷状低地からも土器は出土しているが、分布は希薄となる。その大半は廃棄場からの 2 次的な転落品だと判断し、希薄なグリッドは廃棄場には含めない。

時期ごとの境界の変動を考慮すれば、3 つの廃棄場をさらに細分する必要がある。廃棄場 E は SOW12 グリッドを境界とし、それより上流側の廃棄場 E1 と、そこから下流側の廃棄場 E2 に二分する。廃棄場 M も S3W24 グリッド以东の上流側を廃棄場 M1、S6W24 グリッド以西の下流側を廃棄場 M2 とする。廃棄場 W は相対的に遺物量が少ない。谷状低地は入り江状を呈して微地形も異なり、しかも、配石 2・3 が存在する。他の廃棄場とは異なった性格をもつと考えて、配石 2・3 と一緒に本節 3 (1) で報告済みであるが、これも 2 つに細分できた。

廃棄場 E は設定した調査区 B 区から A 区にまたがっており、その中間には未調査区域がある。そこは農道を確保する必要から調査ができなかったのだが、農道の切り替え時に短期間の追加調査ができた。未調査区域のはずなのに、遺物が多量に得られているのはそうした事情による。一方、N6W0 や N3W3 グリッドは追加調査の範囲の限界で完掘できなかったため、遺物量は図 115 に示した以上であったろう。廃棄場 E はその中心部分の一角に十分な調査の手を入れられず、全体像を把握し切れなかった。特に廃棄場 E の細分について、未解明の点が残った。

3 つの廃棄場のほかにも、谷状低地中央に土器がある程度まとまるエリアがある。N18E9～N12W18 グリッドに掛けて東西に広がるエリアと、1 号住居北縁の N3W45 グリッドである。これらのグリッドは廃棄場とは言いがくいが、谷状低地中央が何らかの役割を果たしていたことを考慮させる。本項の最後にそれを取り上げる。

(2) 廃棄場 E

廃棄場 E を上流側と下流側に二分する。上流側の廃棄場 E1 に該当するグリッドは、N9E3、N9W0、N9W3、N6W0、N6W3、N6W6、N3W3、N3W6、N3W9、N3W12、SOW9 である。下流側の E2 に該当するグリッドは、N3W15、N3W18、SOW12、SOW15、SOW18、S3W15、S3W18 である。図 115 に示した土器の総重量の分布図だけ見たのでは、境界線の設定に異論が生じそうだが、時期別の分布図、図 116～123 をあわせてご覧頂きたい。

堀ノ内式～加曾利 B2 式土器は主として当該期の住居から出土する。廃棄は主として廃屋の窪地に行なわれたと推測できる。谷状低地から出土する土器は少量に留まるが、加曾利 B 式になると廃棄場 E2 にいくらかまとまる。廃棄場成立の先駆的現象といえなくもない。積極的とはいきれないが、谷状低地の利用の先鞭が付けられたのかもしれない(図 118)。

上ノ段式の住居 2 基は、いずれも南微高地の北縁、谷状低地に面する位置に構築される。2 基ともその廃屋に大量の土器が残される。廃屋への廃棄は継続していた。その一方で、谷状低地に向かう斜面の SOW12 グリッドから大量の上ノ段式土器が出土する。廃棄場 E2 の成立である。SOW12 グリッドを廃棄場 E 細分の境界線とする理由がご理解いただけよう。廃棄場 E1 や廃棄場 M1 からも散漫ながら上ノ段式土器が出土する。南微高地北縁は広範囲にわたって、遺物を廃棄するスペースとされ始めた(図 119)。

中ノ沢 K 式は明瞭な遺構が皆無で、住居はもちろん、土坑すら確実なものはない。にもかかわらず、土器は廃棄場の特定地点から大量に出土する。集中する中心は廃棄場 E1 の N3W9 グリッドと、廃棄場 E2 の SOW12 グリッドである。この 2 つのグリッドを中心に隣接するグリッドにかけて、廃棄場が成立する。2 つのグリッドは東西に並んでおり、一体の廃棄場だった可能性もある。廃棄場 E2 の SOW12 グリッドは上ノ段式で成立した廃棄場をそのまま継承し、上流側に範囲を大きく拡大したと見ることができる。十分な調査ができなかった N6W3 グリッドなども出土量は多く、廃棄場 E1 がさらに細分できる可能性は残るだろう。一方、下流側への広がりは上ノ段式とほとんど変わらない(図 120)。中ノ沢 K 式は遺構不明だが、これだけの量の土器が残されるからには、エリ穴遺跡の一角に住居が構築され、集落は中断せずに継続したことは間違いない。

晩期初頭～前葉という時間幅の下限を、おおむね佐野 1a 式に置いて、出土土器の個体数や重量をカウントした。佐野 1a 式以前の住居は、帰属時期不明確な 1970 年発掘の住居を加えれば、4 基存在する。住居内出土土器は少量に留まる。これは上ノ段式以前とは大きな相違点で、土器の圧倒的多数は廃棄場からの出土である。集中出土は 2 カ所ある。1 つは N9W0、N6W3 グリッドを中心にその隣接グリッドのまとまり、もう 1 つは SOW12～SOW18 グリッドを中心に、その隣接グリッドのまとまりである。前者は廃棄場 E1、後者は廃棄場 E2 そのものである。廃棄場 E と廃棄場 M の境界線、廃棄場 E1 と廃棄場 E2 の境界線の位置の根拠は、図 121 でご理解いただけるだろう。廃棄場 E1 は未調査エリアを含み、不明瞭な点が残るが、前段階の中ノ沢 K 式の分布範囲を踏襲し、量的には大幅に増加する。廃棄場 E1 の確立だと考える。廃棄場 E2 も同様で、中ノ沢 K 式と同一範囲の中で量的に増加するが、南微高地北縁斜面の S3W15、S3W18 グリッドより、谷状低地中央寄りの SOW15、SOW18 グリッドのほうが出土量が多い。上ノ段式以来の廃棄遺物で斜面が満杯になり、谷状低地中央寄りに廃棄範囲を拡大しなければならなくなった結果だと推測する。廃棄場 E2 は飽和状態になりつつあったのだろう。

晩期中葉という時間幅を、おおむね佐野 1b 式～佐野 2 式と考えて、出土土器の個体数や重量をカウントした。佐野 1b 式～佐野 2 式の住居は、帰属時期不明確な 1970 年発掘の住居を加えれば、6 基存在する。住居内出土土器は前段階同様少量に留まり、廃屋への廃棄は積極的ではないが、22 号住居だけは少々異なる。発掘時の推定より住居の範囲を拡大すべきだと結論を第 1 分冊で報告したが、住居周辺出土土器の純度がかかなり高かったのがその根拠だった。廃屋の窪地に廃棄された土器が少なからず存在した結果だと推測する。図 122 で示すとおり、廃棄場出土土器ほどの量はないが、22 号住居周辺の出土量はそれなりに多い。廃屋廃棄が全く廃れたわけではなさそうだが、晩期中葉の土器出土量は南微高地縁辺の廃棄場のほうが断然多い。その中において、廃棄場 E 出土の晩期中葉土器は、多量だとは言えない。廃棄場 E 全体から散漫に出土するに留まり、中心的な出土範囲は廃棄場 M と廃棄場 W に移る。廃棄場 E が飽和状態となり、散漫な廃棄は可能だとしても、まとまった廃棄がしにくくなったのかと推測する。また、廃棄場 E と廃棄場 M の境

界線の設定の根拠は、図 122 を見れば明瞭だろう。

晩期後葉は浮線土器の時期で、住居は皆無だが土坑がある程度存在する。土坑出土土器は少量に留まり、土器の大半は南微高地縁辺の廃棄場から出土する。だが、廃棄場 E 出土土器は皆無に近く、晩期中葉を継承して廃棄場 M が廃棄の中心になる。

以上が廃棄場 E の変遷過程である。廃棄場に廃棄されたのは土器や石器だけではあるまい。腐敗する有機質遺物も一緒だったのは確実で、腐敗臭を伴い、衛生的な場所とはいいがたかっただろう。廃棄場成立期の上ノ段式住居以外が、廃棄場から一定の距離を置いて構築されているのは、衛生的な理由によるのではなかろうか。佐野 2 式の炉 2 は例外だが、廃棄場 E への廃棄量が減少した後なら、その縁辺でも居住に支障がなくなったのだろうか。

(3) 廃棄場 M

廃棄場 M を上流側と下流側に二分する。上流側の廃棄場 M1 に該当するグリッドは、S0W21、S0W24、S0W27、S3W21、S3W24 である。下流側の廃棄場 M2 に該当するグリッドは S3W27、S3W30、S6W24、S6W27、S6W30 である。S6W24、S6W27 グリッドを含めたのは、両グリッドの北端が谷状低地斜面にかかっており、廃棄場出土遺物を含むと推測したからである。

廃棄場 M の範囲からは、中ノ沢 K 式以前の土器は微量にとどまり、それも南微高地縁辺のグリッドに限定される(図 118～図 120)。それらは斜面出土とは限らず、南微高地上出土なのかもしれない。廃棄行為は皆無といってよいだろう。

晩期初頭～前葉(佐野 1a 式以前)に至って、南微高地～谷状低地中央に掛けてのグリッドから、広範囲にわたって散漫ながら土器が出土し始める(図 121)。廃棄場 E でも同様だったが、いきなり大量の土器が廃棄されるのではなく、まずは先駆的で散漫な廃棄を経て、廃棄場は確立するらしい。廃棄場 M も廃棄場 W も、晩期初頭～前葉に先駆的な廃棄が始まる。

晩期中葉(佐野 1b 式～佐野 2 式)に至って、廃棄場 M が確立する。集中の中心は S3W21 グリッドで、その下流側の谷状低地斜面に位置する 4 グリッドほどが廃棄場 M を構成する。谷状低地中央寄りからの出土量が少ないのは、斜面に十分廃棄するスペースがあったからだろう。S3W21 グリッドの集中量を見れば、ここに廃棄場 M と廃棄場 E の境界を引いた理由が理解できるだろう(図 122)。S6W24 グリッドは隣接グリッドと同程度出土量だが、グリッド内に占める谷状低地へ向かう斜面の範囲はごく狭い。それなら高密度の廃棄を想定すべきで、S3W21 グリッドと対比できる廃棄の中心スペースではなかろうか。そう考えて、S3W24 グリッドと S6W24 グリッドの間に境界線を引き、前者を廃棄場 M1、後者を廃棄場 M2 とした。廃棄場 M は 2 つのブロックに分かれる可能性がある。

晩期後葉の土器の大半は、廃棄場 M から出土する(図 123)。廃棄場 M1 の S3W24 グリッドと、廃棄場 M2 の S6W24、S6W27 グリッドで、集中範囲が狭いので、2 つのブロックには分かれられないかもしれない。晩期中葉の廃棄場 M1 の中心は S3W21 グリッドだったから、晩期後葉の廃棄場 M の中心は、1 グリッド分だけ下流側に移っている。晩期中葉に飽和状態となったので、下流側に廃棄の中心が移されたのだろう。

(4) 谷状低地中央の利用

N18E9～N12W18 グリッドに掛けて東西に広がるエリアと、1 号住居北縁の N3W45 グリッドからは、一定量の土器が出土する(図 115)。前者のエリアは谷状低地の北縁にあたる。微地形の変化は必ずしも明瞭ではないが、谷状低地の底ではない。谷状低地中央と呼ぶのは正確ではないが、それに連なる非居住スペースだったろう。廃棄場からも少々距離を置き、その間に谷状低地の底を挟む。出土土器の中に半完形品

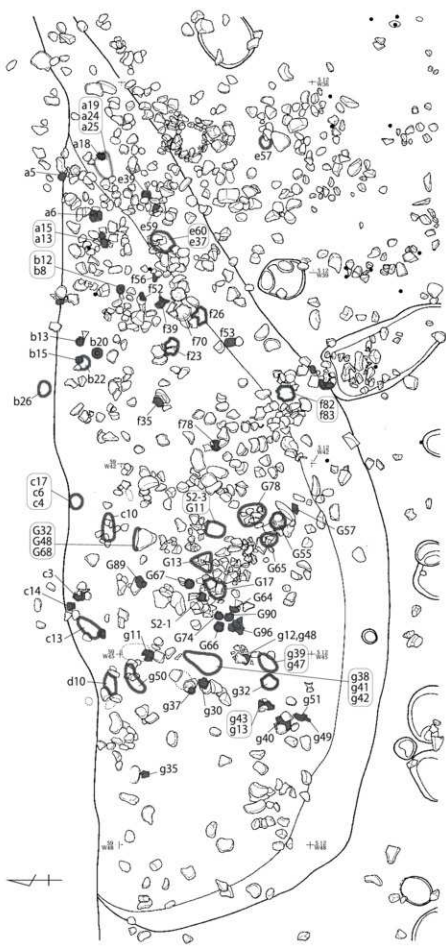
や大形破片が目立つので、小破片はともかくも、大形破片は廃棄場からの2次的な転落品ではないだろう。出土土器のうち中ノ沢K式以前は少量に留まり、大多数が晩期初頭～佐野2a式の範囲に納まる。浮線文の半完形品も1点ある。

N3W45-8グリッドも出土土器の重量が多い。佐野2a式の半完形品の大形深鉢があるため、重量が大きくなったからで、廃棄場Mの北縁にも、廃棄場からの転落品とは言いきれない大形破片がある。

このように谷状低地からは大形破片や半完形品が点々と出土しており、その重量が図115に反映されている。それらの個別の出土状況は不明だが、何らかの施設は付随しておらず、単品での発見だったらしい。廃棄場への廃棄とも、状況は異なる。具体的なことは言えないが、谷状低地中央も、日常生活上、利用されていたことは確かだろう。

7 礫群と遺構（図124～140）

第Ⅲ層中で検出された礫群については、第1分冊で報告したとおりで、遺構から遊離した礫や基本土層中の礫などが礫群として把握されたと判断した。礫群と個別の遺構とは特に繋がりはあるとは考えない。類似した礫群が発見された遺跡の多くが、同様の結論に達しているのではなかろうか。だが、そのように結論付けるまでの間、調査期間中～整理作業のある段階までは、礫群の評価や相互の関連性について大いに苦慮した。似たような経験をもつ調査担当者は多いのではなかろうか。そうした苦慮の解消に役立つ可能性を考え、礫群と個別遺構の重複関係を示す図を掲載する。この図は両者が関連性をもつと考えていた段階に作成したものである。



配石 2・3 と廃棄場 W に関する
グリッド名は、以下のように
省略した。

- S6W36 : a(Wa)
- S6W39 : b(Wb)
- S6W42 : c(Wc)
- S6W45 : d(Wd)
- S9W36 : e(We)
- S9W39 : f(Wf)
- S9W42 : G
- S9W45 : g(Wg)
- S9W48 : h(Wh)
- S12W39 : i(Wi)
- S12W42 : j(Wj)

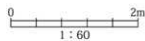


図1 配石 2・3 と廃棄場 W(1)

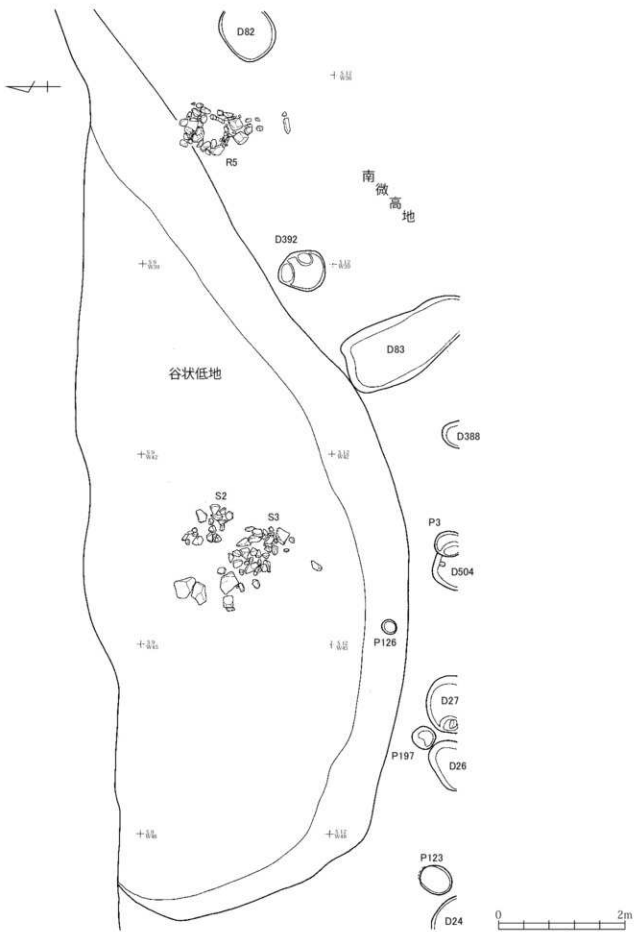


図2 配石2・3と廃棄場W(2)

[配石 2・3] (第1分冊図 25)

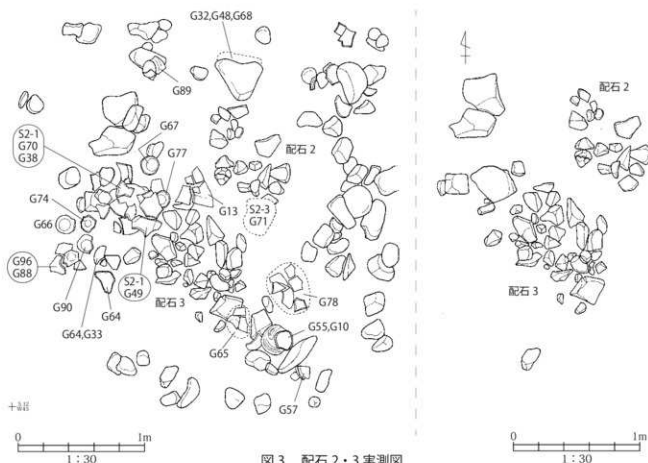


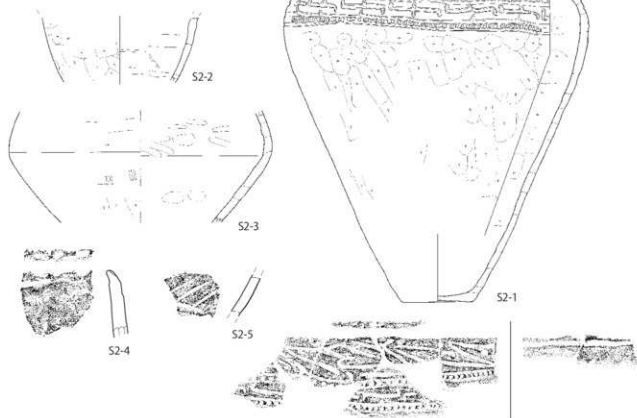
図 3 配石 2・3 実測図

地点	総重量 g	中期					後期					晩期			後晩			所見	
		藤内	井戸	唐草	加E	不明	底部	称名	堀内	加B	上段	中K	前葉	中葉	後葉	無文	不明		底部
配石 2・3	1185					1 10			1 40									3 100	
S6W36	25275		1 30					3 10	2 30	1 10	4 70	13 160	23 2170	3 80	85 3840	4 20	58 5890	Wa	
S6W39	12215							2 10		1 10	1 10	9 100	10 720	1 10	43 1600	1 50	25 1770	Wb	
S6W42	8445			1 40				2 10				5 60	13 1080	2 10	14 210	1 10	12 600	Wc	
S6W45	5620				1 10					2 20		3 30	10 140	2 10	21 1280	2 10	10 480	Wd	
S9W36	44445	2 330			1 20	3 170		8 80	10 230	6 60	8 170	54 1330	23 590	2 160	179 4440	5 40	75 4820	16 住 We	
S9W39	51030	1 10			1 20	2 20		2 20	2 10	4 70	1 10	35 1760	32 2150	4 40	138 6280	3 10	86 8160	34 住 Wf	
S9W42	45190			6 160				3 10	3 120	3 20	3 50	26 840	59 6420	5 70	131 7170	8 130	91 6100	S2・G Wg	
S9W45	32890				1 10			1 10	7 100	10 150		20 350	24 460	3 70	91 7170	5 130	58 6100		
S9W48	9995	0	1 10	3 90	0	5 90		8 270	1 20	2 30		3 80	4 30		25 680		18 990	Wh	
S12W39	25210			2 110	1 70	4 210	1 30		5 80	2 30		3 30	11 1650	1 10	70 2880		52 4840	34 住 Wi	
S12W42	17130	1 10		3 70	3 10		1 20	1 20	6 100	4 30	2 20	8 130	5 60	3 50	34 3110	4 40	32 1410	34 住 Wj	

表 1 配石 2・3、廃棄場W関連の時期別個体数 (上段:口縁部破片数、下段:口縁部重量g)

[配石 2・3]

(S2-1 ~ S2-5)



[S9W42] (S2-G1 ~ S2-G103)

0 10cm
1:4

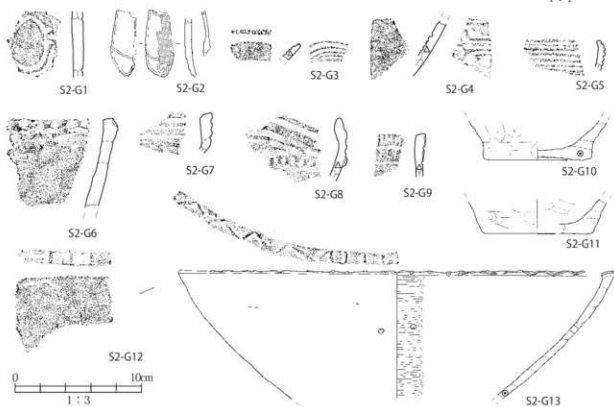


図4 配石 2・3 及び関連グリッド出土土器実測図・拓影(1)

[S9W42]

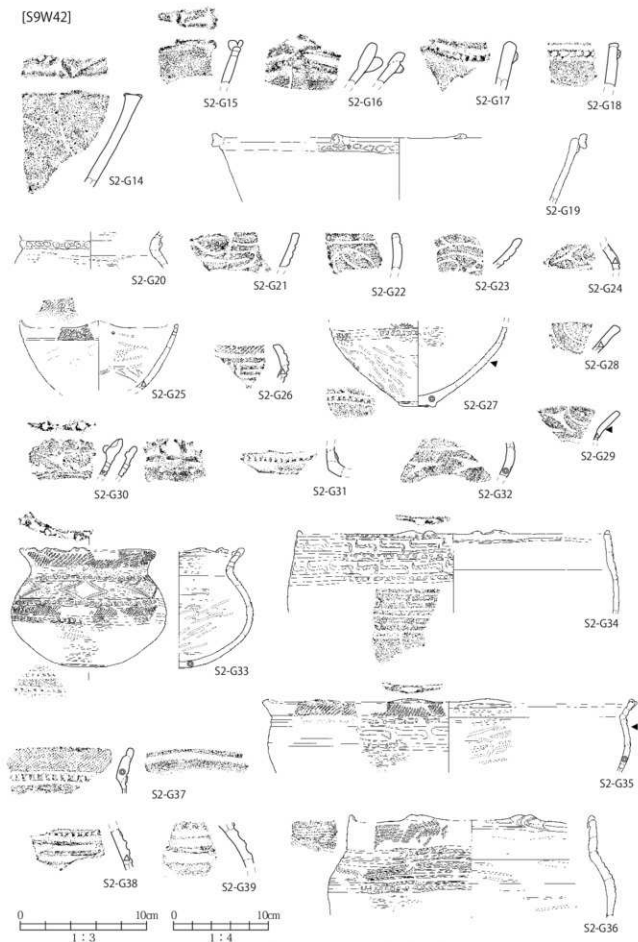


図5 配石2・3関連グリッド出土土器実測図・拓影(2)

[S9W42]

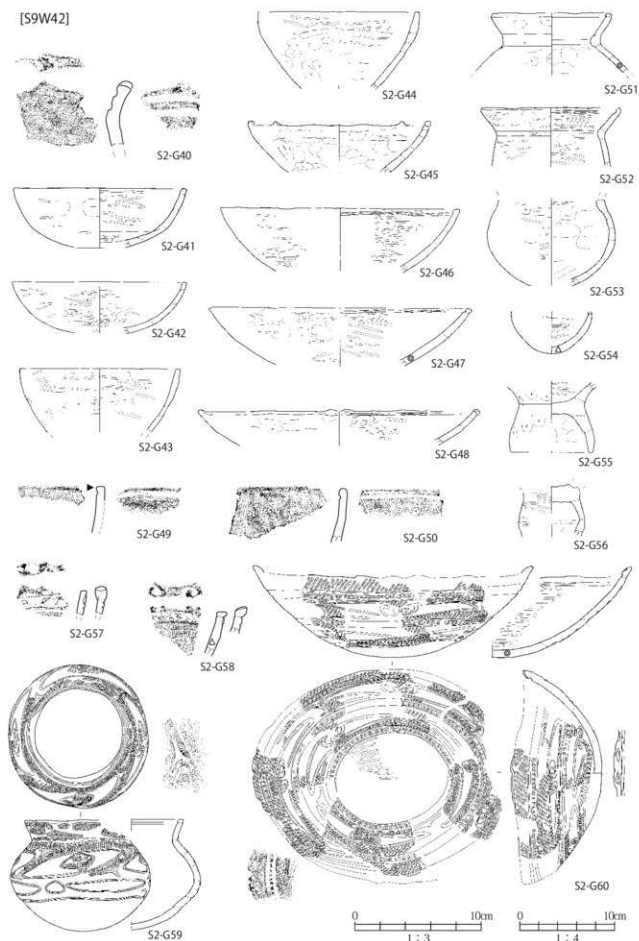


図6 配石2・3 関連グリッド出土土器実測図・拓影(3)

[S9W42]

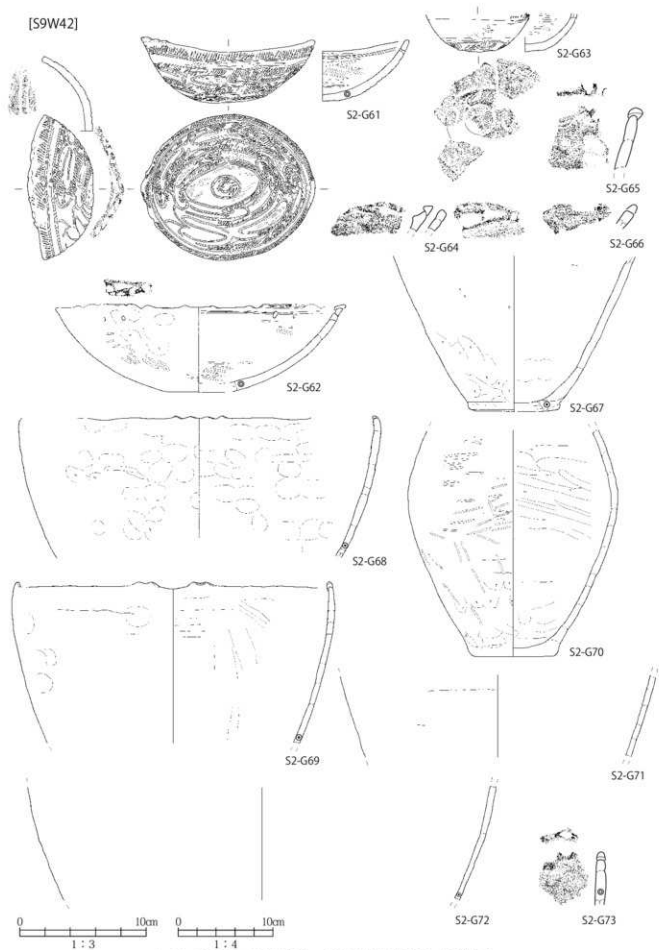


図7 配石2・3関連グリッド出土土器実測図・拓影(4)

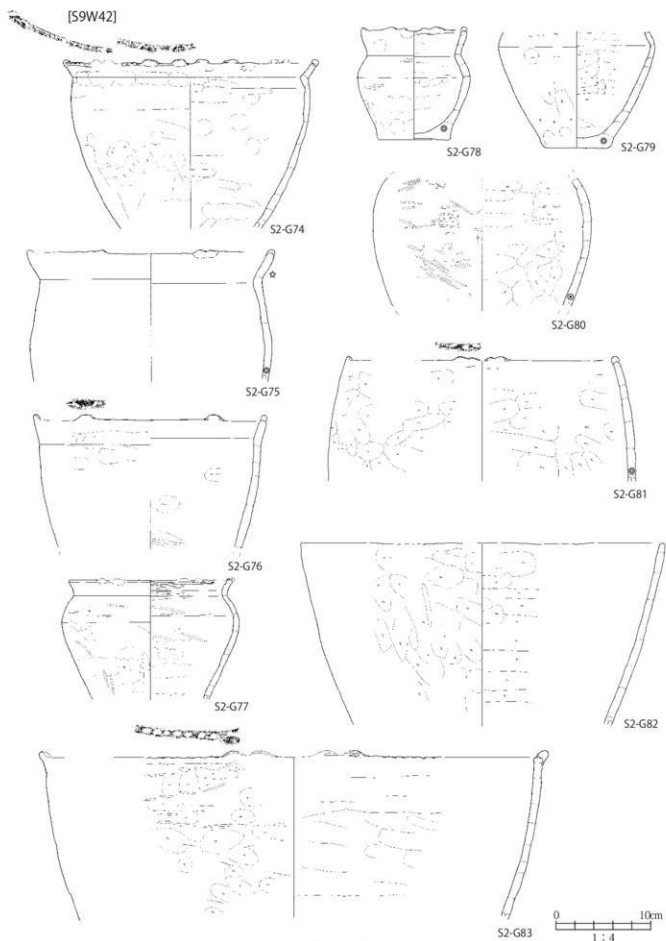


図8 配石2・3関連グリッド出土土器実測図・拓影(5)

[S9W42]

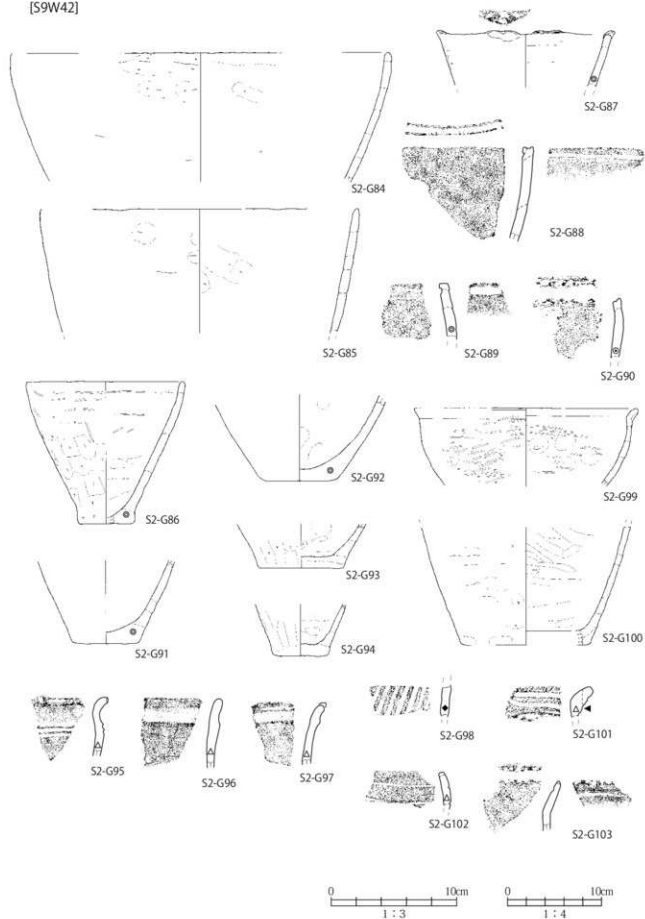


図9 配石2・3関連グリッド出土土器実測図・拓影(6)

[S6W36] (Wa-1 ~ Wa-34)

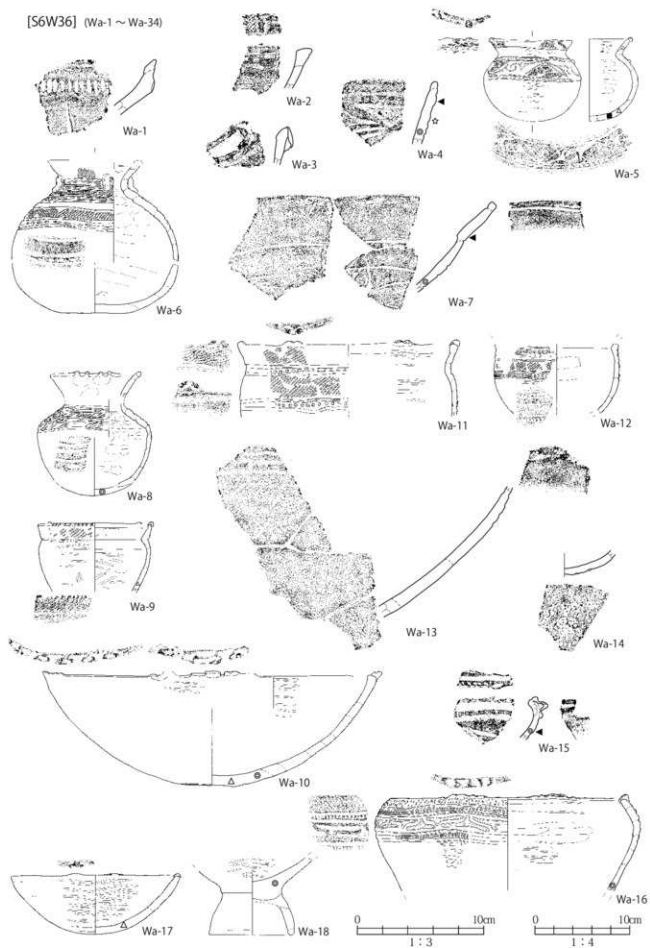


图10 廃棄場W出土土器実測図・拓影(1)

[S6W36]

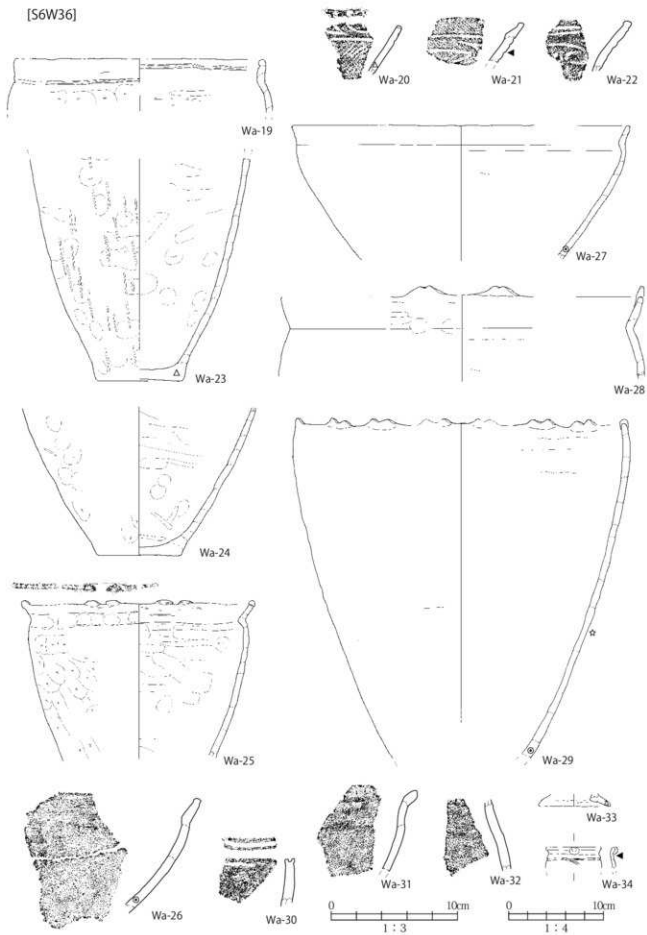


图 11 廃棄場 W 出土土器実測図・拓影 (2)

[S6W39] (Wb-1 ~ Wb-29)

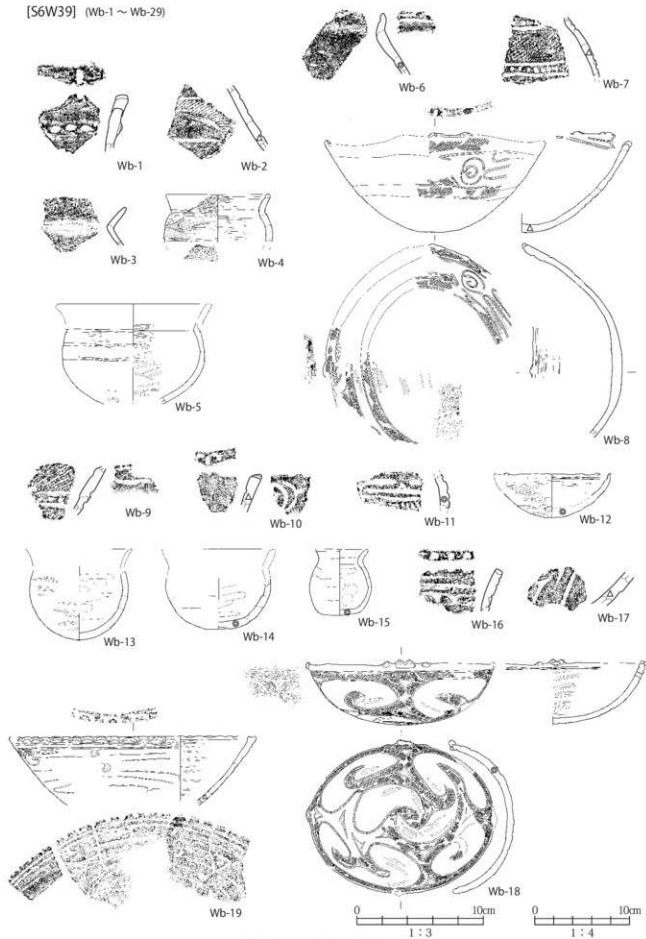
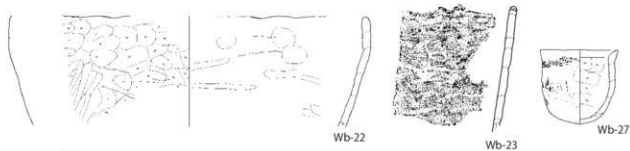


图 12 廃棄場 W 出土土器実測図・拓影 (3)

[S6W39]



[S6W42] (Wc-1 ~ Wc-17)

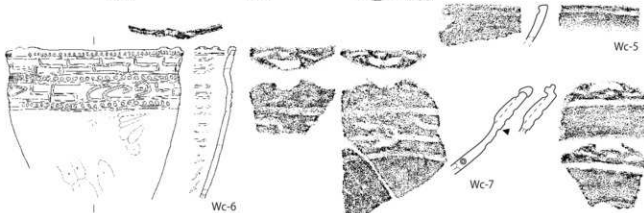


图 13 鹿棄場 W 出土土器実測図・拓影 (4)

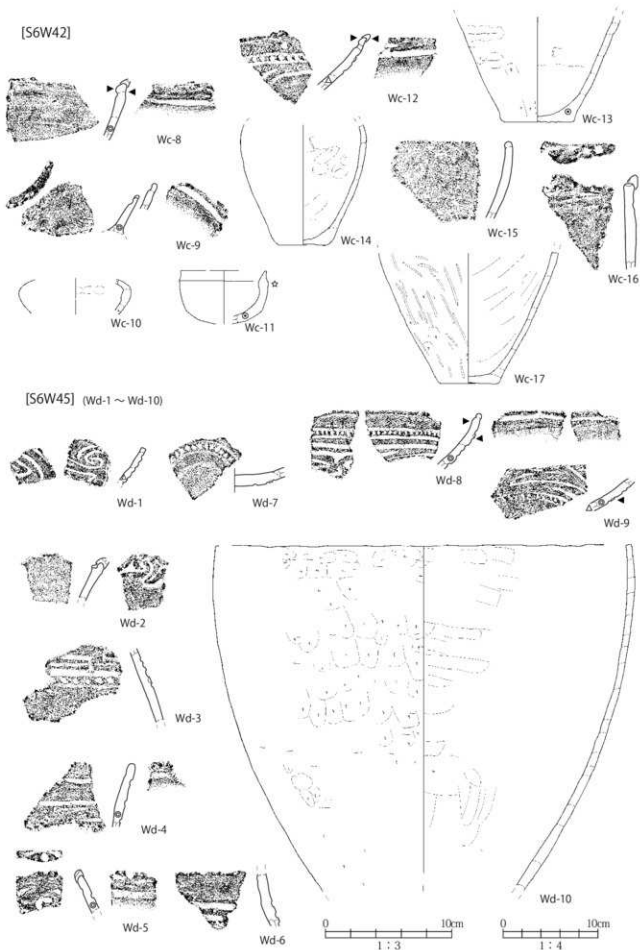


図 14 廃棄場 W 出土土器実測図・拓影 (5)

[S9W36] (We-1 ~ We-61)

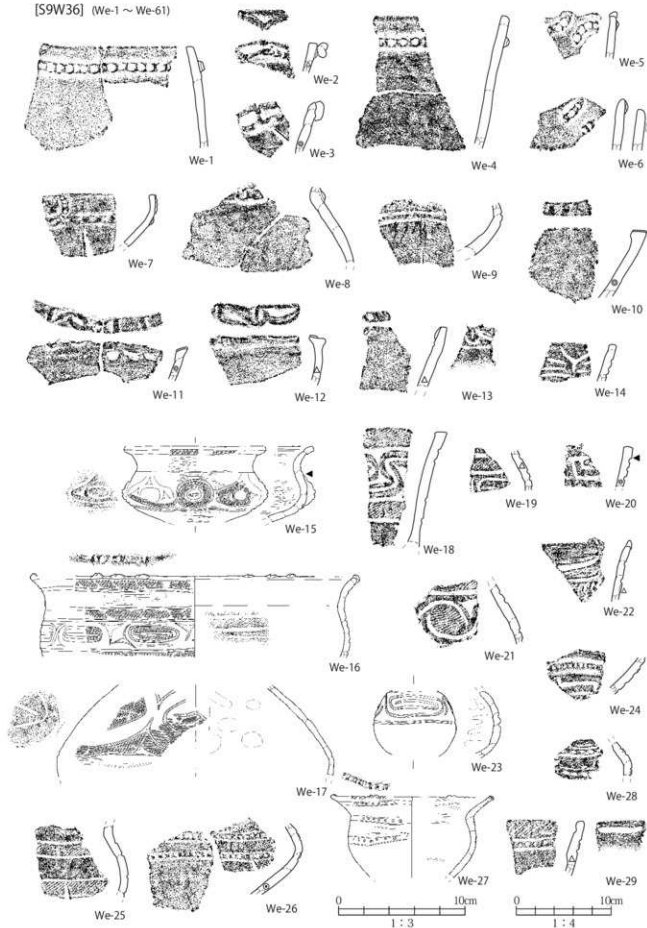


图 15 鹿棄場 W 出土土器実測図・拓影(6)

[S9W36]

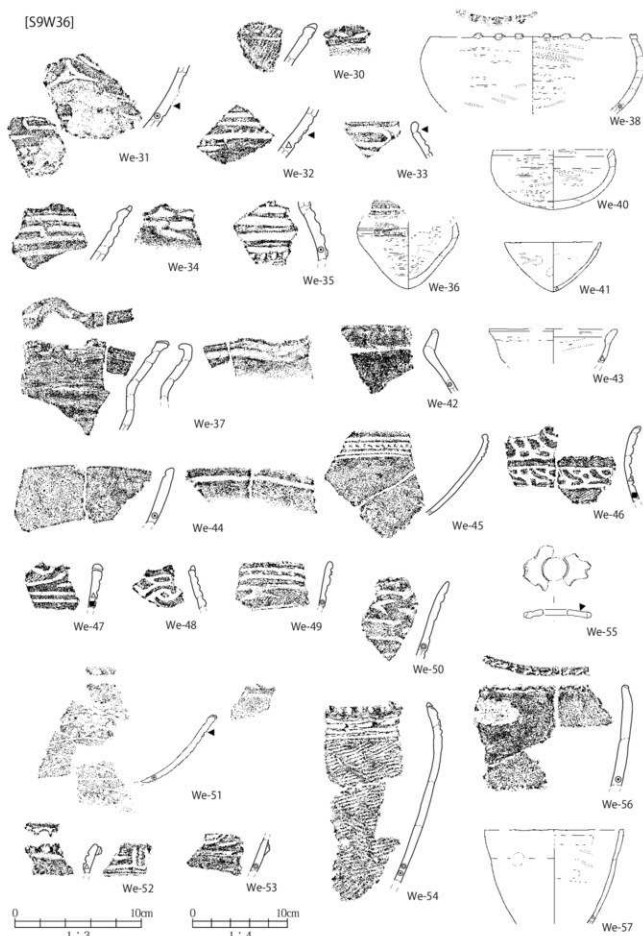


图 16 廃棄場 W 出土土器実測図・拓影(7)

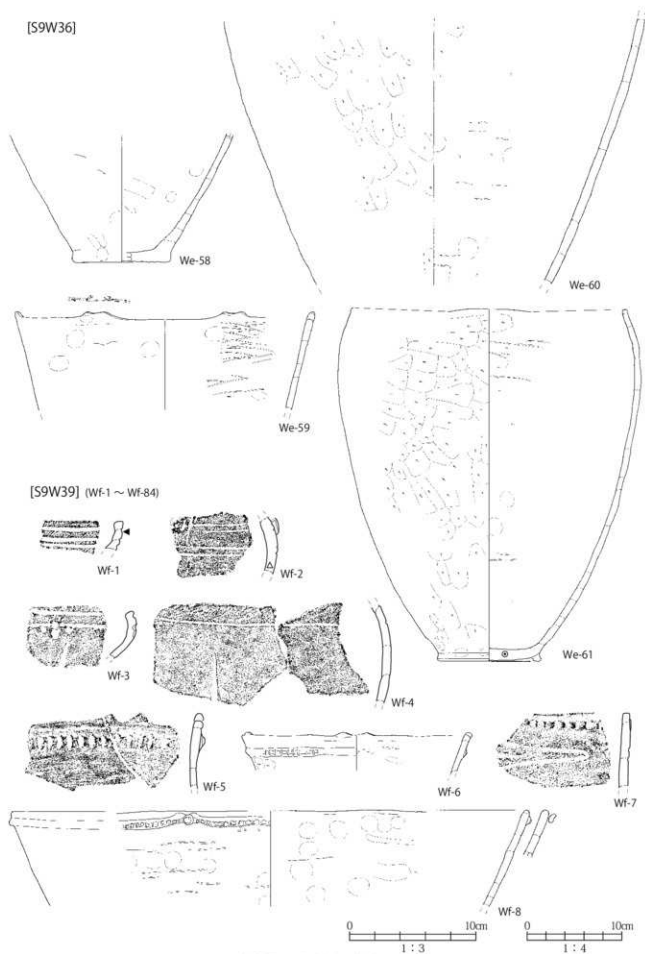


图 17 廃棄場 W 出土土器実測図・拓影 (8)

[W9W39]

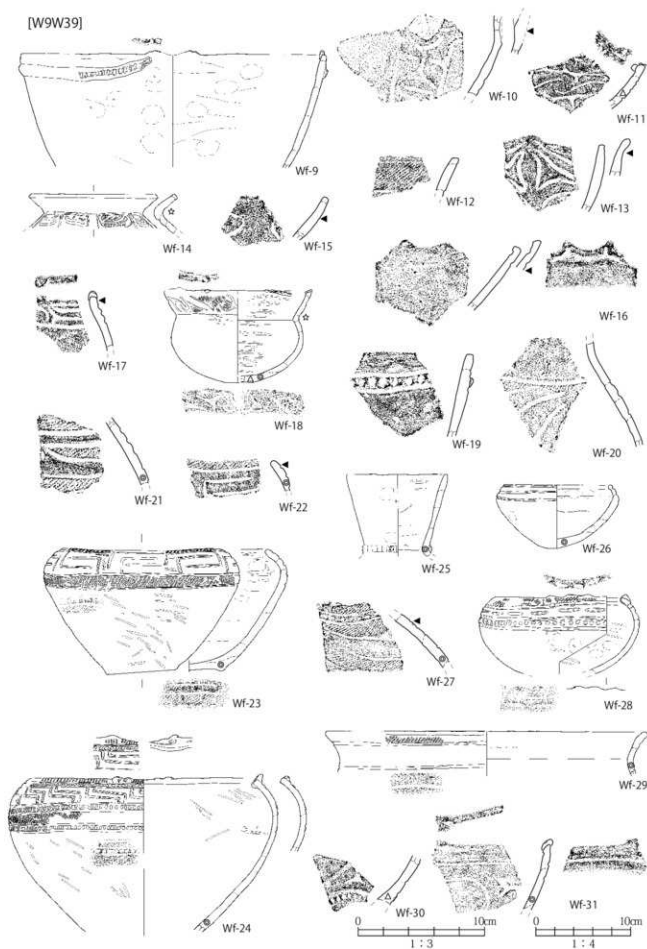


図 18 廃棄場 W 出土土器実測図・拓影 (9)

[S9W39]

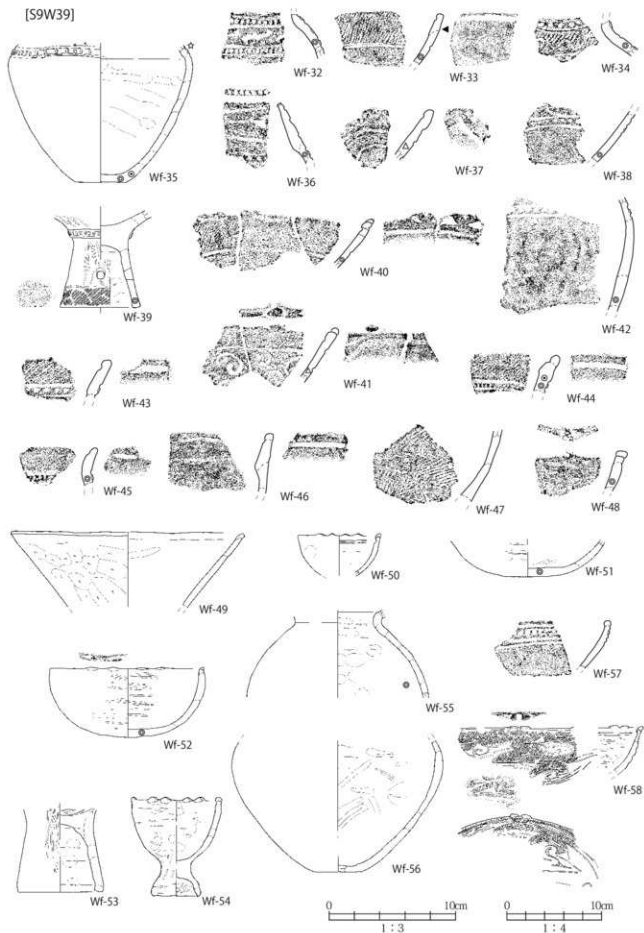


図19 廃棄場W出土土器実測図・拓影(10)

[S9W39]

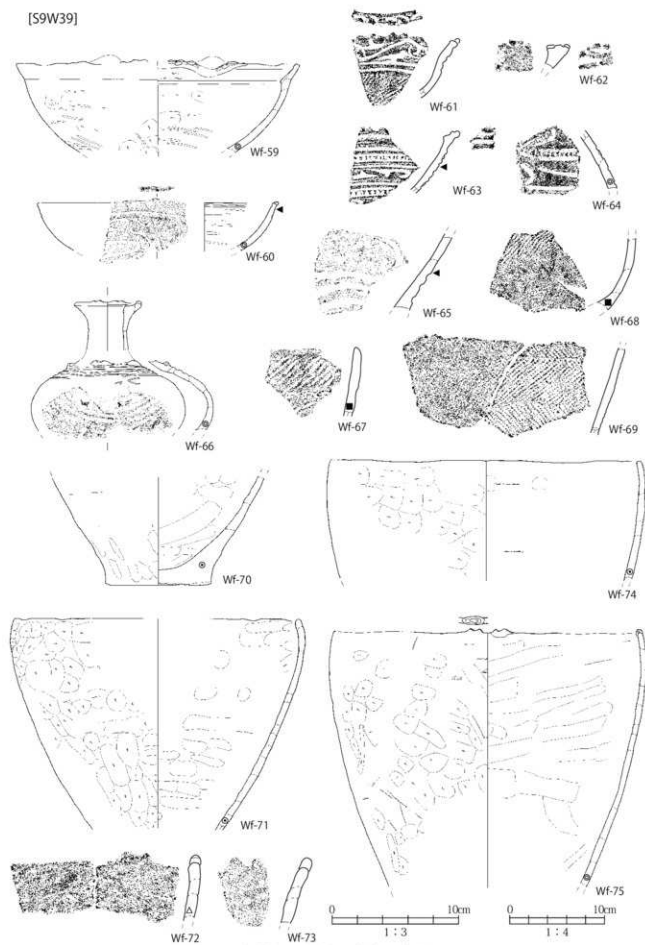


图20 廃棄場W出土土器実測図・拓影(11)

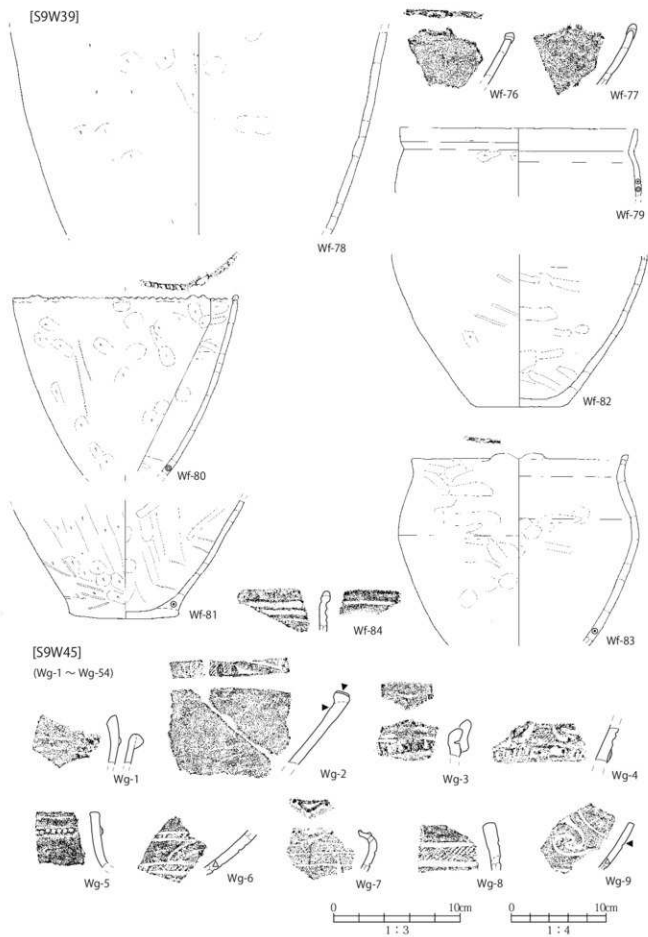


図21 廃棄場W出土土器実測図・拓影(12)

[S9W45]



図 22 鹿棄場 W 出土土器実測図・拓影(13)

[S9W45]

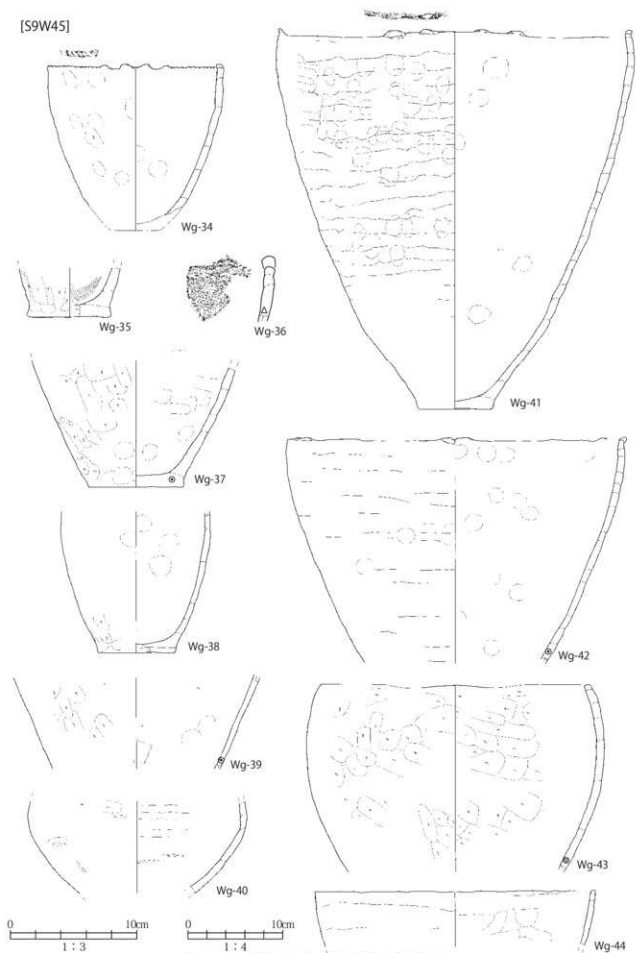
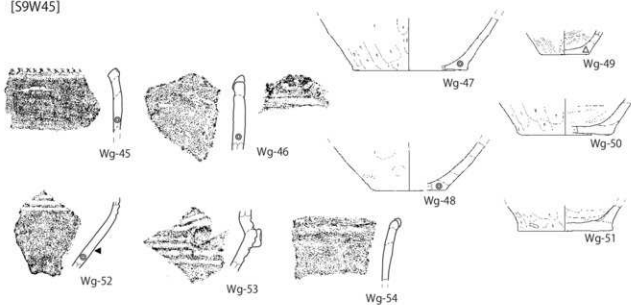
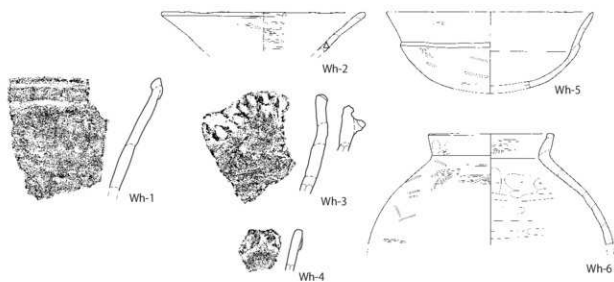


图 23 鹿棄場 W 出土土器实测图・拓影(14)

[S9W45]



[S9W48] (Wh-1 ~ Wh-6)



[S12W39] (Wi-1 ~ Wi-36)

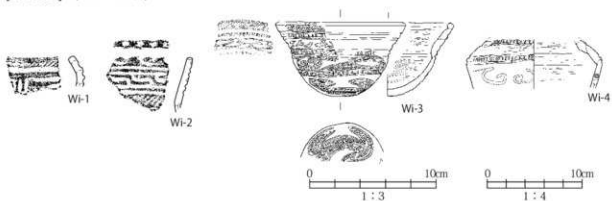


图24 廃棄場W出土土器実測図・拓影(15)

[S12W39]

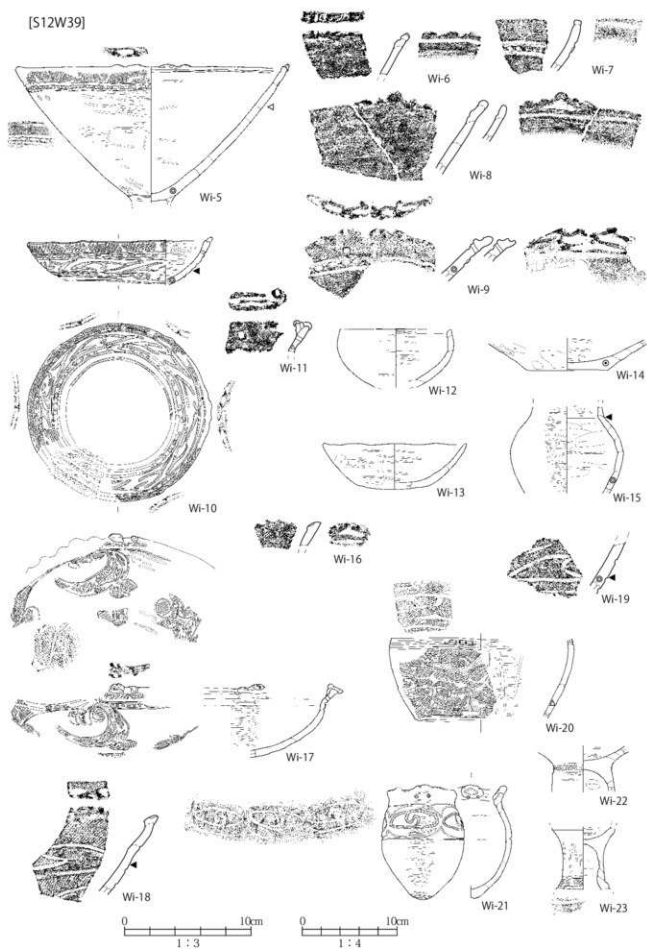


图 25 廃棄場 W 出土土器実測図・拓影 (16)

[S12W39]

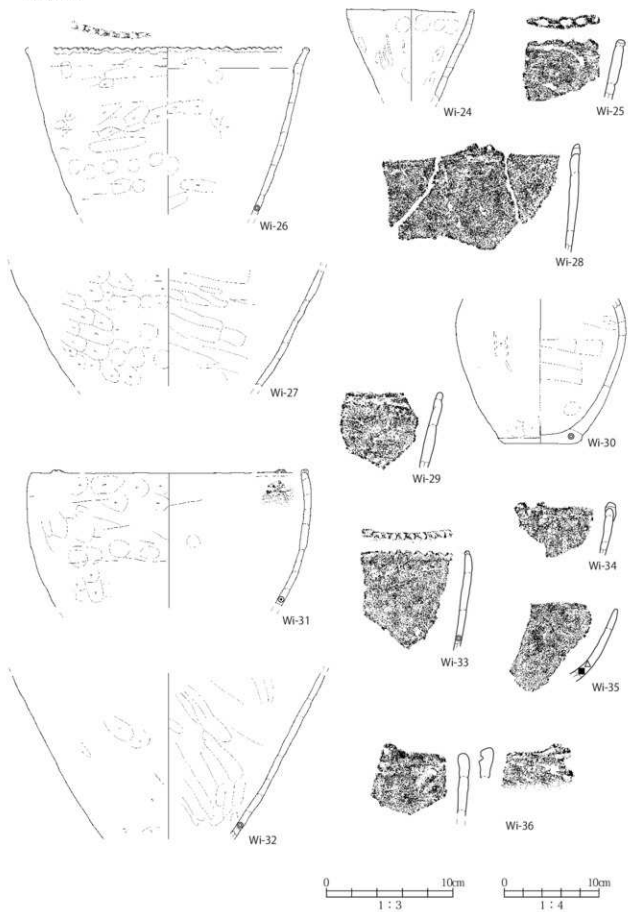
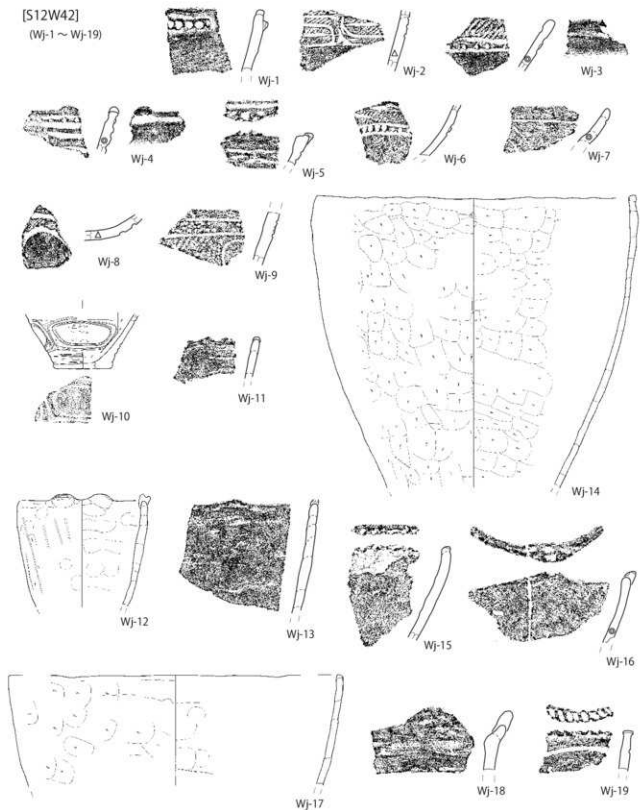


图 26 廃棄場 W 出土土器実測図・拓影 (17)

[S12W42]
(Wj-1 ~ Wj-19)



0 10cm
1 : 3

0 10cm
1 : 4

图 27 麻葉場 W 出土土器実測図・拓影(18)

表2 配石関連の時期別個体数 (上段:口縁部破片数, 下段:口縁部重量g)

地点	総重量 g	中期					称名	後期				晩期			後晩			所見
		藤内	井戸	唐草	加E	不明		底部	堀内	加B	上段	中K	前葉	中葉	後葉	無文	不明	
配石 5	925							1 40	1 10						4 50		6 150	
配石 9	965											1 10		6 220		2 60		
配石 10	430							1 10	1 10					1 30	1 10	2 200	上ノ段 破片多	
配石 11	1195									1 40	2 20	1 10		3 10	1 10	2 30		
配石 12	740									2 40	1 220	1 10				2 20		
配石 15	440							1 10	1 20					2 10	1 10		研4	
配石 16	800							1 10	3 40		1 10			6 140		1 10		
配石 17	210															2 20		
配石 18	10455			3 110				3 20		3 60	3 40	3 40	17 420	1 20	53 1120	25 680		
配石 19	3440							4 20	8 110	2 20		1 10	2 60	2 100	12 230	1 10	16 350	
配石 23	205											1 20		6 120				
配石 24	290													2 40	2 10	1 40	39佳	
配石 25	85							2 40										
配石 26	3880		2 50			1 40		5 60	8 190	7 240	1 10	2 20	1 10	1 10	13 150	12 430		

[配石 5] (第1分冊図26) (S5-1~S5-14)

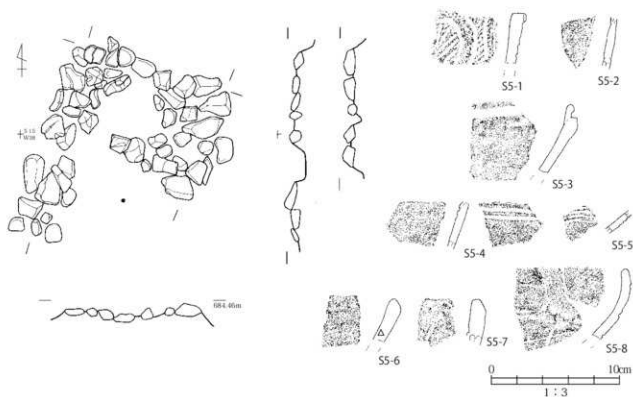
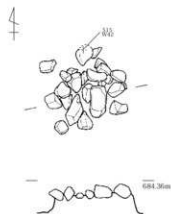


図28 配石及び出土土器実測図・拓影(1)

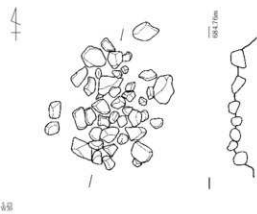
【配石 5】



【配石 6】(第 1 分冊圖 25)



【配石 7】(第 1 分冊圖 31)



【配石 9】(第 1 分冊圖 29) (S9-1 ~ S9-11)

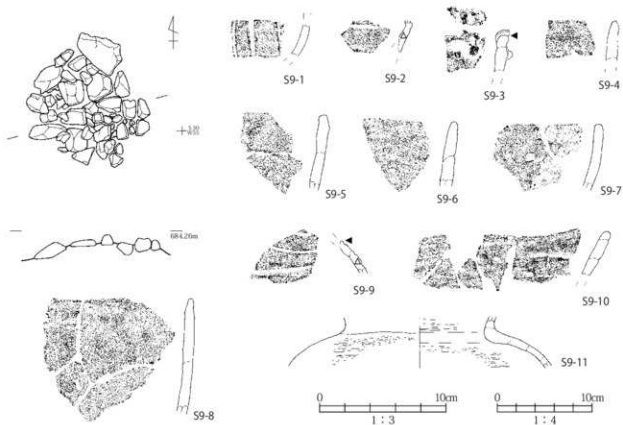
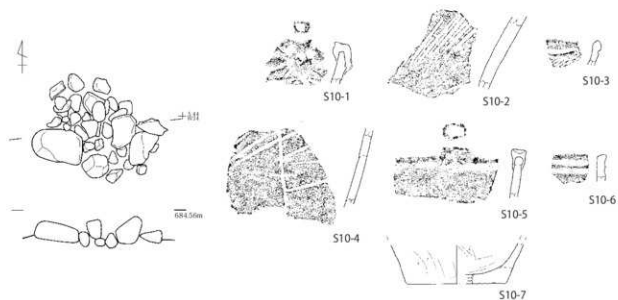


図 29 配石及び出土土器実測図・拓影(2)

[配石 10] (第1分冊図 36) (S10-1 ~ S10-7)



[配石 11] (第1分冊図 31) (S11-1 ~ S11-10)

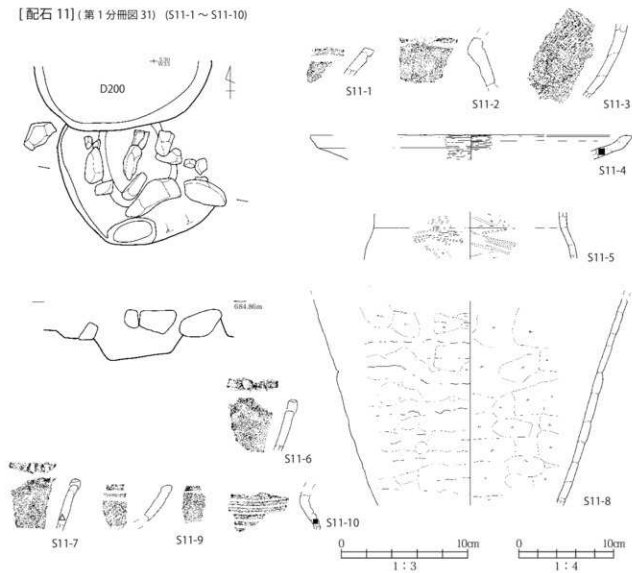
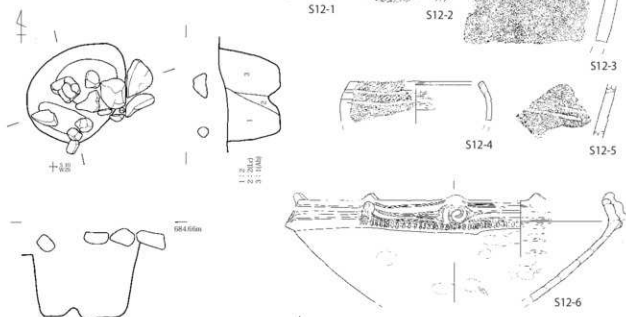


図 30 配石及び出土土器実測図・拓影(3)

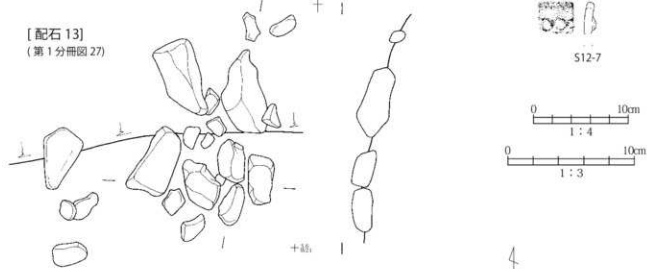
【配石 12】(第1分冊図27)

(S12-1 ~ S12-7)



【配石 13】

(第1分冊図27)



【配石 14】

(第1分冊図37)

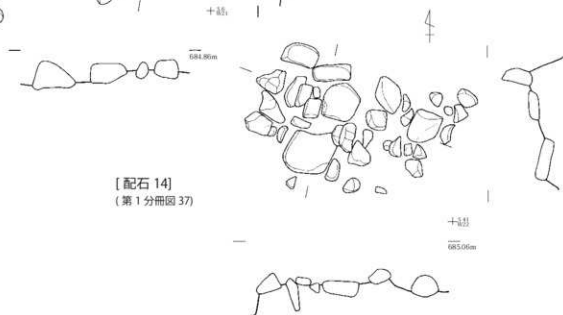


図31 配石及び出土土器実測図・拓影(4)

[配石 16] (第 1 分冊 28) (S16-1 ~ S16-16)

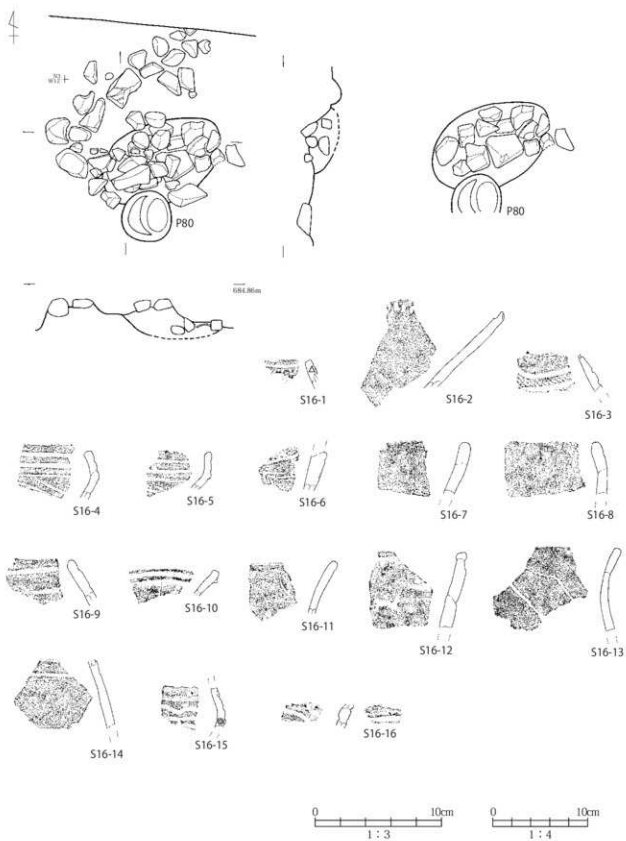
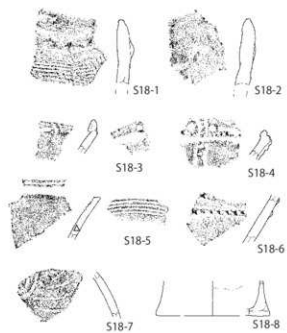
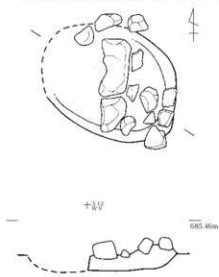


図 32 配石及び出土土器実測図・拓影 (5)

【配石 17】(第1分冊図28) (S17-1~S17-3)



【配石 18】(第1分冊図28) (S18-1~S18-78)

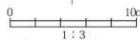
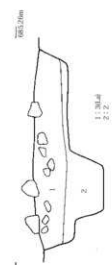
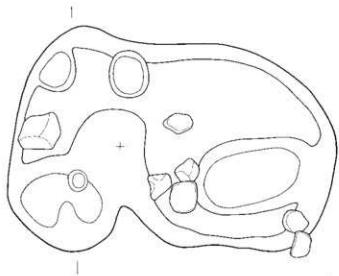
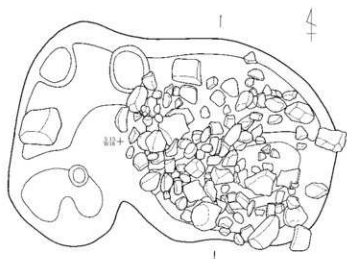


図33 配石及び出土土器実測図・拓影(6)

[配石 18]

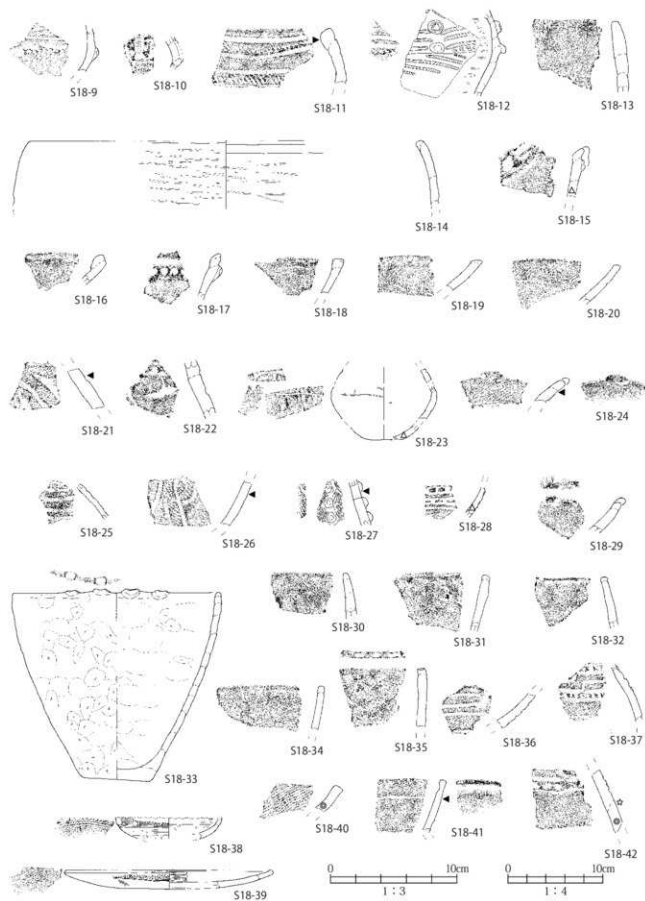


図 34 配石及び出土土器実測図・拓影(7)

【配石 18】

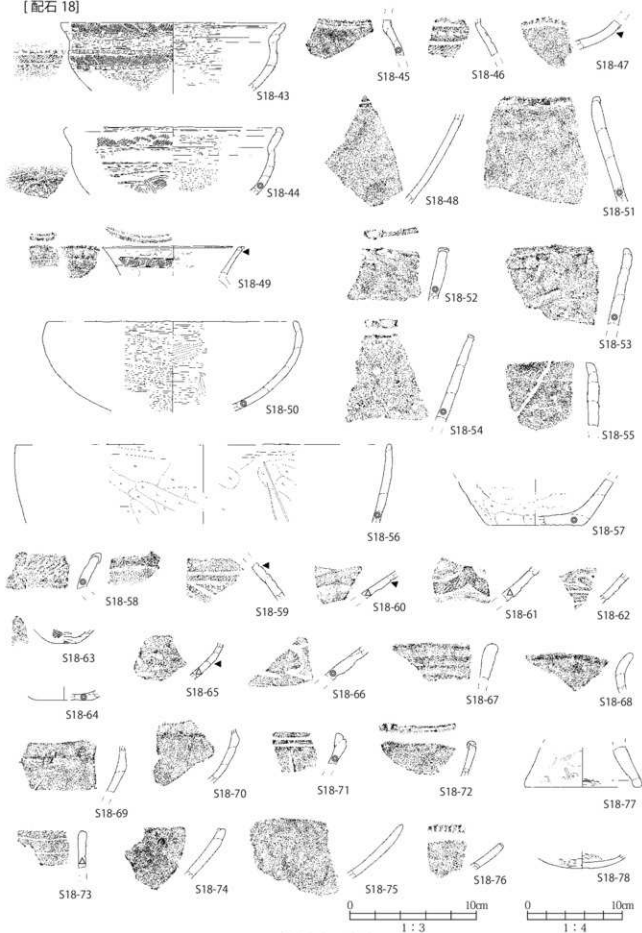


図 35 配石及び出土土器実測図・拓影(8)

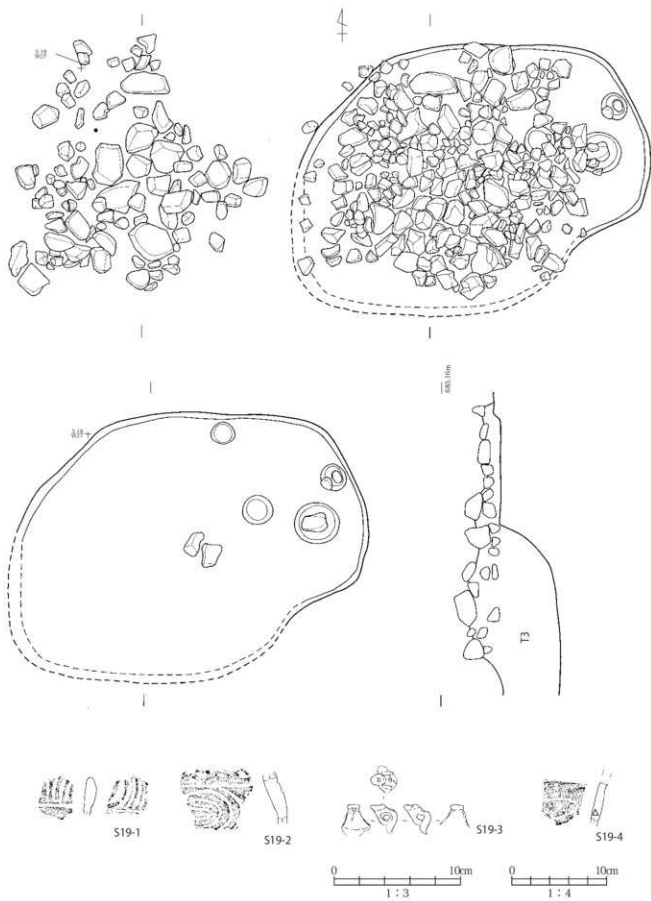


図36 配石及び出土土器実測図・拓影(9)

[配石 19]

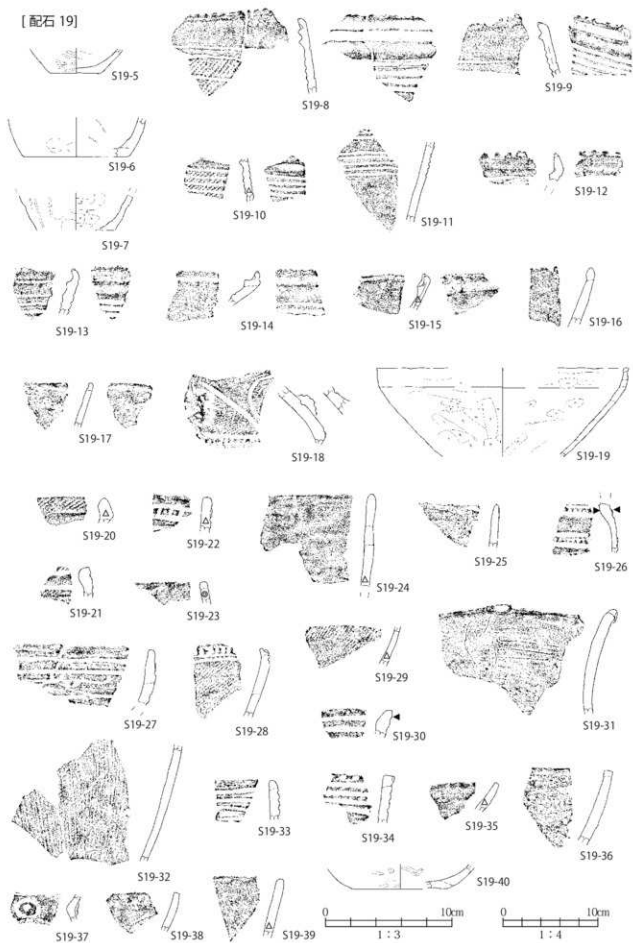
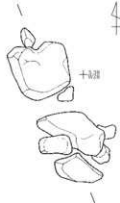


図 37 配石及び出土土器実測図・拓影(10)

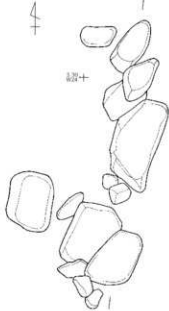
【配石 20】(第1分冊図 37)



0.05 1.0m



【配石 21】(第1分冊図 32)



0.05 3.0m



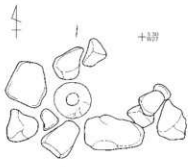
【配石 22】(第1分冊図 37)



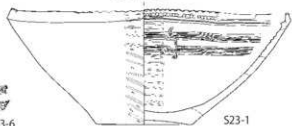
0.05 1.0m



【配石 23】(第1分冊図 32) (S23-1 ~ S23-9)



0.05 1.0m



S23-2



S23-3



S23-6



S23-4



S23-5



S23-7



S23-8

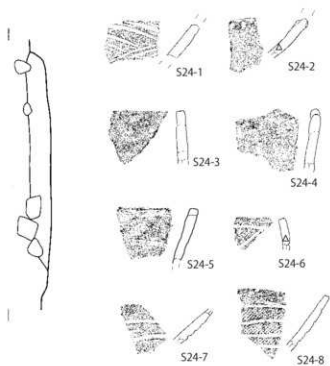
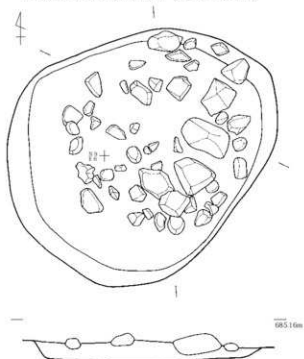


S23-9

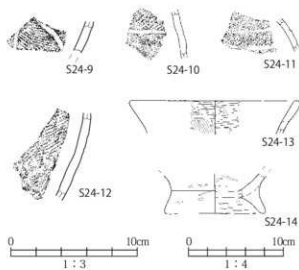
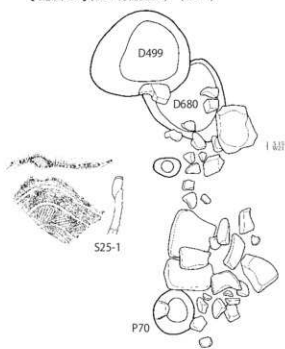


図 38 配石及び出土土器実測図・拓影(11)

【配石 24】(第1分冊図 23) (S24-1 ~ S24-14)



【配石 25】(第1分冊図 27) (S25-1)



【配石 27】(第1分冊図 31)



【配石 28】
(第1分冊図 22)

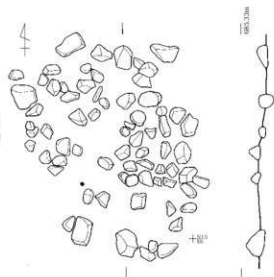


図 39 配石及び出土土器実測図・拓影(12)

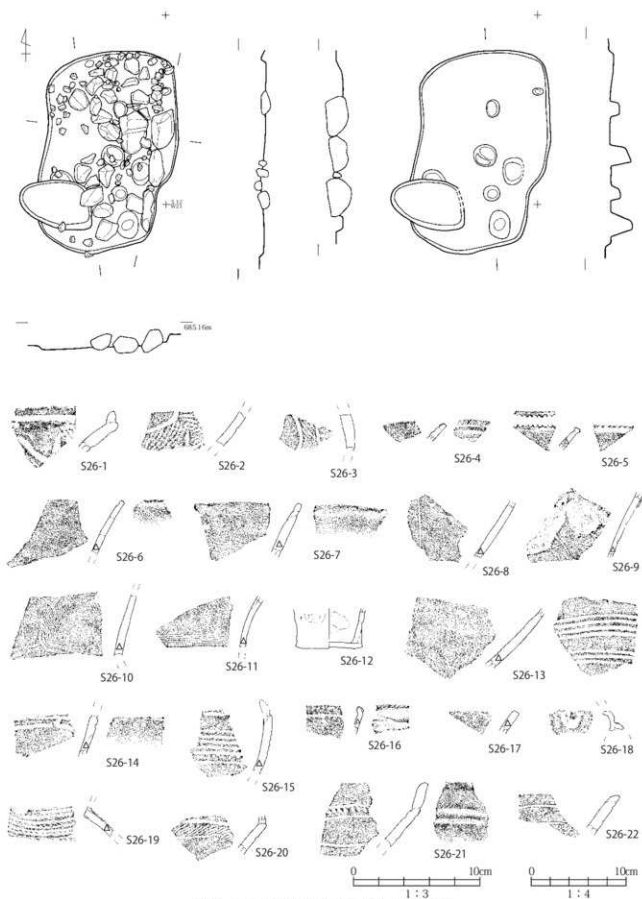


図 40 配石及び出土土器実測図・拓影 (13)

[配石 26]

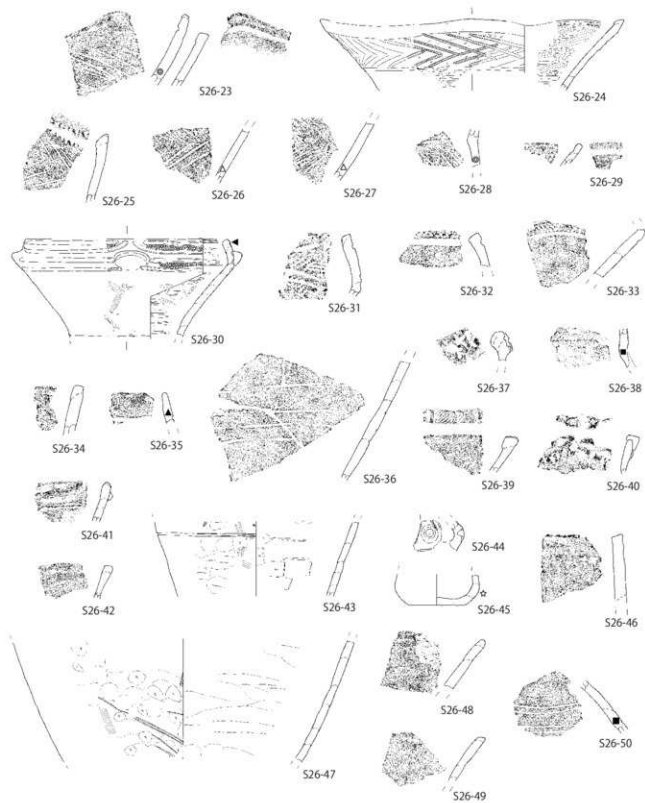


図 41 配石及び出土土器実測図・拓影 (14)

[满 3] (第 1 分册图 22·图 23) (M3-1 ~ M3-32)

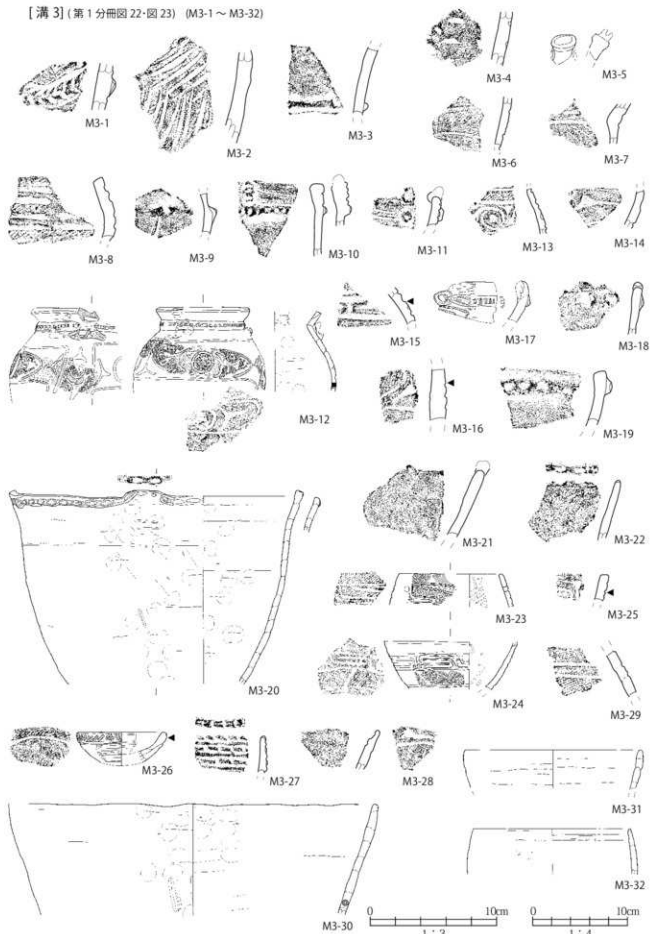


图 42 满出土土器实测图·拓影

(上段：口縁部破片数、下段：口縁部重量 g)

地点	総重量 g	中期					後期				晩期			後晩		所見		
		藤内	井戸	唐草	加E	不明	底部	称名	胎内	加B	上段	中K	前葉	中葉	後葉		無文	不明
土坑 1		1 1160																
土坑 15	360									1 20		1 90						
土坑 16	645					1 10		2 100							1 50		1 50	
土坑 24	335																1 10	
土坑 35	1065						2 70								1 20		4 50	
土坑 37	1065	1 360				1 10		1 10							1 10			
土坑 38	640					2 60	1 10											
土坑 41	1660			2 20					3 50	1 20	2 50	1 30	2 50		6 70	2 20	2 180	
土坑 54	1275			4 350	1 10	1 10	1 50	1 10									1 20	
土坑 57	825	2 50		1 10		3 20											2 40	
土坑 67	245	1 10				1 70												
土坑 68	440		1 10															
土坑 73	205																	
土坑 78	1320											4 30			10 310		3 70	
土坑 80	4505							2 10	1 30			3 40	3 20	3 60	19 220	1 20	5 110	
土坑 81	1500		1 10					1 10	2 10					2 30	13 120	1 10	6 110	
土坑 91	1290							1 30		1 30		1 10			4 1290			
土坑 101	2355							1 2800							1 10			
土坑 114	130	2 90																
土坑 115	6045	2 5760	1 10			1 10									1 10	1 10		
土坑 133	545		1 160				1 20											
土坑 136	200			1 20				2 20							1 10			
土坑 137	2445			2 100			1 10		1 10	1 10		8 130			19 150	4 40	10 320	
土坑 144	3885					1 40		1 280	3 80	1 60	2 50	2 30	12 1770		11 60	1 40	6 140	
土坑 146	915				2 30	2 620		1 10				1 10					1 10	
土坑 167	1645	1 990	1 20					1 10										

表3 土坑出土土器の時期別個体数(1)

(上段:口縁部破片数、下段:口縁部重量 g)

地点	総重量 g	中期					底部 称名	後期				晩期			後晩		所見
		藤内	井戸	唐草	加E	不明		堀内	加B	上段	中K	前葉	中葉	後葉	無文	不明	
土坑 170	1205		1 20	1 10			1 70										
土坑 172	710		1 80				2 200										
土坑 176	1435							4 990	1 10						2 30	3 70	
土坑 178	765		2 370					2 10					1 20		1 10		
土坑 196	275							1 40	1 10								5 60
土坑 200	11170			1 20				2 60	3 70	1 20	1 10	5 80	15 3620	44 1710	1 10	10 320	
S27 W30	18720							24 530	7 230	5 100	16 360	9 240		97 1330	2 10	46 1410	土200 関連G
S27 W33	7420							4 30	10 110	5 60	3 30	12 120	3 80	41 540	2 20	20 770	土200 関連C
S30 W30	13535							5 60	25 460	10 160	15 410	5 90	6 470	68 1280	5 40	26 1080	土200 関連G
S30 W33	6985	1 40						24 670	7 130	1 10	2 340	1 580	1 20	36 500	2 10	19 430	
土坑 204	2210	3 140		1 120				2 40	3 50	1 50					7 250	6 110	
土坑 207	430								1 10			2 10		3 50	1 10		
土坑 208	1805							1 10	1 10		2 30	2 250	6 200	15 220	2 10	10 470	
土坑 209	3380								1 20	1 10	1 10		2 50	11 100		6 150	
土坑 210	5190										4 20	6 80	6 120	6 60	1 10		
土坑 212	470								1 10		1 10			2 20		2 10	
土坑 213	225								3 120	1 40					1 10		
土坑 215	2135							3 280						5 210		2 100	
土坑 222	2985							7 190	7 50	1 20		1 10		15 180		9 170	
土坑 229	1150							1 30	1 10	2 40	1 20			5 50		3 50	
土坑 231	3800							1 10			1 20	10 330		13 230	2 30	8 340	
土坑 233	1080		3 110	3 60					2 20		2 20			4 30	3 20		
土坑 234	1795			1 10				1 10	1 10		2 20	1 10		13 350	1 10	4 100	
土坑 242	460											1 50		2 20		1 10	
土坑 247	130													2 20			
土坑 249	445		1 60														
土坑 250	145																

表4 土坑出土土器の時期別個体数(2)

(上段:口縁部破片数、下段:口縁部重量 g)

地点	総重量 g	中期					後期				晩期			後晩		所見		
		藤内	井戸	唐草	加E	不明	底部	称名	堀内	加B	上段	中K	前葉	中葉	後葉		無文	不明
土坑 251	835	1 10		1 870		2 20												
土坑 255	435							2 60	1 40				1 10					1 90
土坑 256	3720							1 10	2 20						1 10	1 10	6 140	
土坑 257	220								1 10						1 10		1 60	
土坑 258	3405					1 70		1 10	4 30		1 10	5 70	3 90		22 120	1 10	4 210	
土坑 262	550					1 50			1 10						4 60		2 10	
土坑 270	605								1 60						2 110		1 10	
土坑 272	1410														15 140		3 90	
土坑 290	5415										1 10		1 20	1 10	25 840	2 20	5 960	
土坑 292	3925							4 90	13 140		1 10				11 100	1 10	10 990	
土坑 296	5110	1 10							1 10	1 200		5 130	1 30		22 330		14 890	
土坑 304	1120			1 120											1 10			
土坑 308	1360								3 40						3 90		2 60	
土坑 311	450														2 20		1 10	
土坑 314	1990				1 30	2 20		4 80		1 10			1 10		5 40	1 30	11 160	
土坑 315	380											1 20	1 100		1 20			
土坑 317	470										1 10	3 170			1 10			
土坑 319	1420								1 10						5 60		4 110	
土坑 321	890			1 10								2 10			9 150			
土坑 322	1700								1						2	1	3 390	
土坑 326	530							1 10					1 20		4 40	1 20		
土坑 329	800							1 200								1 20	4 640	
土坑 339	1950								1 10						12 570		1 10	
土坑 347	440								2 40						1 230			
土坑 350	915							1 380	2 20		1 10	2 30			1 10			
土坑 351	855					1 30			3 90						2 20	1 10		
土坑 352	2150					2 130 a		1 10	1 20				4 50		16 170		5 360	

表5 土坑出土土器の時期別個体数(3)

(上段:口縁部破片数、下段:口縁部重量 g)

地点	総重量 g	中期						後期				晩期		後晩		所見		
		藤内	井戸	唐草	加E	不明	底部	称名	堀内	上段	中K	前葉	中葉	後葉	無文		不明	底部
土坑 354	935					1 40	2 20						1 40		1 10		6 170	
土坑 362	840					2 40	2 70								1 10		1 10	
土坑 363	405							1 30							3 80	1 10	7 70	
土坑 372	590		1 30										1 10		2 20		2 70	
土坑 380	1290								7 160	1 50			1 10		1 20		2 50	
土坑 384	3770						4 70	9 270	5 110	2 50	4 50	16 530			11 120	2 20	9 1000	
土坑 388	205							1 140										
土坑 390	3840							1 10	1 20	1 30	4 80	4 50			21 150	2 30	6 310	
土坑 391	0																	
土坑 399	795							3 80							1 10	2 40	5 50	
土坑 400	1675							1 40	3 90	1 30	1 30				8 90	3 40	2 30	
土坑 401	440									2 20				3 50	1 10			
土坑 405	6335						1 30	4 20	3 50	3 100	2 30	5 40	7 90		23 700	2 10	8 160	
土坑 406	6885							4 40	27 1150	1 30			3 40		21 1210	3 40	15 610	
S24 W21	37240		3 50	1 160		1 20		12 110	47 1030	7 110	2 30	4 70	21 1250		158 3440	77 3280		土406 関連C
土坑 407	675					1 50			5 140						3 40	3 390		
土坑 408	1570								1 10				2 50		6 90	5 290		
土坑 414	1310							3 50	1 10	1 20	1 20	1 40	1 10		4 60	2 20	7 200	
土坑 422	880												3 180	4 30	1 10	1 10		
土坑 429	6170		1 10		1 70			4 90	8 300	1 20		1 30	1 30		23 1120	3 20	13 520	
土坑 431	300								1 10			2 30			2 30			
土坑 433	625		1 140						1 20	2 10			1 80		2 10			
土坑 447	485											1 10	3 50		6 60		1 50	
土坑 451	3170		1 80		1 70				11 240	2 20		2 40	3 60		17 240		6 190	
土坑 457	12575			1 110	1 50			3 20	10 60	1 50	1 50	6 110	35 830		81 2310	4 30	25 1220	
土坑 459	185														4 40			
土坑 462	325		1 210															

表6 土坑出土土器の時期別個体数(4)

(上段:口縁部破片数、下段:口縁部重量 g)

地点	総重量 g	中期						後期				晩期			後晩		所見	
		藤内	井戸	唐草	加E	不明	底部	称名	堀内	加B	上段	中K	前葉	中葉	後葉	無文		不明
土坑 468	305								1 10						2 20		1 10	
土坑 469	885			2 80				2 40		2 60		2 40	1 10	3 750	1 30		1 90	
土坑 470	200														1 10			
土坑 475	925								4 140		2 40	1 10			6 60	1 10	4 130	
土坑 478	380										2 70				1 10	2 10	1 90	
土坑 481	295														3 10			
土坑 486	3100										6 460	4 100			1 10			
土坑 499	1335							1 10	1 10						7 130	1 10	4 240	
土坑 502	13330						4 80	5 30	17 640	2 20	5 70	3 30	18 640	4 40	79 990		28 610	
土坑 509	240					1 20			2 20						3 40			
土坑 521	475							2 20	1 10			2 20			1 10		2 10	
土坑 525	370												1 10		5 130			
土坑 526	185							1 10		1 10				2 50	1 10	1 10		
土坑 530	415															1 10	1 20	
土坑 534	350														2 10			
土坑 554	695									1 50							1 560	
土坑 555	210								2 90									
土坑 557	995												1 10					
土坑 561	1090				1 10					1 10				2 20	2 30		3 70	
土坑 569	385								1 10			1 40			3 20		3 50	
土坑 590	1720			6 300	1 20			1 50							2 50		1 30	
土坑 609	12235			1 20			1 30	8 60	10 60	4 100	2 150	27 400	1 60		75 790	11 70	30 700	
土坑 624	1670																1 1500	
土坑 631	185							1 10					3 20			1 10	3 180	
土坑 634	3265	1 10					4 150	3 20		2 20		1 10	1 10		16 100	1 40	4 100	
土坑 652	315														1 10		3 50	
土坑 654	660	2 210				1 190												

表7 土坑出土土器の時期別個体数(5)

(上段:口縁部破片数、下段:口縁部重量 g)

地点	総重量 g	中期						後期					晩期			後晩			所見	
		藤内	井戸	唐草	加E	不明	底部	称名	堀内	加B	上段	中K	前葉	中葉	後葉	無文	不明	底部		
土坑 750	505											1 10		10 320					1 10	
ビット 51	730															1 650	1 20			
ビット 89	395															1 1			1 260	

表 8 土坑・ビット出土土器の時期別個体数 (6)

(上段:口縁部破片数、下段:口縁部重量 g)

地点	総重量 g	中期						後期					晩期			後晩			所見	
		藤内	井戸	唐草	加E	不明	底部	称名	堀内	加B	上段	中K	前葉	中葉	後葉	無文	不明	底部		
S30 W36	21835					1 20			14 190	15 240	16 160	7 120	44 690	8 110	2 60	133 1570	4 20	61 1830		

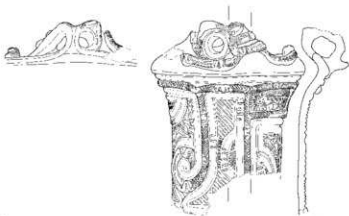
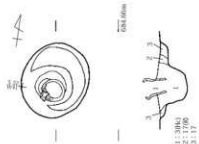
表 9 黒曜石集中地点関連グリッド出土土器の時期別個体数

(上段:口縁部破片数、下段:口縁部重量 g)

地点	総重量 g	中期						後期					晩期			後晩			所見	
		藤内	井戸	唐草	加E	不明	底部	称名	堀内	加B	上段	中K	前葉	中葉	後葉	無文	不明	底部		
S36		1	1	6	1	2			10	57	28	27	79	66	31	593	25	194		
W24	43210	10	100	130	10	20			50	880	750	680	1490	2370	1590	10180	200	9730		
S36		1		2		1			3	17	20	30	56	108	85	583	21	213		
W27	22670	20		50		30			120	250	280	770	1060	2100	3620	15430	190	14100		
S39				2					3	31	6	2	9	3	7	67	3	50		
W24	20825			90					30	770	190	70	170	40	240	2210	30	1690		
S39				1		1				58	5	9	14	9		103	9	77		
W27	27410			70		30				1620	100	250	280	110		1610	70	2810		

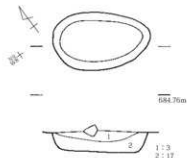
表 10 人面付土版埋納土坑関連グリッド出土土器の時期別個体数

【土坑 1】(第 1 分冊 図 31) (D1-1)



D1-1

【土坑 15】(第 1 分冊 図 21) (D15-1~D15-3)



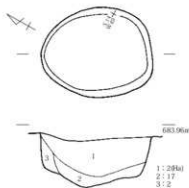
D15-1

D15-2

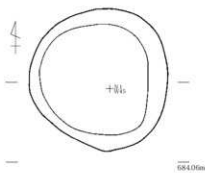


D15-3

【土坑 24】(第 1 分冊 図 25) (D24-1)



【土坑 16】(第 1 分冊 図 25) (D16-1~D16-8)



0.8x1.00m



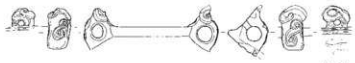
D16-1



D16-2



D16-3



D16-4



D16-5



D16-6



D16-7



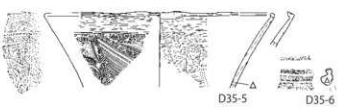
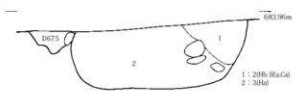
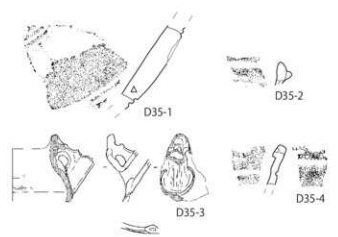
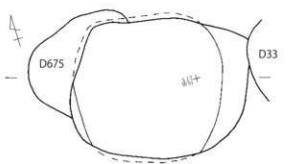
D16-8

D24-1



图 43 土坑及び出土土器実測図・拓影(1)

[土坑 35] (第1分冊 図30) (D35-1 ~ D35-9)



[土坑 37] (第1分冊 図30) (D37-1 ~ D37-6)

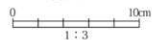
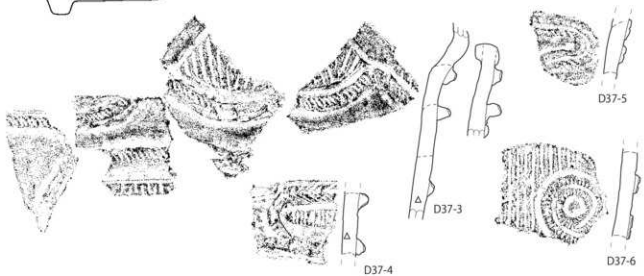
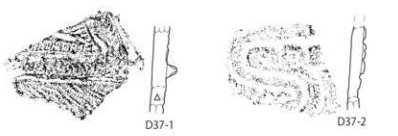
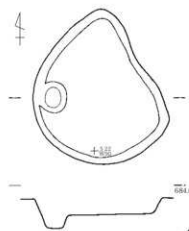
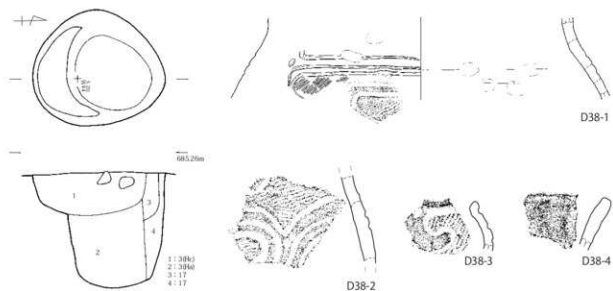


図 44 土坑及び出土土器実測図・拓影(2)

[土坑 38] (第1分冊 図30) (D38-1 ~ D38-4)



[土坑 41] (第1分冊 図31) (D41-1 ~ D41-15)

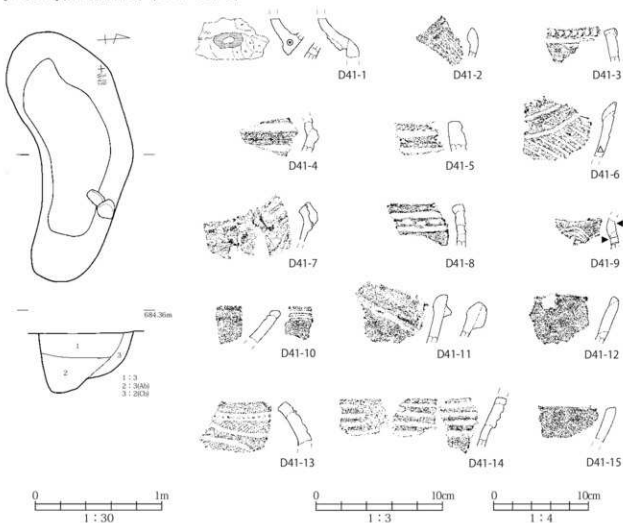
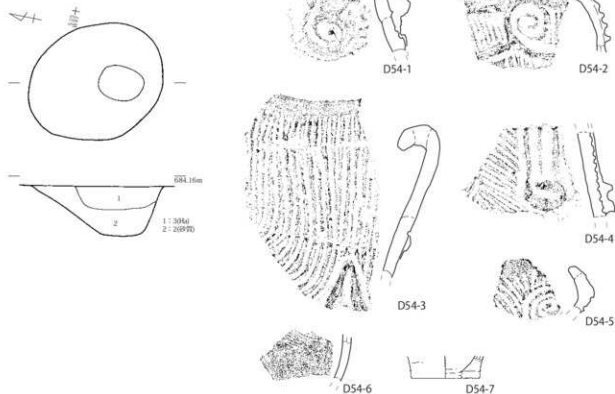


図45 土坑及び出土土器実測図・拓影(3)

[土坑 54] (第1分冊 図30) (D54-1 ~ D54-7)



[土坑 57] (第1分冊 図30) (D57-1 ~ D57-10)

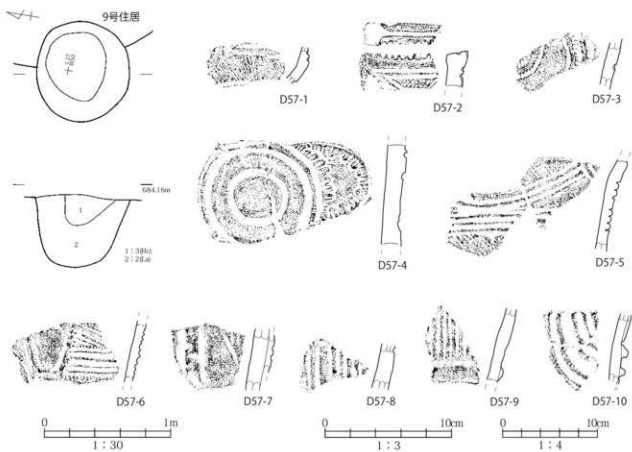
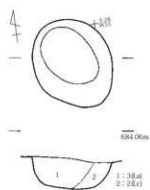
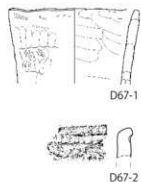
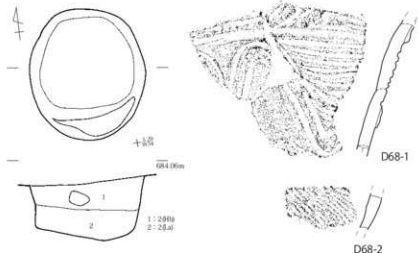


图 46 土坑及び出土土器実測図・拓影(4)

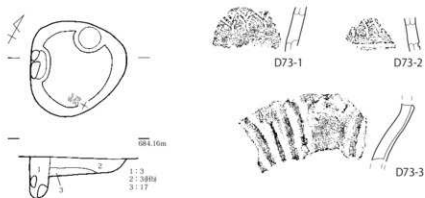
【土坑 67】
 (第 1 分冊 圖 29) (D67-1 ~ D67-2)



【土坑 68】(第 1 分冊 圖 29) (D68-1 ~ D68-2)



【土坑 73】(第 1 分冊 圖 30) (D73-1 ~ D73-3)



【土坑 78】(第 1 分冊 圖 26) (D78-1 ~ D78-11)

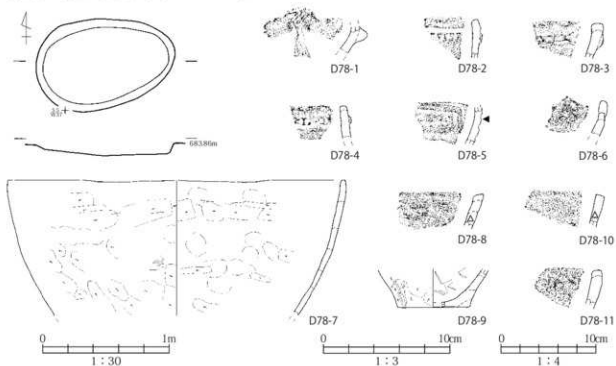


图 47 土坑及び出土土器実測図・拓影(5)

[土坑 80] (第1分冊 図27) (D80-1 ~ D80-47)

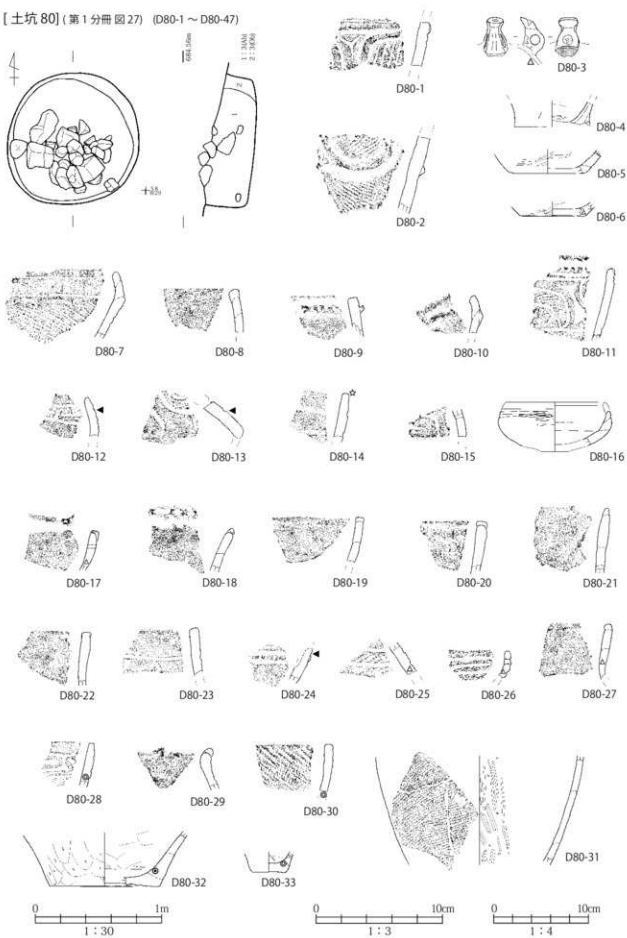
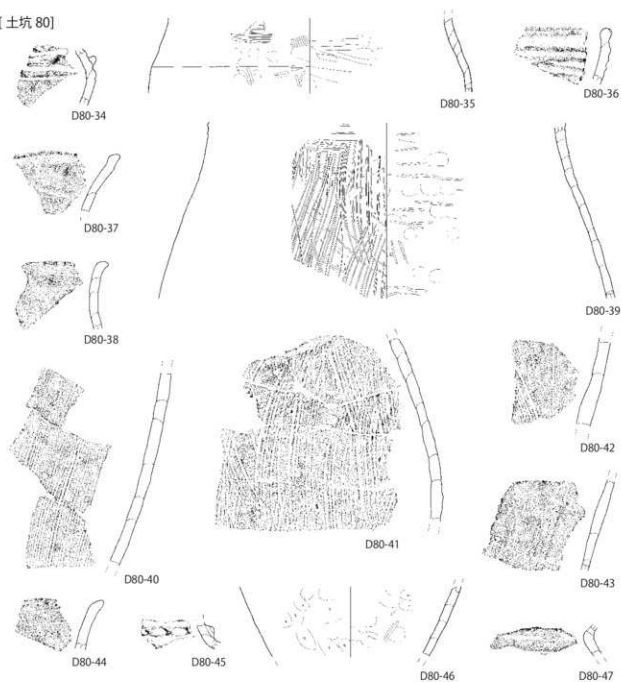


图 48 土坑及び出土土器実測図・拓影(6)

[土坑 80]



[土坑 81] (第1分冊 圖 27) (D81-1 ~ D81-24)

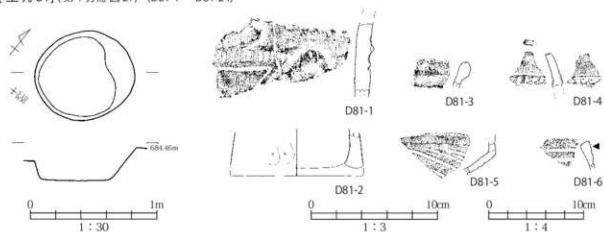
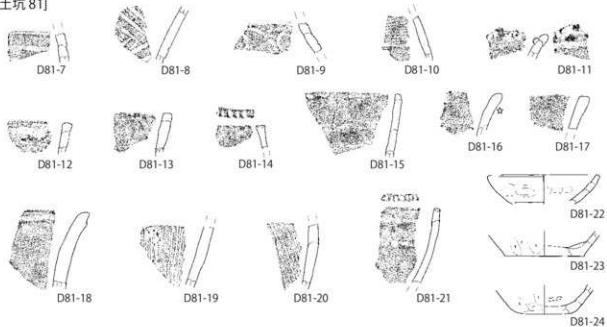


図 49 土坑及び出土土器実測図・拓影(7)

[土坑 81]



[土坑 91] (第1分冊 図 31) (D91-1 ~ D91-12)

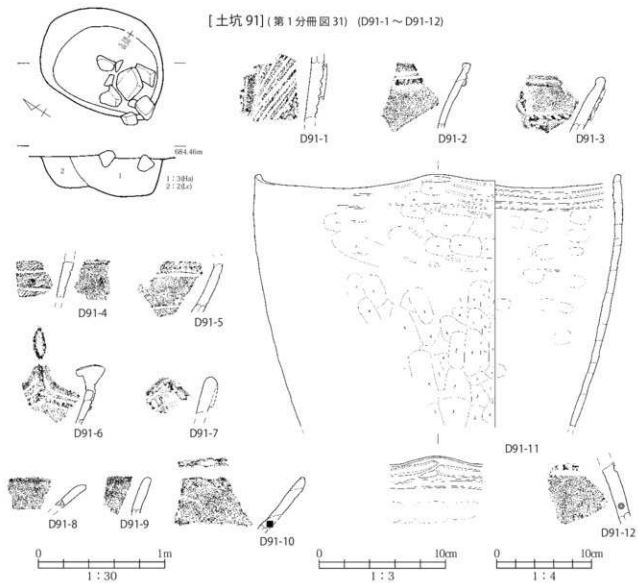
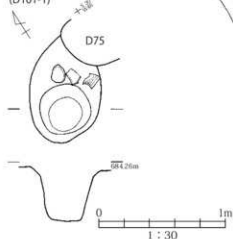
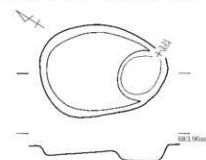


图 50 土坑及び出土土器実測図・拓影(8)

[土坑 101] (第1分冊 図30)
(D101-1)



[土坑 114] (第1分冊 図29) (D114-1 ~ D114-2)



[土坑 115]
(第1分冊 図29)
(D115-1)

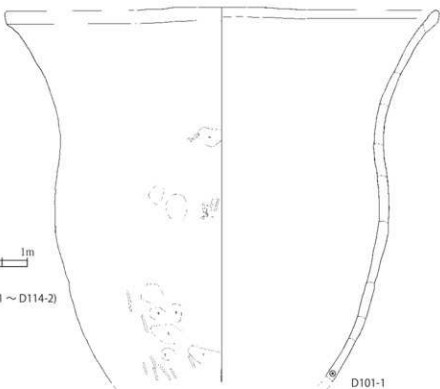
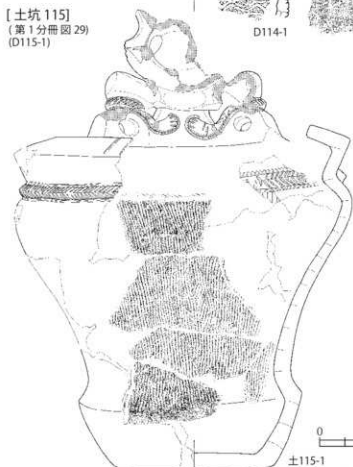
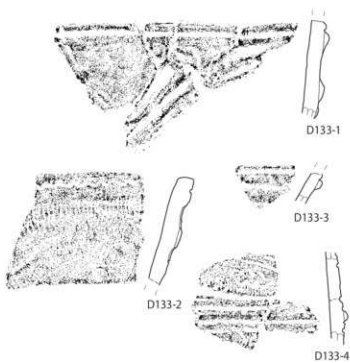
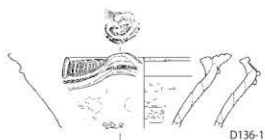


図51 土坑及び出土土器実測図・拓影(9)

[土坑 133] (第1分冊 図31) (D133-1 ~ D133-4)



[土坑 136] (第1分冊 図31) (D136-1)



[土坑 137] (第1分冊 図31) (D137-1 ~ D137-8)

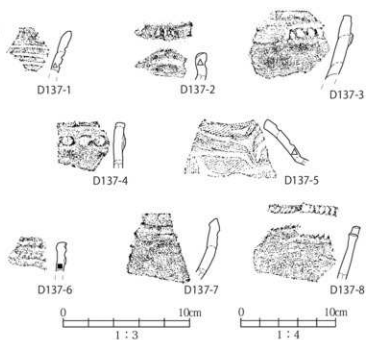
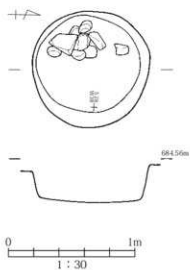
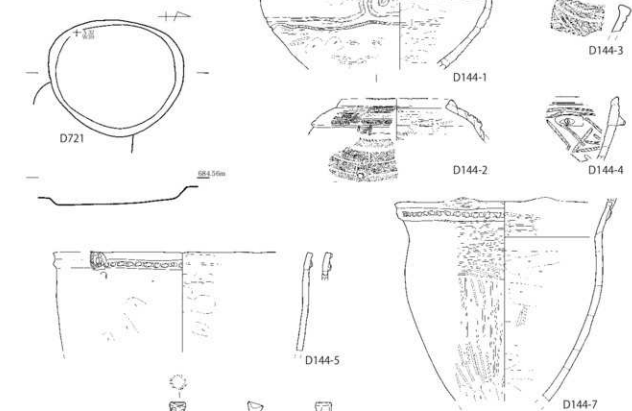


図52 土坑及び出土土器実測図・拓影(10)

[土坑 144] (第 1 分冊 図 31)
(D144-1 ~ D144-14)



[土坑 146] (第 1 分冊 図 30) (D146-1)

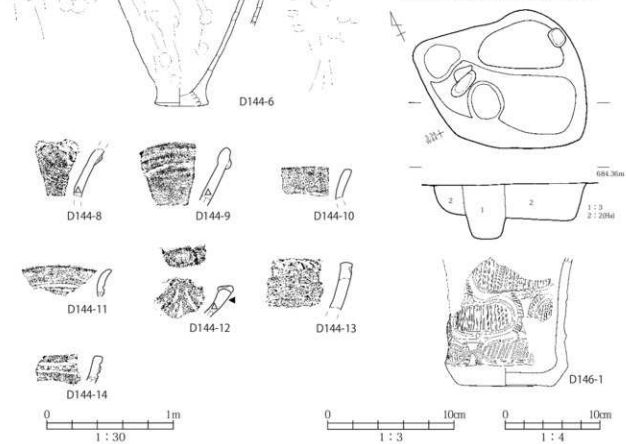
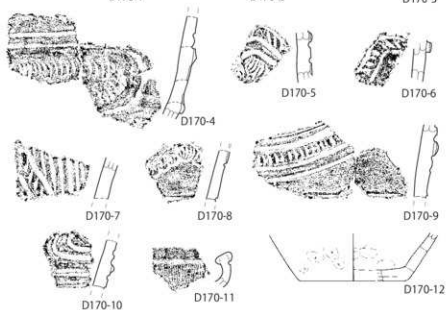
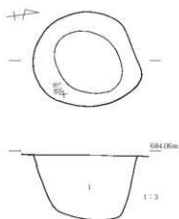


図 53 土坑及び出土土器実測図・拓影 (11)

[土坑 167] (第 1 分冊 図 35) (D167-1)



[土坑 170] (第 1 分冊 図 35)
(D170-1 ~ D170-12)



[土坑 172] (第 1 分冊 図 35) (D172-1 ~ D172-8)

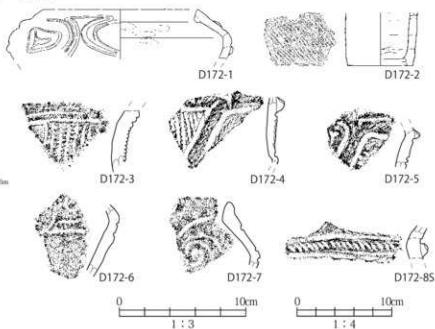
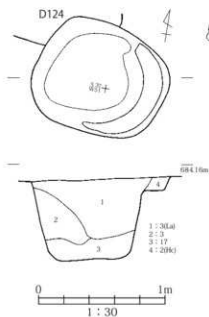
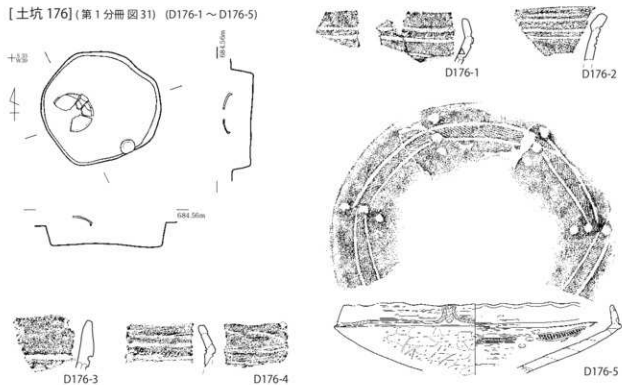
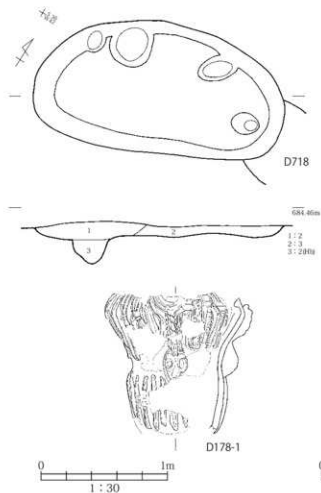


図 54 土坑及び出土土器実測図・拓影(12)

[土坑 176] (第1分冊 図31) (D176-1 ~ D176-5)



[土坑 178] (第1分冊 図36) (D178-1)



[土坑 196] (第1分冊 図35) (D196-1 ~ D196-4)

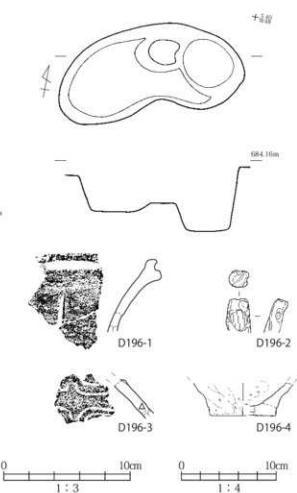


図 55 土坑及び出土土器実測図・拓影(13)

[土坑 200] (第 1 分冊 図 31)
 (D200-1 ~ D200-44, D200・G1 ~ D200・G4)

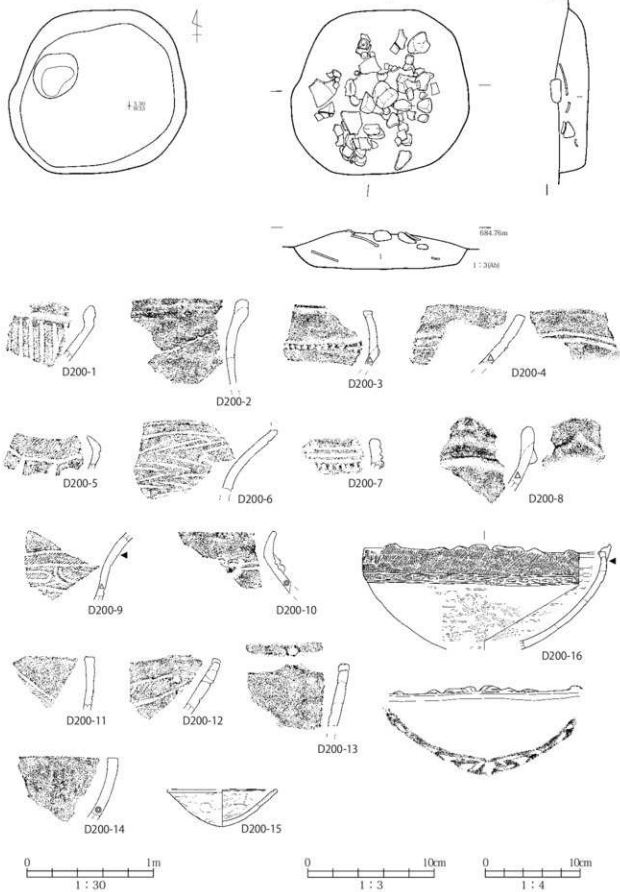


図 56 土坑及び出土土器実測図・拓影 (14)

[土坑 200]

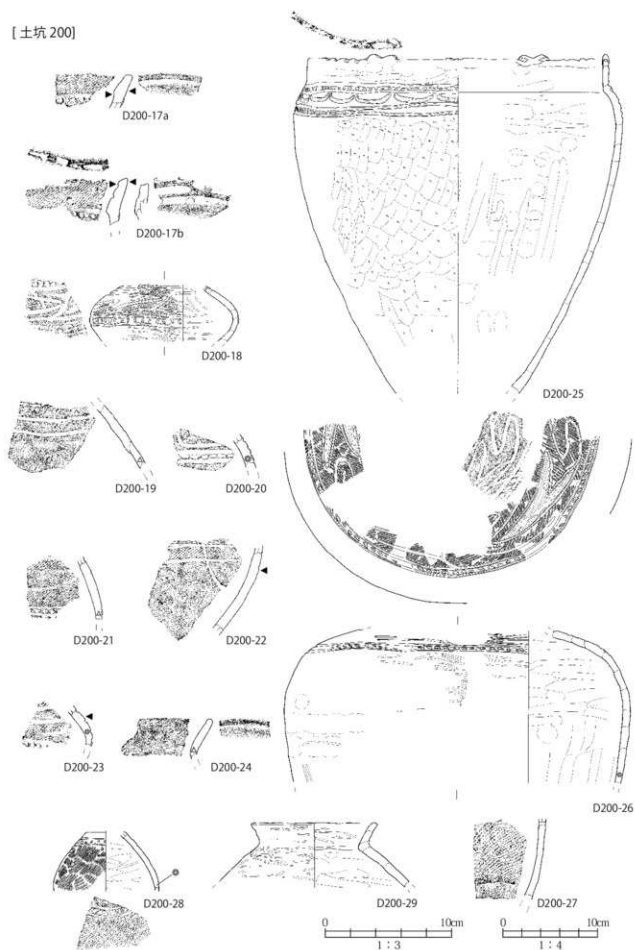


图 57 土坑出土土器实测图·拓影 (15)

[土坑 200]

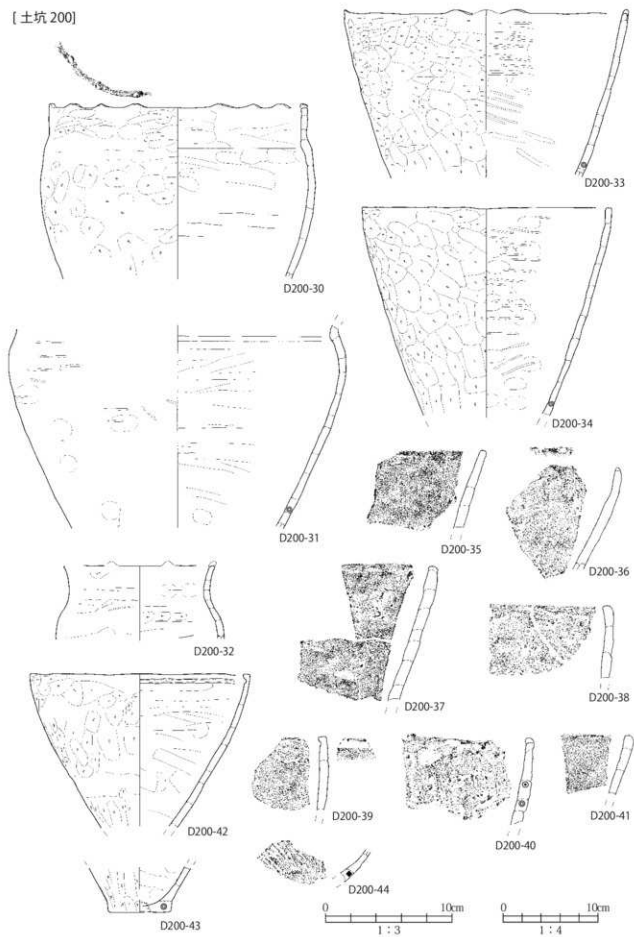
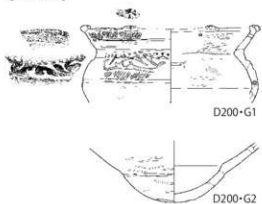
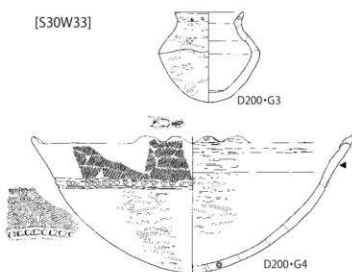


图 58 土坑出土土器实测图·拓影(16)

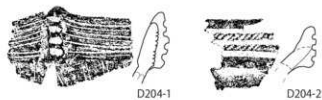
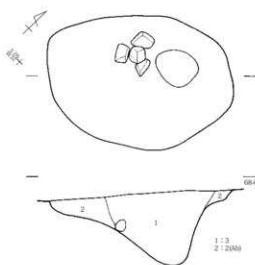
[S27W33]



[S30W33]



[土坑 204] (第1分冊 図31) (D204-1 ~ D204-8)



[土坑 207] (第1分冊 図31) (D207-1 ~ D207-2)

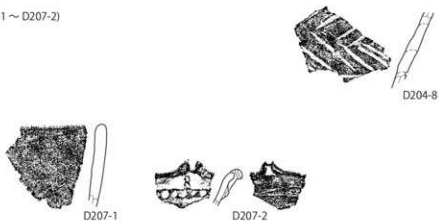
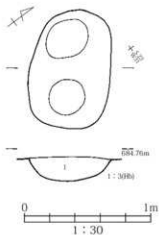


图 59 土坑及び出土土器実測図・拓影(17)

[土坑 208] (第 1 分冊 図 31) (D208-1 ~ D208-24)

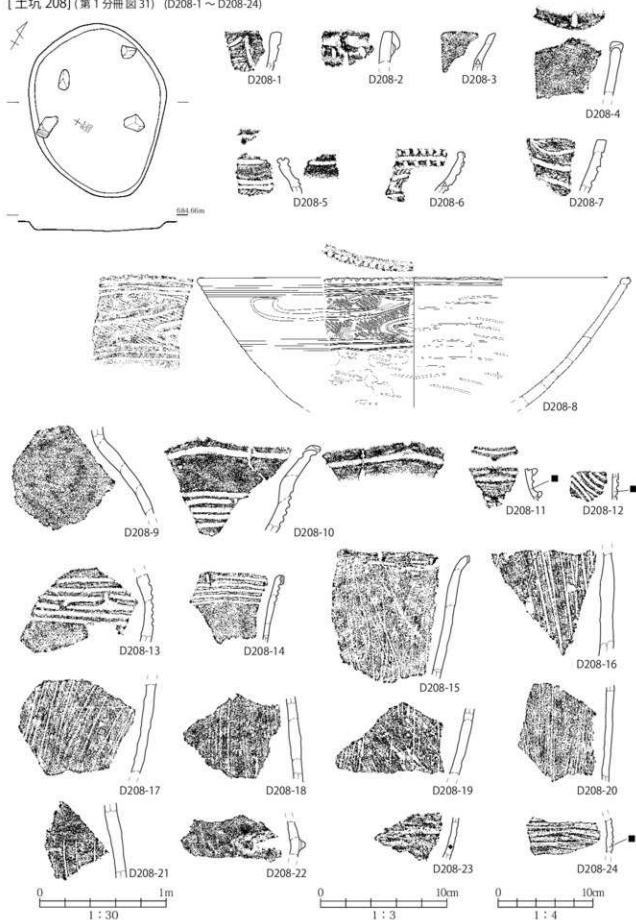
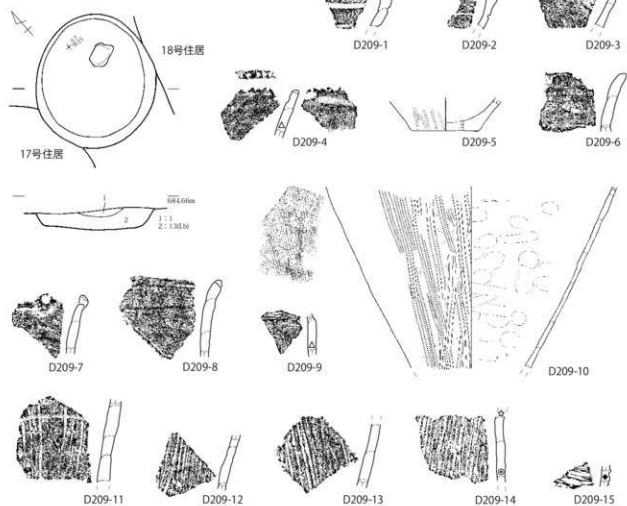


図 60 土坑及び出土土器実測図・拓影(18)

[土坑 209] (第1分冊 図27) (D209-1 ~ D209-15)



[土坑 210] (第1分冊 図27) (D210-1 ~ D210-19)

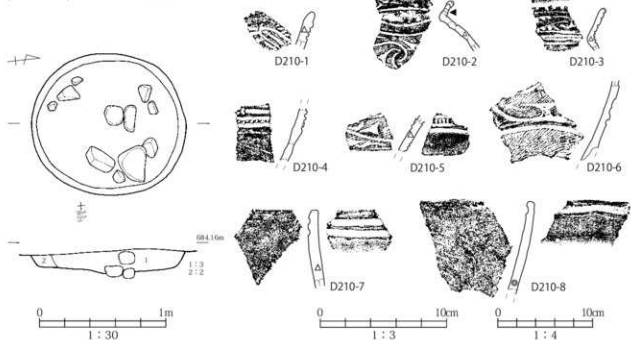
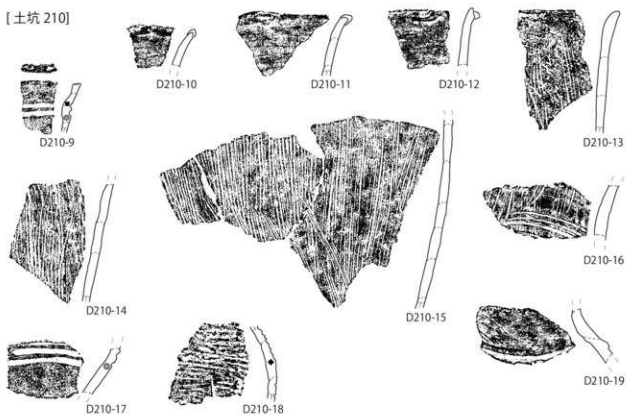
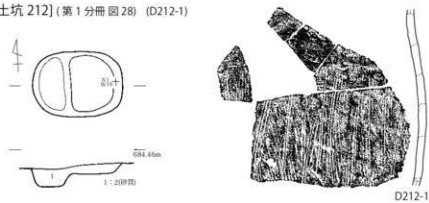


図 61 土坑及び出土土器実測図・拓影 (19)

[土坑 210]



[土坑 212] (第 1 分冊 図 28) (D212-1)



[土坑 213] (第 1 分冊 図 28) (D213-1 ~ D213-5)

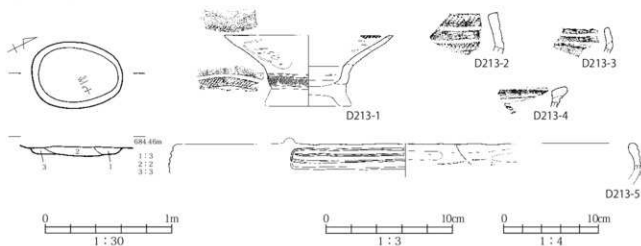
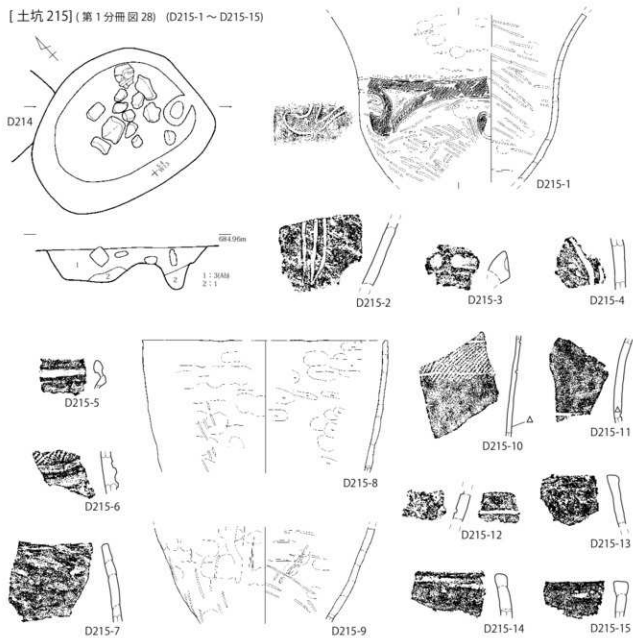


图 62 土坑及び出土土器実測図・拓影(20)

[土坑 215] (第1分冊 図 28) (D215-1 ~ D215-15)



[土坑 222]

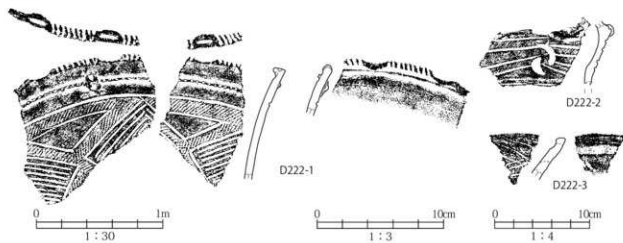
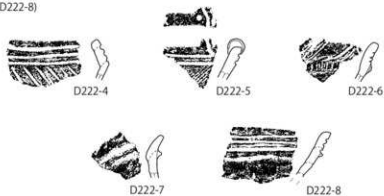
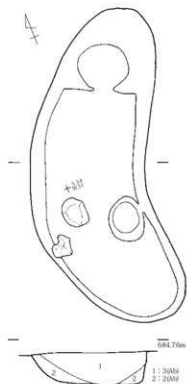
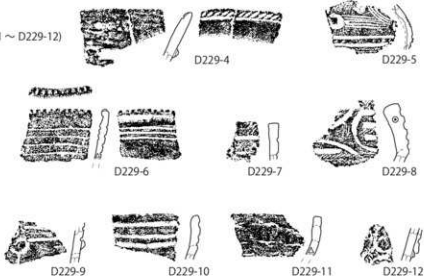
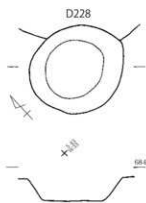


図 63 土坑及び出土土器実測図・拓影 (21)

[土坑 222] (第 1 分冊 図 31) (D222-1 ~ D222-8)



[土坑 229] (第 1 分冊 図 36) (D229-1 ~ D229-12)



[土坑 231]

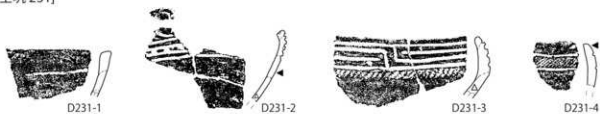
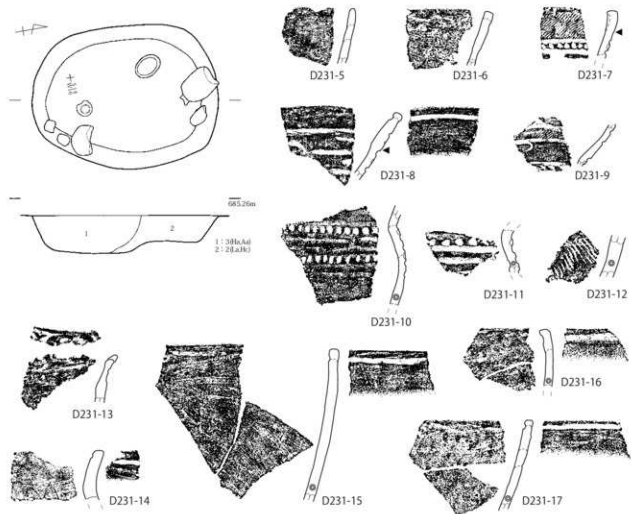


図 64 土坑及び出土土器実測図・拓影(22)

[土坑 231] (第 1 分冊 図 28) (D231-1 ~ D231-23)



[土坑 233] (第 1 分冊 図 28) (D233-1 ~ D233-2)

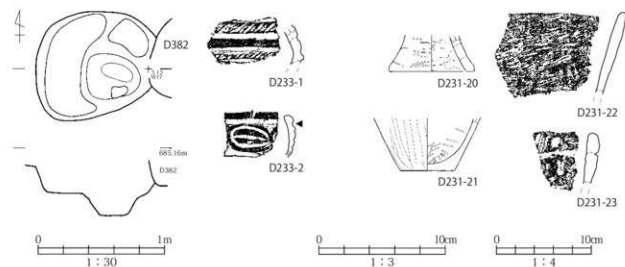
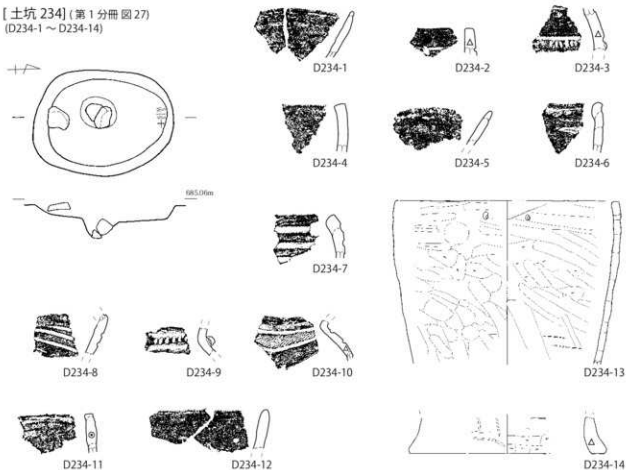


図 65 土坑及び出土土器実測図・拓影(23)

[土坑 234] (第1分冊 図27)
(D234-1 ~ D234-14)



[土坑 242] (第1分冊 図38) (D242-1 ~ D242-6)

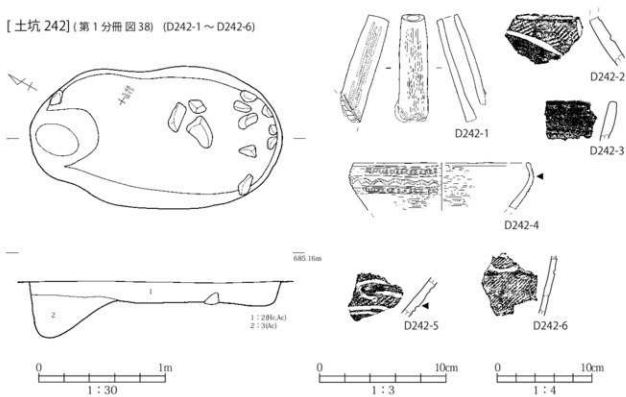
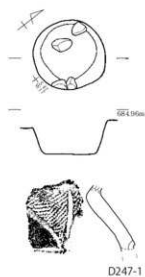
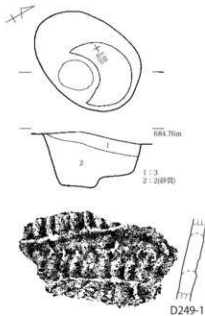


図 66 土坑及び出土土器実測図・拓影(24)

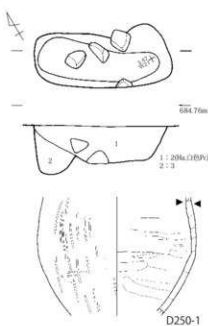
[土坑 247] (第1分冊 図38)
(D247-1)



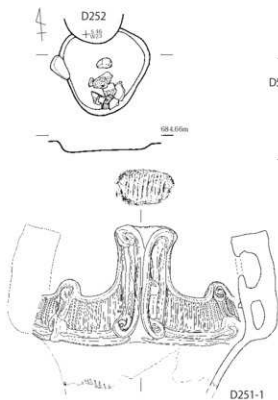
[土坑 249] (第1分冊 図37)
(D249-1 ~ D249-5)



[土坑 250] (第1分冊 図37)
(D250-1)



[土坑 251] (第1分冊 図37) (D251-1)



[土坑 255] (第1分冊 図37) (D255-1 ~ D255-7)

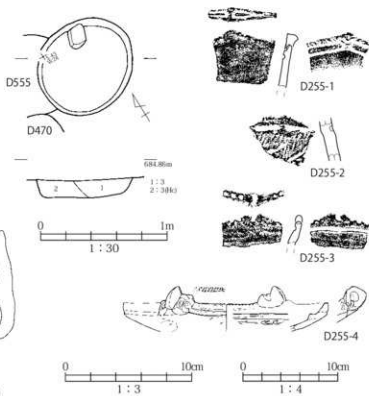
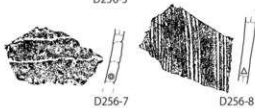
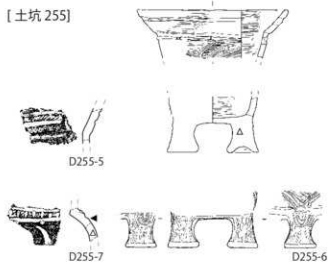


図 67 土坑及び出土土器実測図・拓影 (25)

[土坑 255]



[土坑 256] (第1分冊 図 37) (D256-1 ~ D256-10)

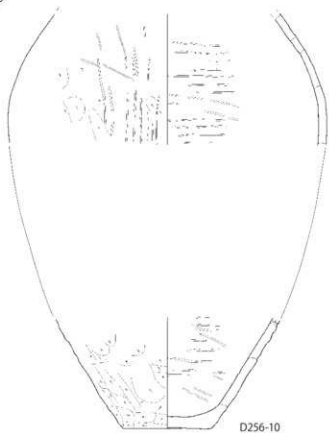
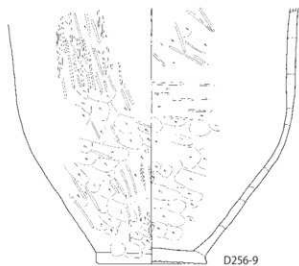
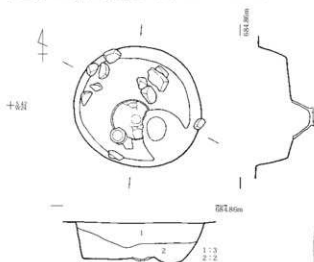
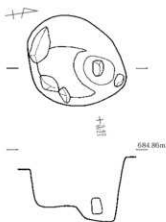


図 68 土坑及び出土土器実測図・拓影 (26)

[土坑 257] (第 1 分冊 図 37)
(D257-1 ~ D257-3)



D257-1

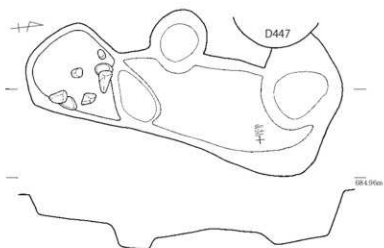


D257-2



D257-3

[土坑 258] (第 1 分冊 図 37) (D258-1 ~ D258-24)



D258-1



D258-2



D258-3



D258-4



D258-5



D258-6



D258-7



D258-8



D258-9



D258-10



D258-11



D258-12



D258-13



D258-14



D258-15



D258-16



D258-17



D258-18



D258-19



D258-20



D258-21



D258-22



D258-23

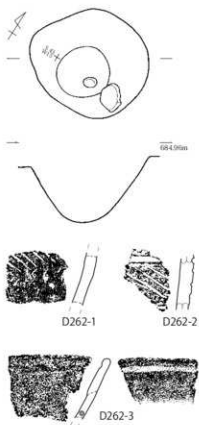


D258-24

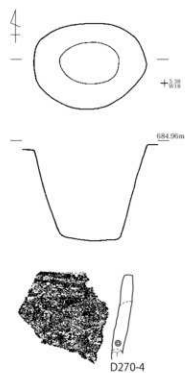


図 69 土坑及び出土土器実測図・拓影(27)

【土坑 262】(第1分冊 図 38) (D262-1 ~ D262-3)



【土坑 270】(第1分冊 図 37)
(D270-1 ~ D270-4)



【土坑 272】(第1分冊 図 37)
(D272-1 ~ D272-9)

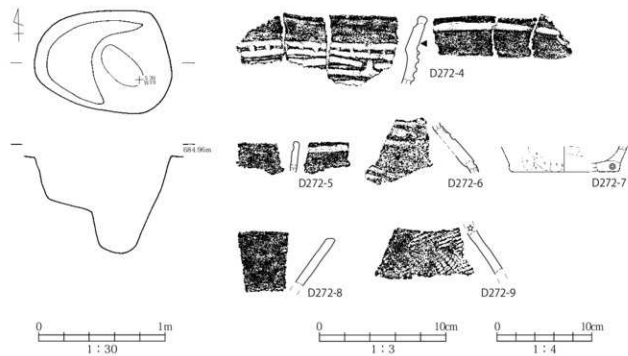


図 70 土坑及び出土土器実測図・拓影(28)

[土坑 290] (第1分冊 図28) (D290-1 ~ D290-19)

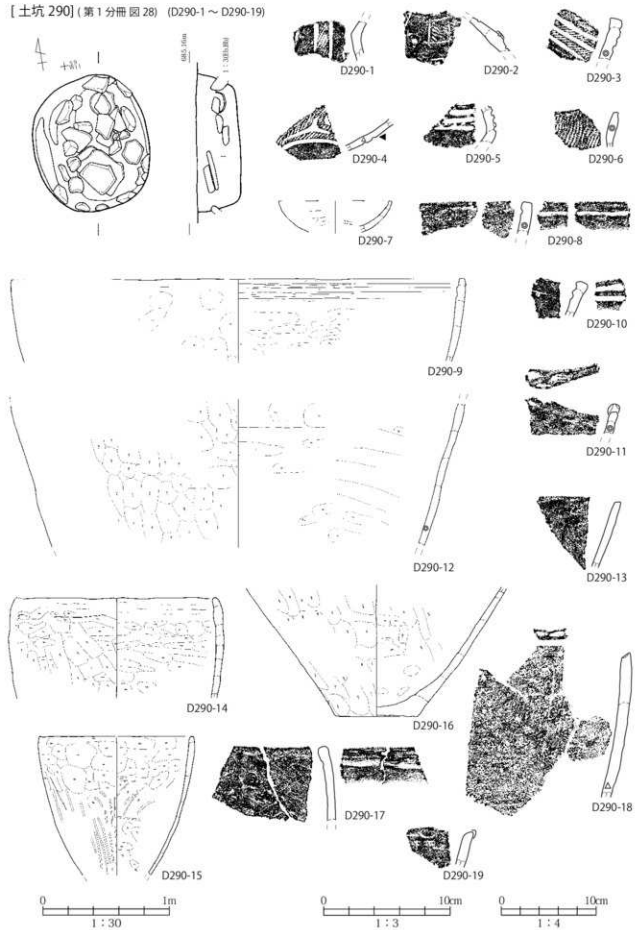
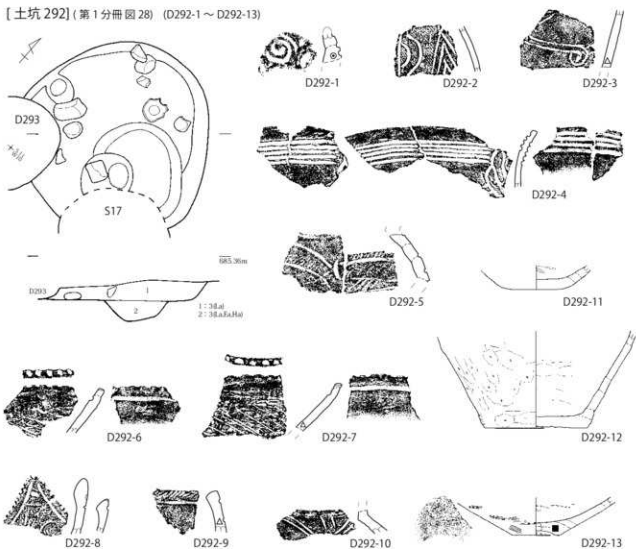


図 71 土坑及び出土土器実測図・拓影(29)

[土坑 292] (第1分冊 図 28) (D292-1 ~ D292-13)



[土坑 296] (第1分冊 図 28) (D296-1 ~ D296-23)

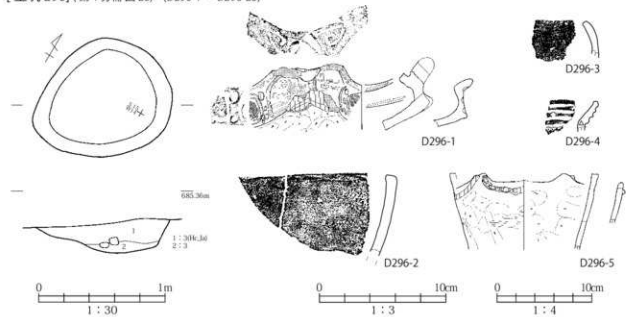
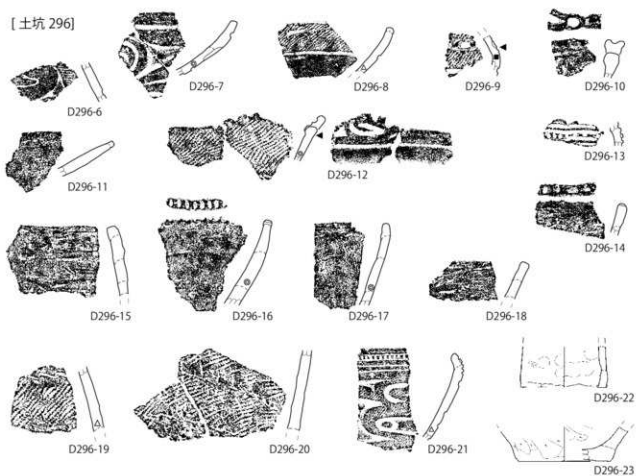


図 72 土坑及び出土土器実測図・拓影(30)

[土坑 296]



[土坑 304] (第1分冊 図 33)
 (D304-1 ~ D304-13)

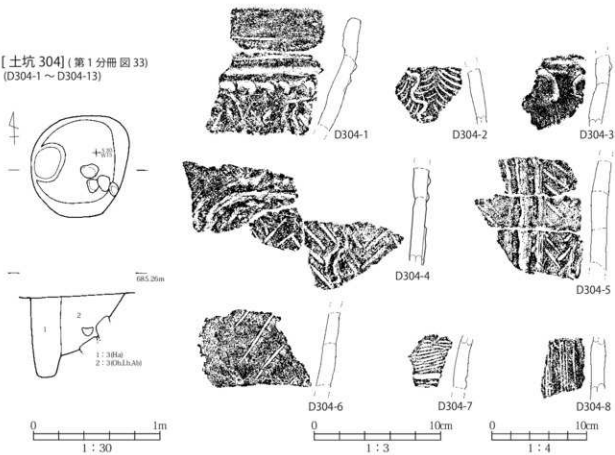
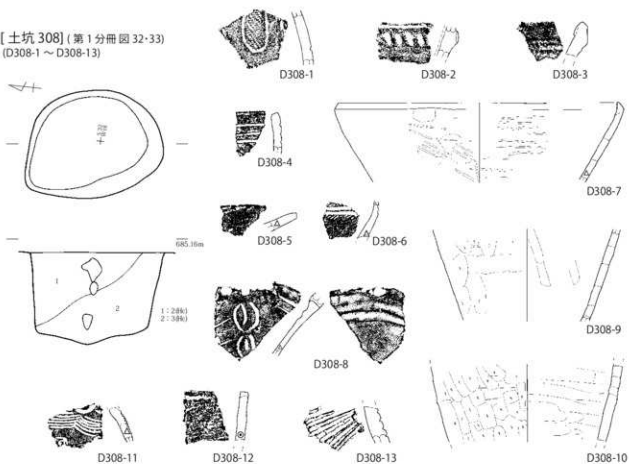


图 73 土坑及び出土土器実測図・拓影(31)

[土坑 304]



[土坑 308] (第1分冊 図 32-33)
(D308-1 ~ D308-13)



[土坑 311] (第1分冊 図 32) (D311-1 ~ D311-4)

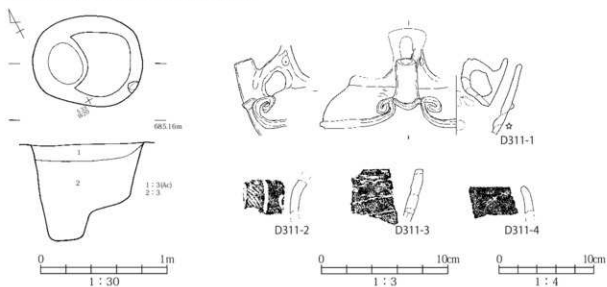
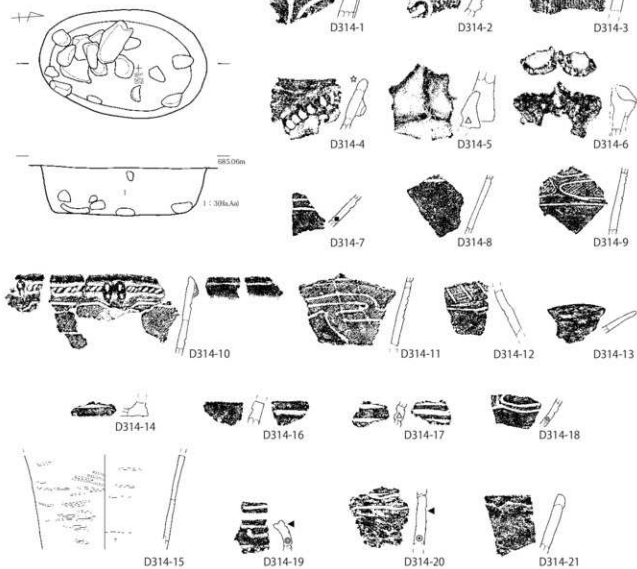


図 74 土坑及び出土土器実測図・拓影(32)

[土坑 314] (第1分冊 図32)
(D314-1 ~ D314-21)



[土坑 315] (第1分冊 図28) (D315-1 ~ D315-4)

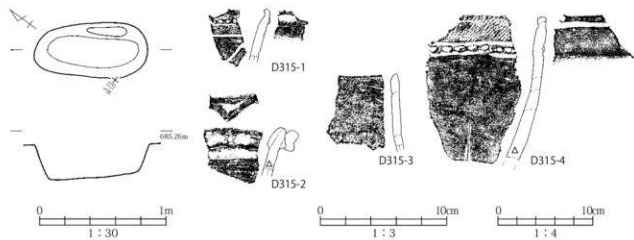
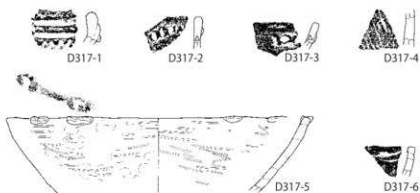
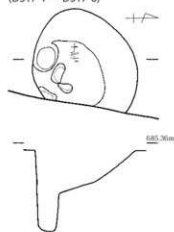
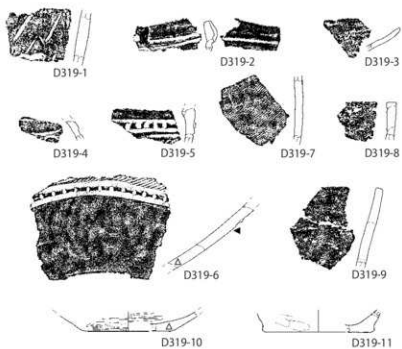
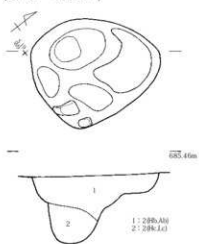


图 75 土坑及び出土土器実測図・拓影 (33)

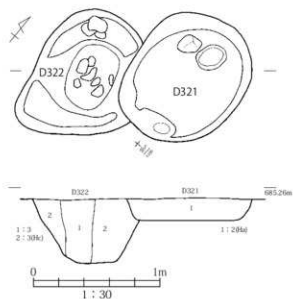
[土坑 317] (第1分冊 図28)
(D317-1 ~ D317-6)



[土坑 319] (第1分冊 図33)
(D319-1 ~ D319-11)



[土坑 321・土坑 322] (第1分冊 図33)



[土坑 321] (D321-1 ~ D321-5)

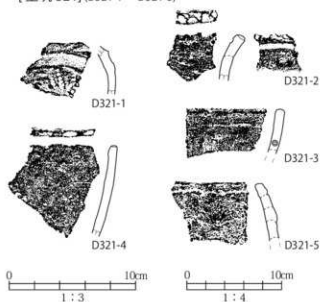
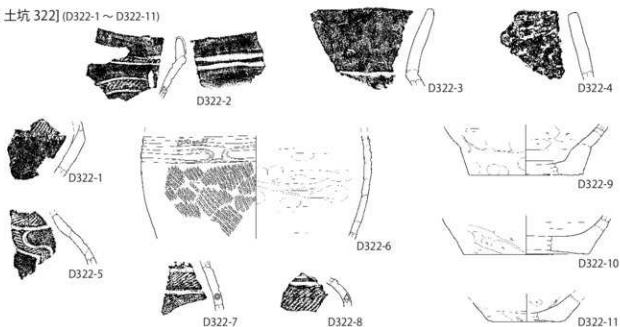
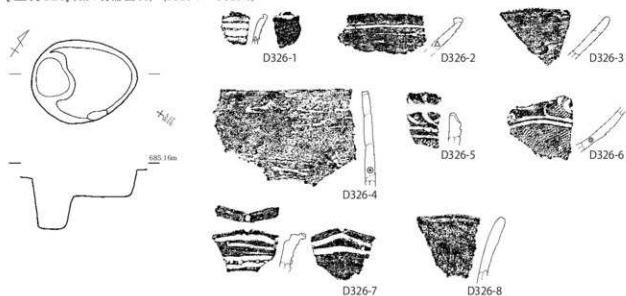


図 76 土坑及び出土土器実測図・拓影(34)

[土坑 322] (D322-1 ~ D322-11)



[土坑 326] (第1分冊 図33) (D326-1 ~ D326-8)



[土坑 329] (第1分冊 図32) (D329-1 ~ D329-2)

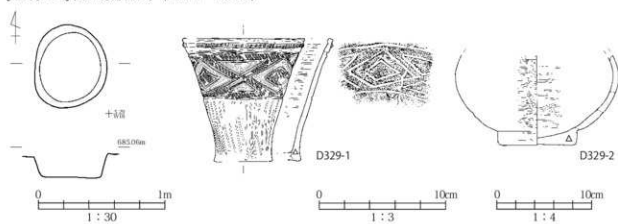
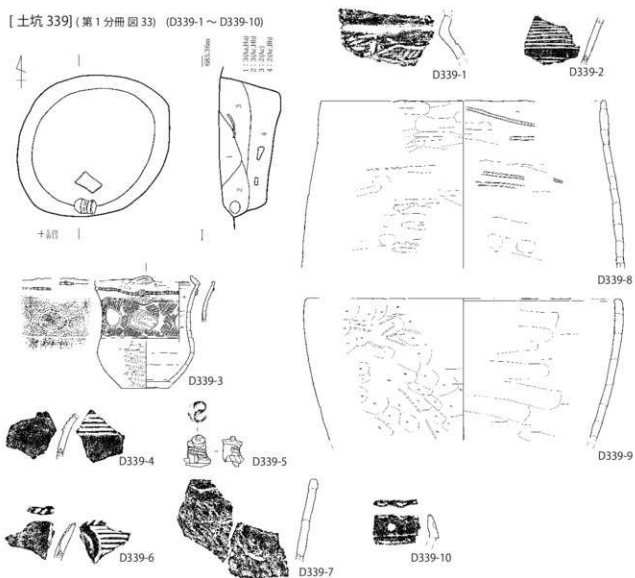


図77 土坑及び出土土器実測図・拓影(35)

[土坑 339] (第1分冊 図33) (D339-1 ~ D339-10)



[土坑 347] (第1分冊 図33) (D347-1 ~ D347-4)

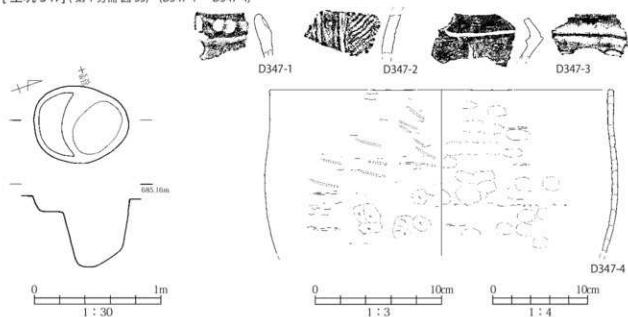
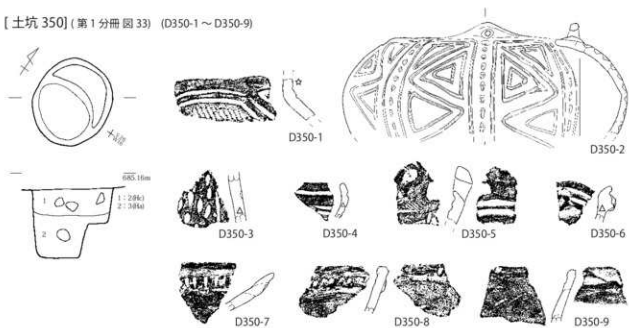
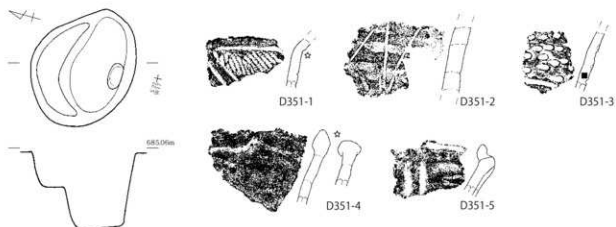


图 78 土坑及び出土土器実測図・拓影(36)

【土坑 350】(第1分冊 図33) (D350-1～D350-9)



【土坑 351】(第1分冊 図33) (D351-1～D351-5)



【土坑 352】(第1分冊 図32) (D352-1～D352-19)

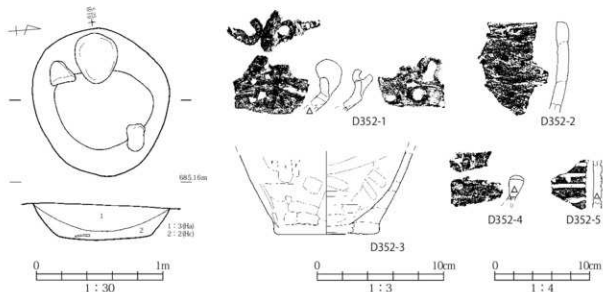
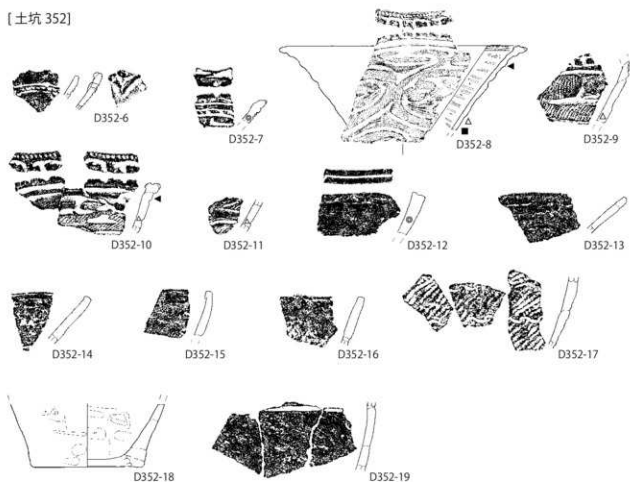


図 79 土坑及び出土土器実測図・拓影(37)

[土坑 352]



[土坑 354] (第1分冊 図 32) (D354-1 ~ D354-8)

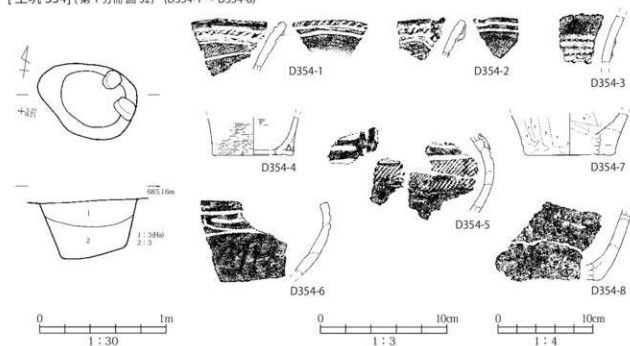
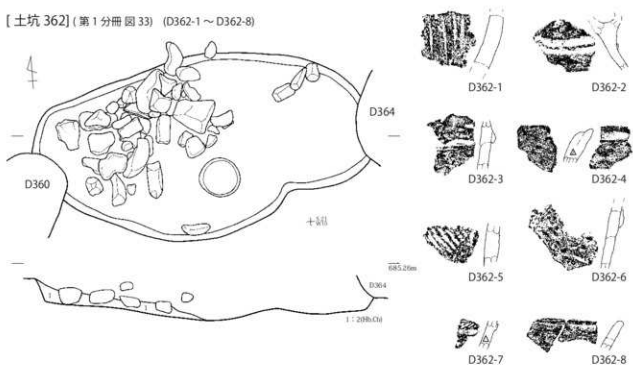
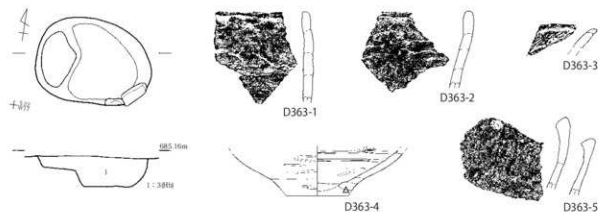


図 80 土坑及び出土土器実測図・拓影 (38)

[土坑 362] (第1分冊 図33) (D362-1～D362-8)



[土坑 363] (第1分冊 図33) (D363-1～D363-5)



[土坑 372] (第1分冊 図33) (D372-1～D372-5)

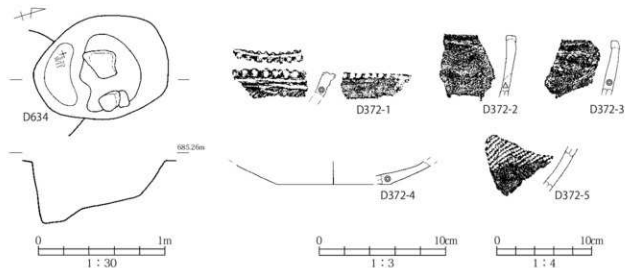
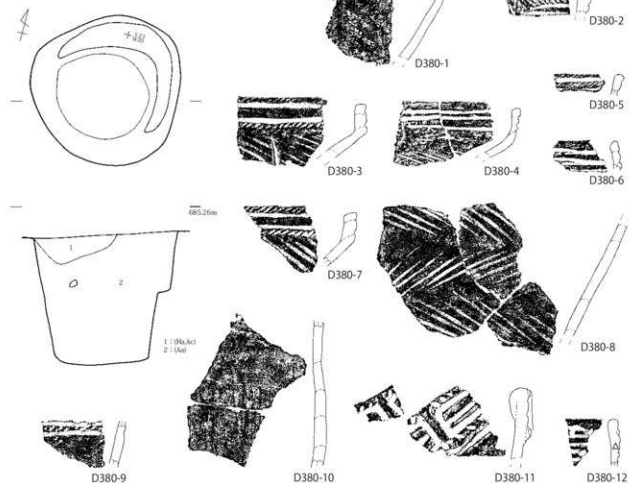


図81 土坑及び出土土器実測図・拓影(39)

[土坑 380] (第 1 分冊 図 32)
(D380-1 ~ D380-12)



[土坑 384] (第 1 分冊 図 32)
(D384-1 ~ D384-20)

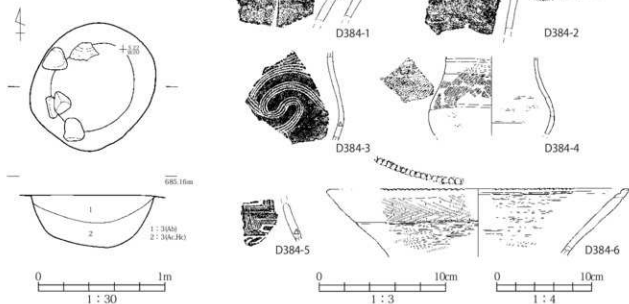
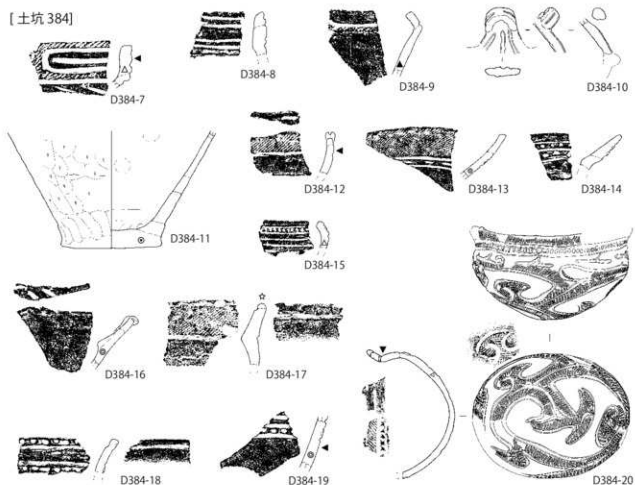
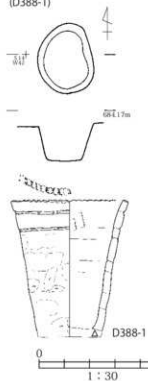


图 82 土坑及び出土土器実測図・拓影(40)

[土坑 384]



[土坑 388] (第1分冊圖26)
(D388-1)



[土坑 390] (第1分冊圖27) (D390-1 ~ D390-11)

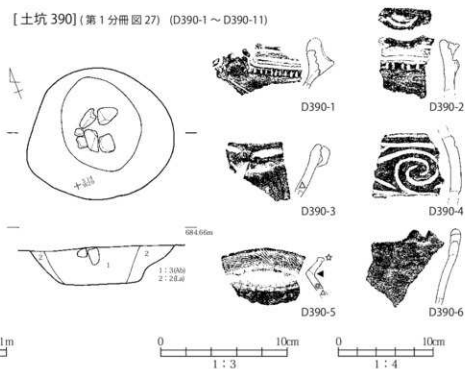
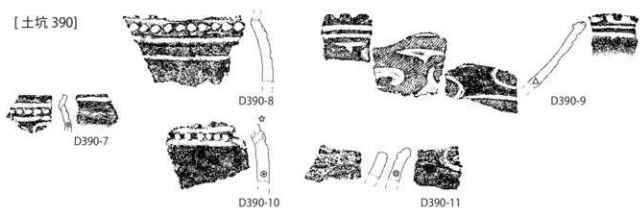
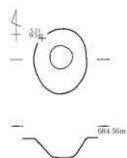


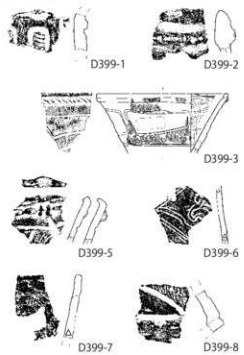
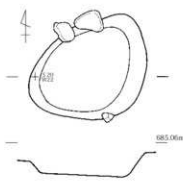
图 83 土坑及び出土土器実測図・拓影(41)



[土坑 391] (第1分冊 図 31)



[土坑 399] (第1分冊 図 32) (D399-1 ~ D399-8)



[土坑 400] (第1分冊 図 32) (D400-1 ~ D400-18)

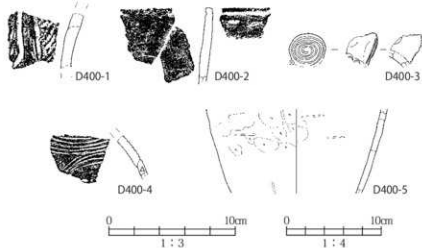
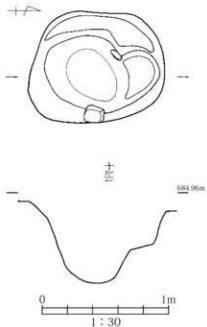
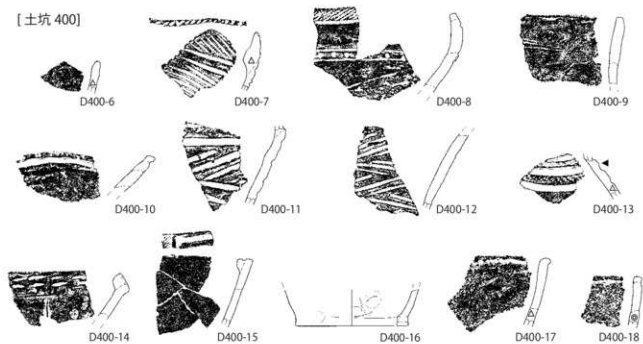
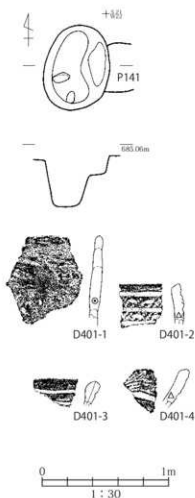


图 84 土坑及び出土土器実測図・拓影 (42)

[土坑 400]



[土坑 401] (第 1 分冊 圖 32)
(D401-1 ~ D401-4)



[土坑 405] (第 1 分冊 圖 32) (D405-1 ~ D405-19)

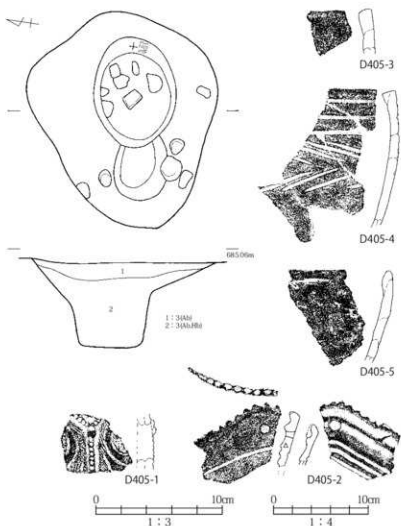
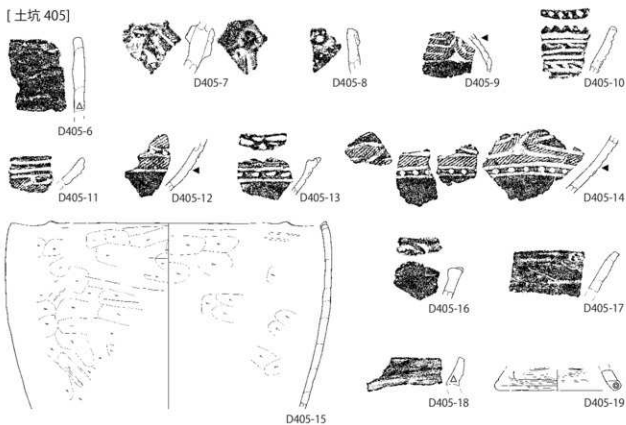


图 85 土坑及び出土土器実測図・拓影 (43)

[土坑 405]



[土坑 406] (第1分冊 図 32) (D406-1 ~ D406-80, D406・G1 ~ D406・G21)

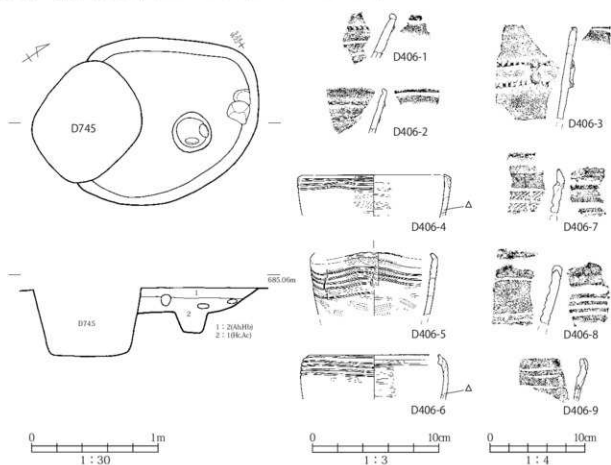


图 86 土坑及び出土土器実測図・拓影 (44)

[土坑 406]

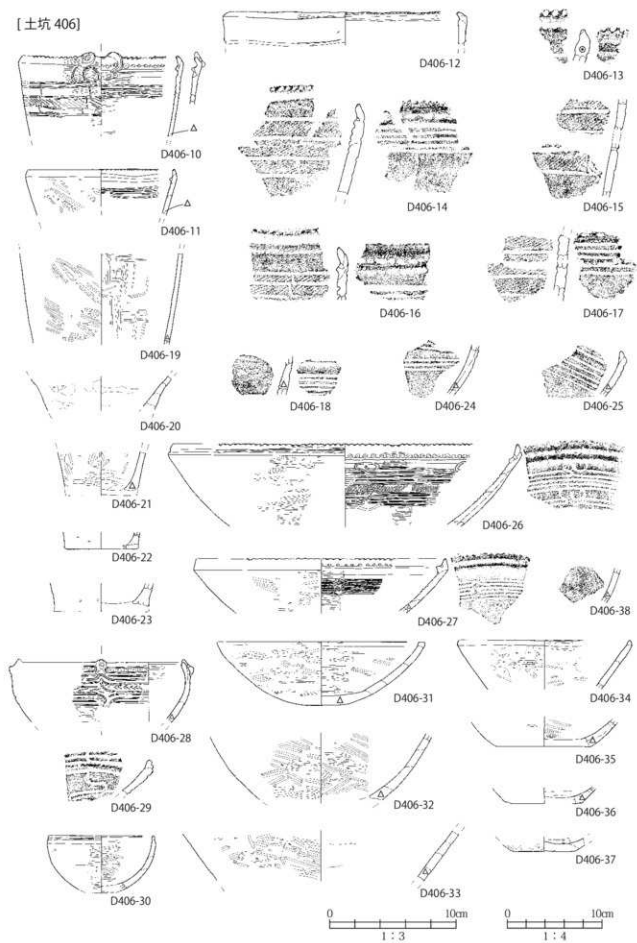


图 87 土坑出土土器实测图·拓影(45)

[土坑 406]

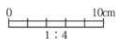
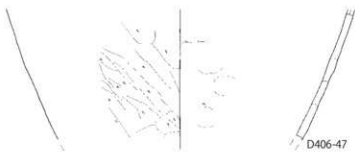
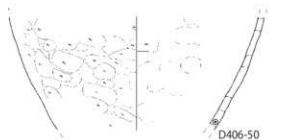
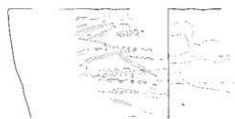
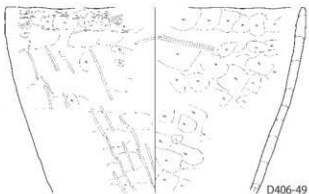
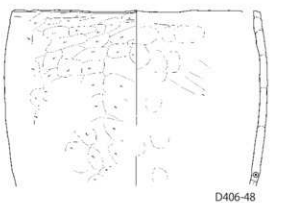
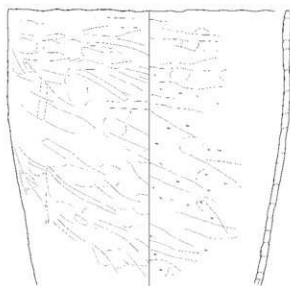
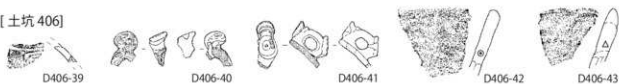
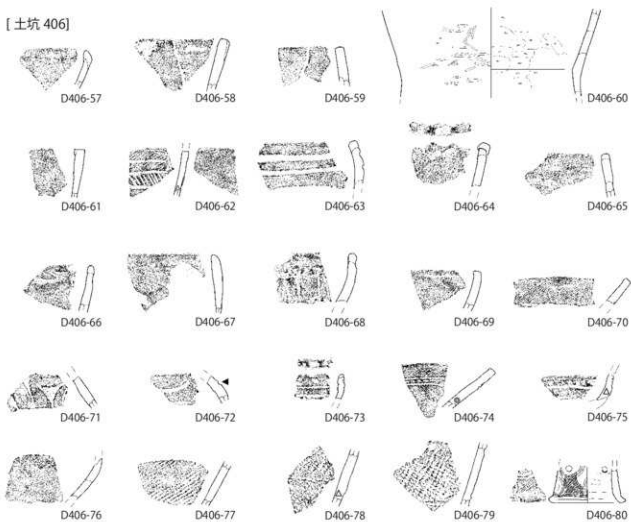


图 88 土坑出土土器实测图·拓影(46)

[土坑 406]



[S24W21]

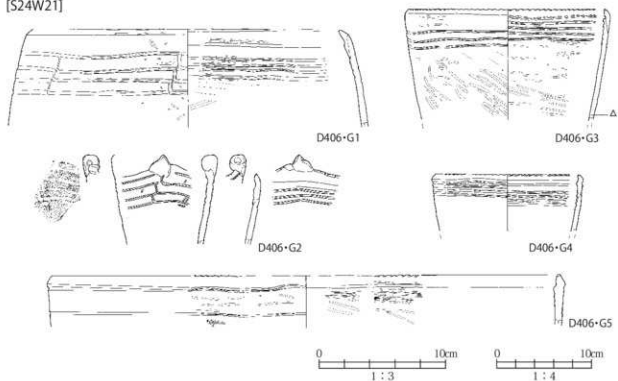
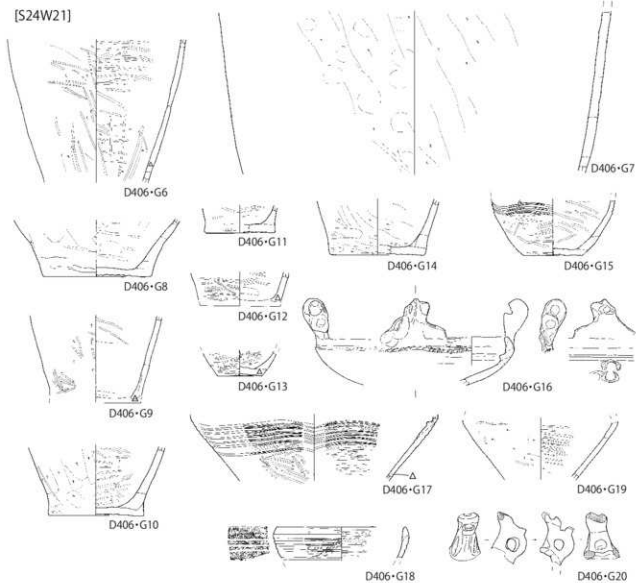


图 89 土坑出土土器实测图·拓影(47)

[S24W21]



[土坑 407] (第 1 分冊 圖 32)
(D407-1 ~ D407-8)

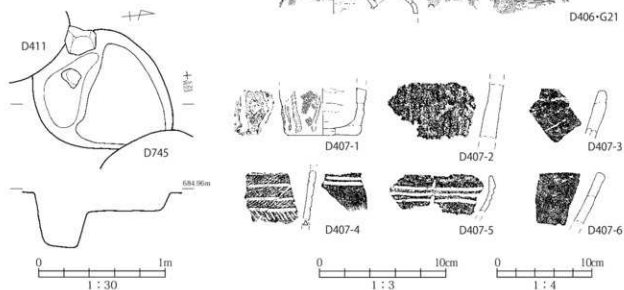
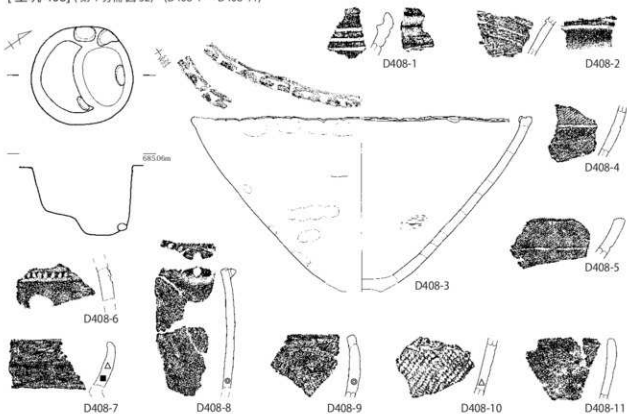


図 90 土坑及び出土土器実測図・拓影 (48)

[土坑 407]



[土坑 408] (第1分冊 図 32) (D408-1 ~ D408-11)



[土坑 414] (第1分冊 図 32) (D414-1 ~ D414-15)

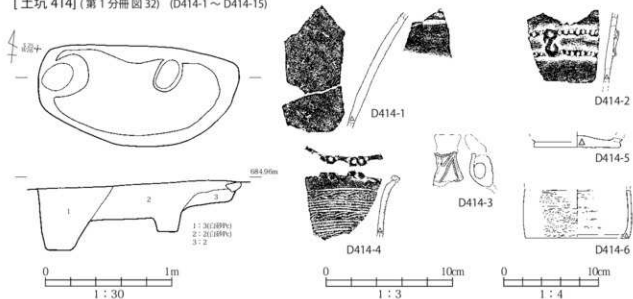
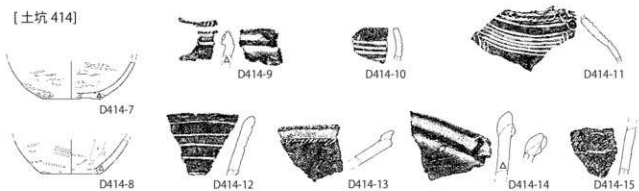
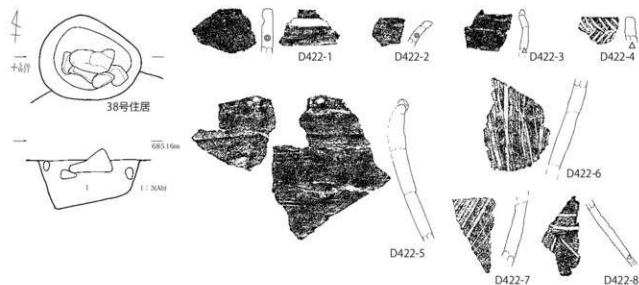


图 91 土坑及び出土土器実測図・拓影 (49)

【土坑 414】



【土坑 422】(第 1 分冊 図 32) (D422-1 ~ D422-8)



【土坑 429】(第 1 分冊 図 32) (D429-1 ~ D429-5)

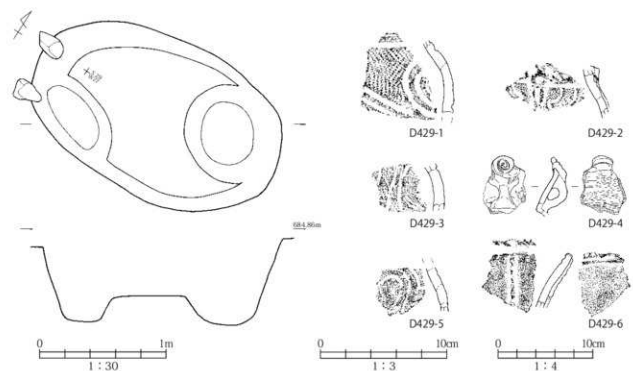


图 92 土坑及び出土土器実測図・拓影(50)

[土坑 429]

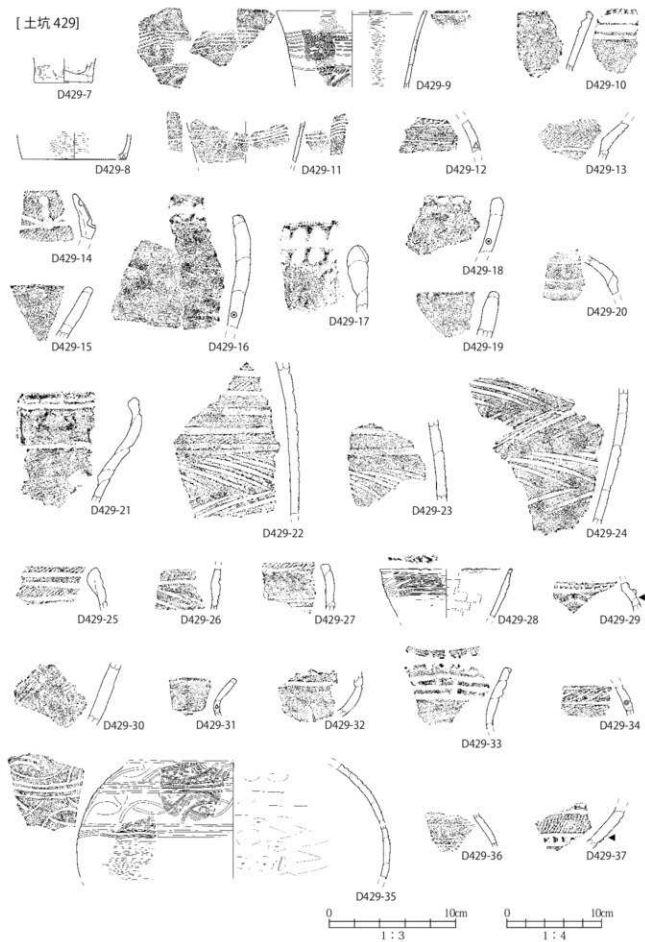
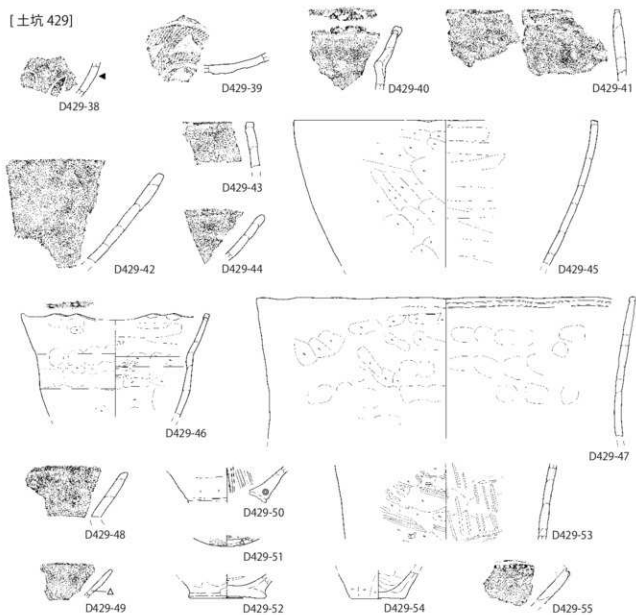


图 93 土坑出土土器实测图·拓影(51)

[土坑 429]



[土坑 431] (第1分冊 図 32) (D431-1 ~ D431-11)

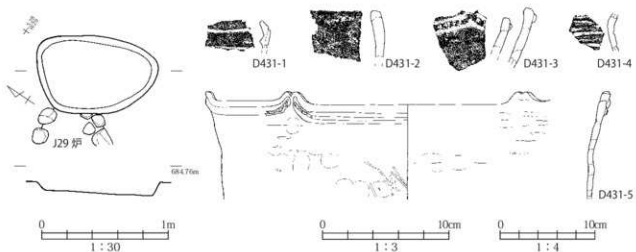
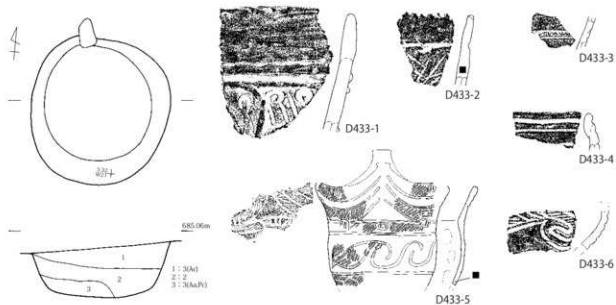


图 94 土坑及び出土土器実測図・拓影(52)

[土坑 431]



[土坑 433] (第1分冊 図32) (D433-1 ~ D433-6)



[土坑 447] (第1分冊 図37) (D447-1 ~ D447-7)

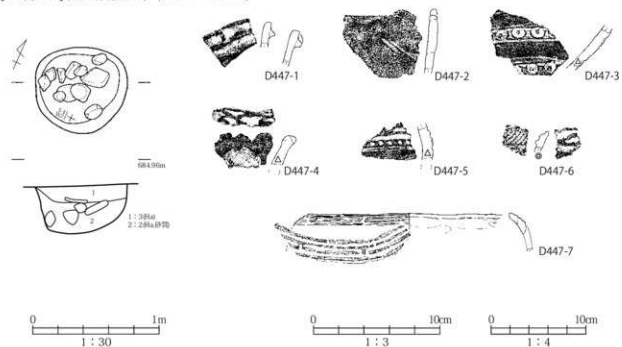
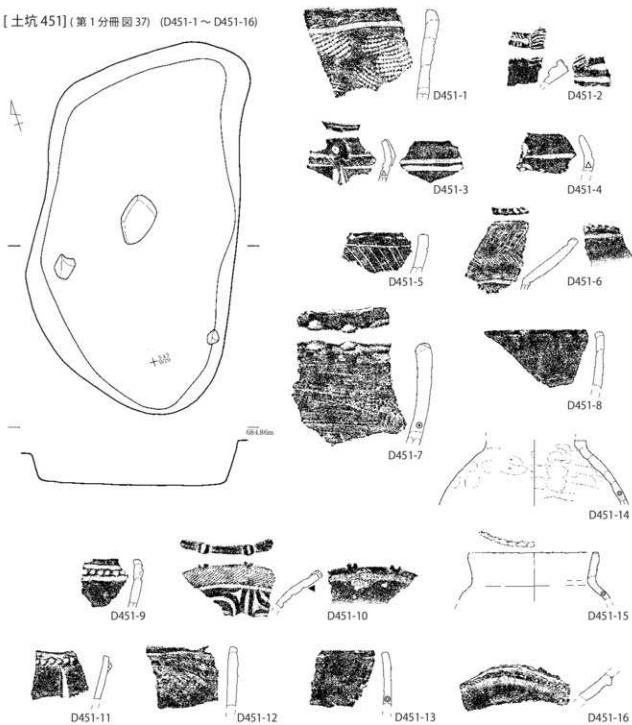


図 95 土坑及び出土土器実測図・拓影(53)

[土坑 451] (第1分冊 図37) (D451-1 ~ D451-16)



[土坑 457]

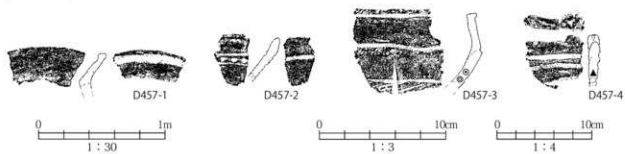


図96 土坑及び出土土器実測図・拓影(54)

【土坑 457】(第 1 分冊 圖 37)
(D457-1 ~ D457-71)

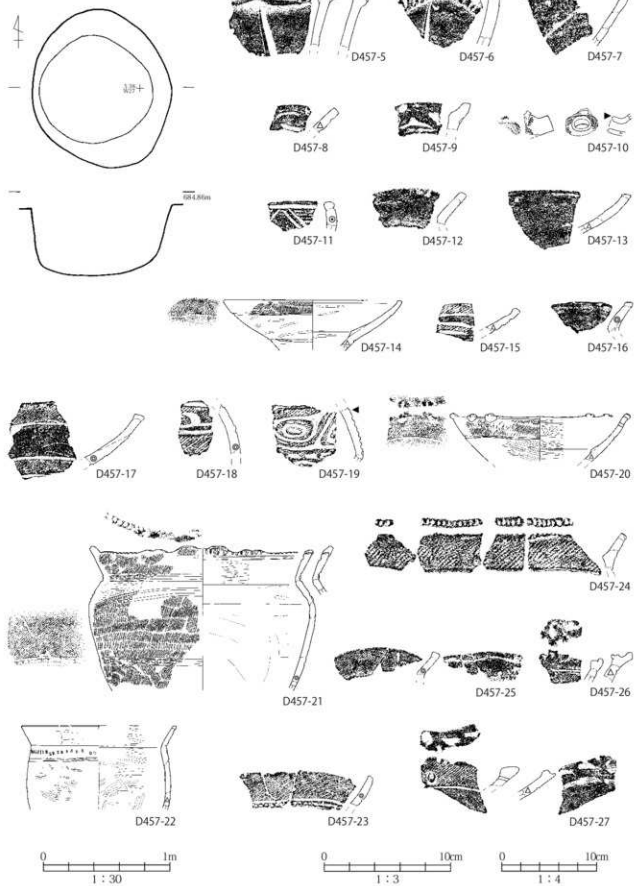


图 97 土坑及び出土土器実測図・拓影 (55)

[土坑457]



D457-28



D457-29



D457-30



D457-31



D457-32



D457-33



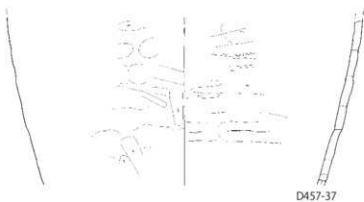
D457-34



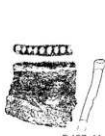
D457-35



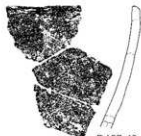
D457-36



D457-37



D457-41



D457-42



D457-43



D457-44



D457-38



D457-45



D457-39



D457-46



1:3



1:4

图98 土坑出土土器实测图·拓影(56)

[土坑 457]

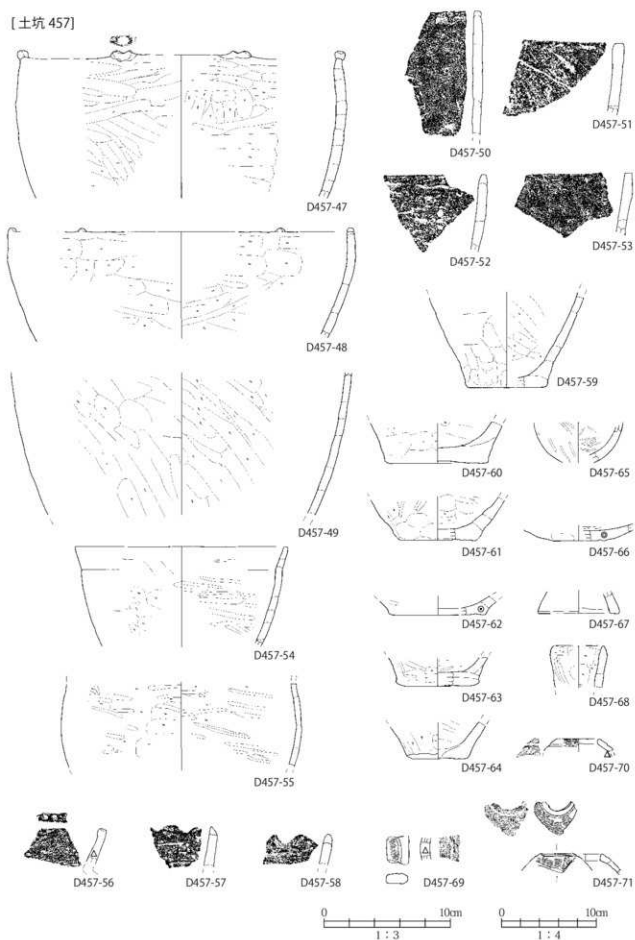
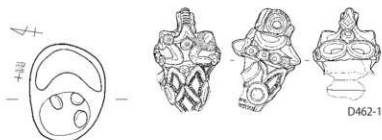


图 99 土坑出土土器实测图·拓影(57)

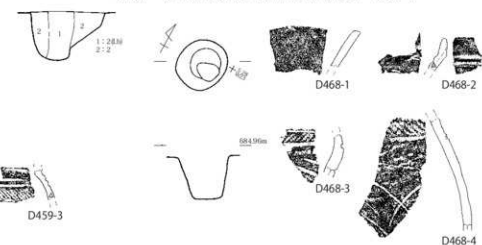
【土坑 459】
 (第 1 分冊 圖 28)
 (D459-1 ~ D459-3)



【土坑 462】(第 1 分冊 圖 31) (D462-1)



【土坑 468】(第 1 分冊 圖 32) (D468-1 ~ D468-4)



【土坑 469】(第 1 分冊 圖 28) (D469-1 ~ D469-23)

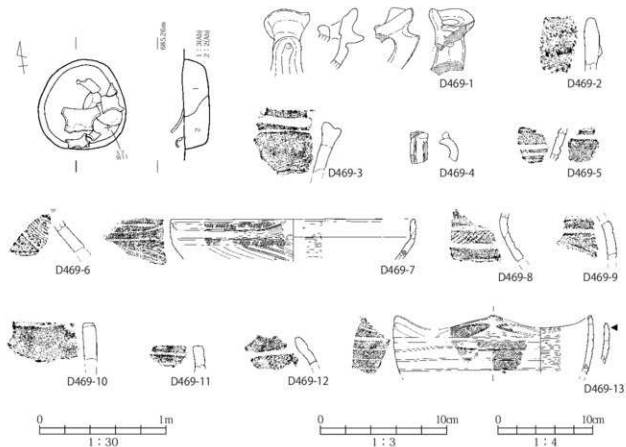
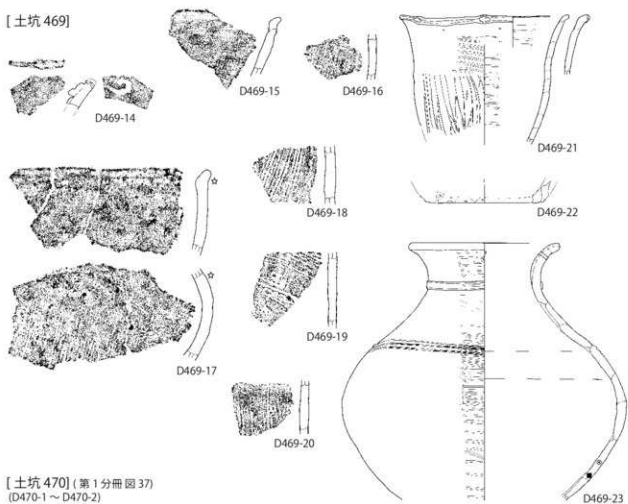


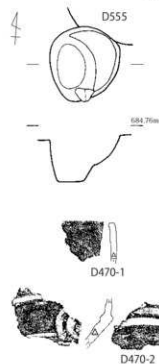
图 100 土坑及び出土土器実測図・拓影(58)

[土坑 469]



[土坑 470] (第1分冊 図 37)
(D470-1 ~ D470-2)

十趾



[土坑 475] (第1分冊 図 27)
(D475-1 ~ D475-6)

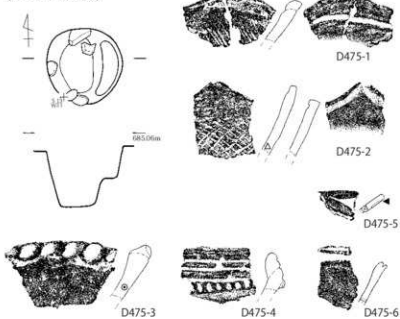
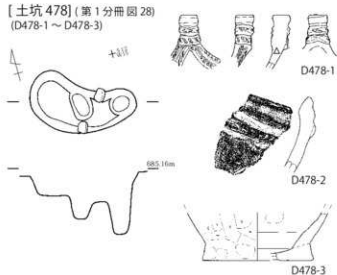
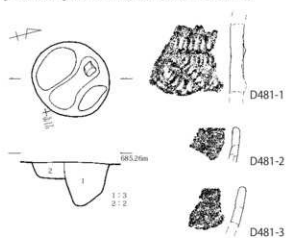


図 101 土坑及び出土土器実測図・拓影 (59)

【土坑 478】(第 1 分冊 図 28)
(D478-1 ~ D478-3)



【土坑 481】(第 1 分冊 図 33) (D481-1 ~ D481-3)



【土坑 486】(第 1 分冊 図 22) (D486-1 ~ D486-14)

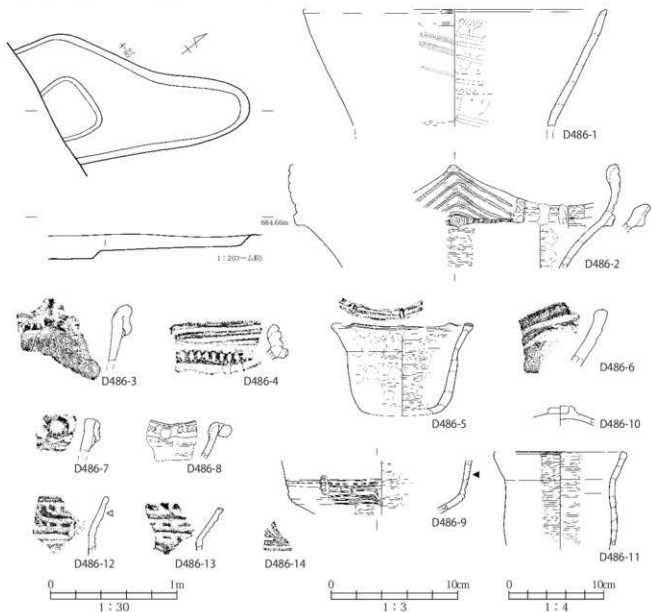
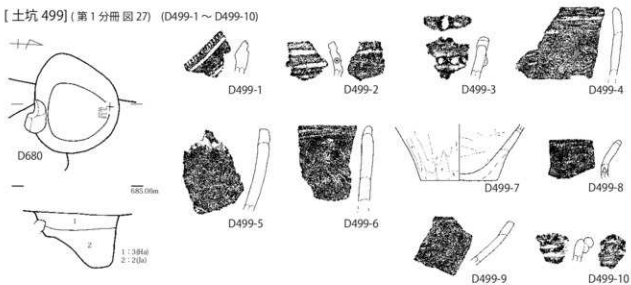


図 102 土坑及び出土土器実測図・拓影 (60)

[土坑 499] (第1分冊 図 27) (D499-1 ~ D499-10)



[土坑 502] (第1分冊 図 32) (D502-1 ~ D502-78)

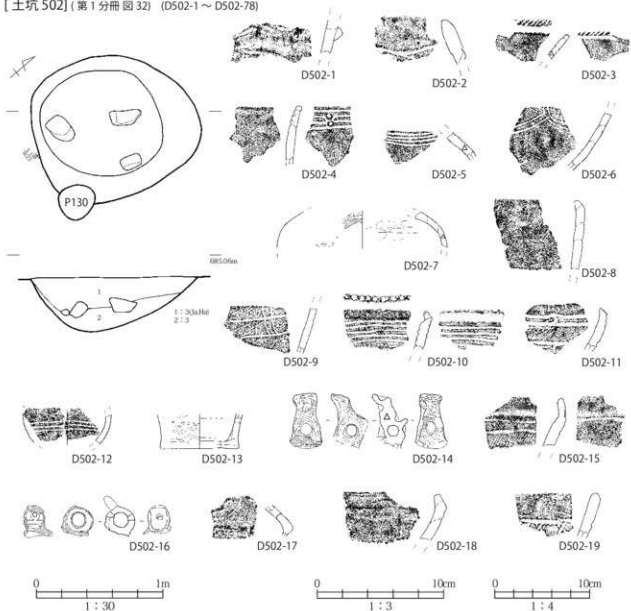


図 103 土坑及び出土土器実測図・拓影 (61)

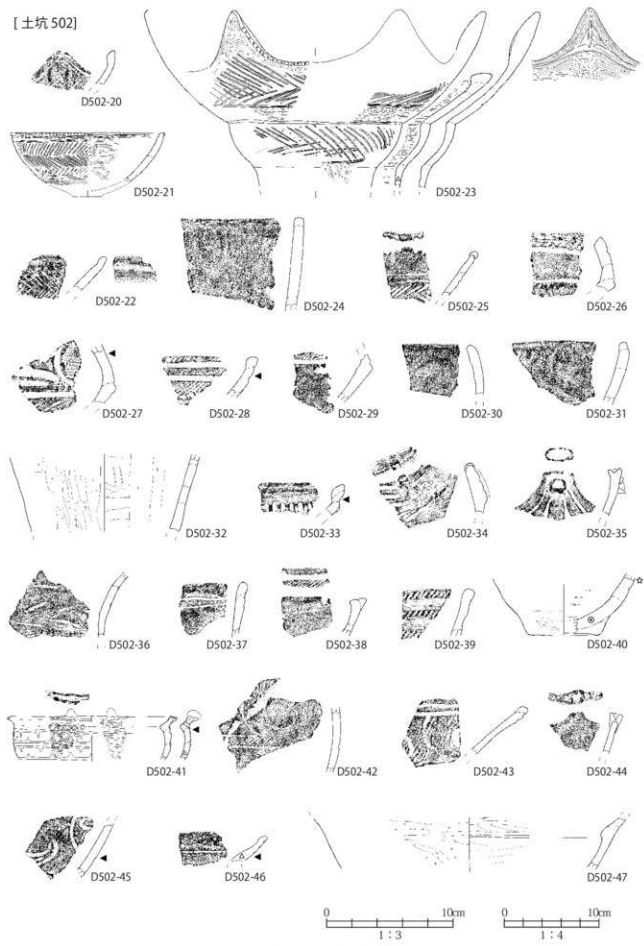


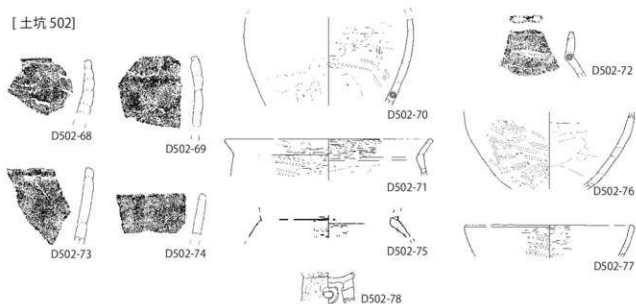
图 104 土坑出土土器实测图·拓影(62)

[土坑 502]

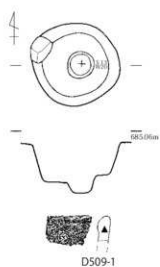


图 105 土坑出土土器实测图·拓影(63)

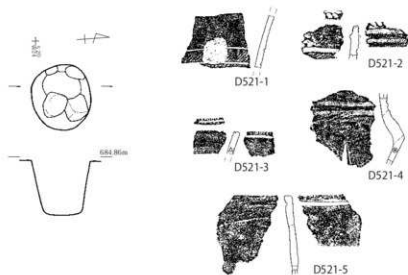
【土坑 502】



【土坑 509】(第1分冊 図 27)
(D509-1)



【土坑 521】(第1分冊 図 32) (D521-1 ~ D521-5)

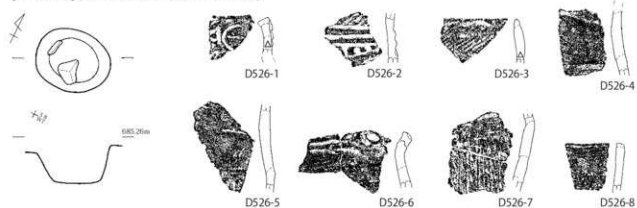


【土坑 525】(第1分冊 図 28) (D525-1 ~ D525-5)

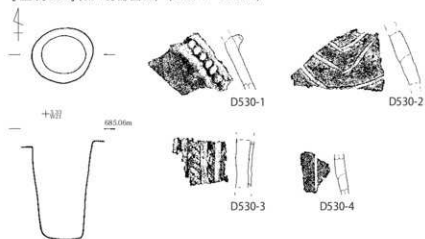


图 106 土坑及び出土土器実測図・拓影(64)

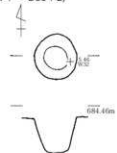
【土坑 526】(第1分冊 図 28) (D526-1 ~ D526-8)



【土坑 530】(第1分冊 図 32) (D530-1 ~ D530-4)



【土坑 554】(第1分冊 図 36)
(D554-1 ~ D554-2)

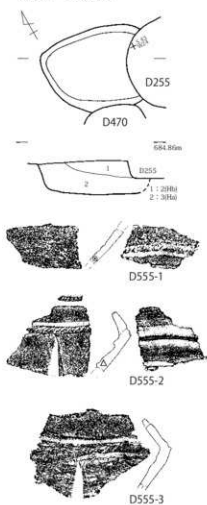


【土坑 534】(第1分冊 図 37)
(D534-1 ~ D534-5)

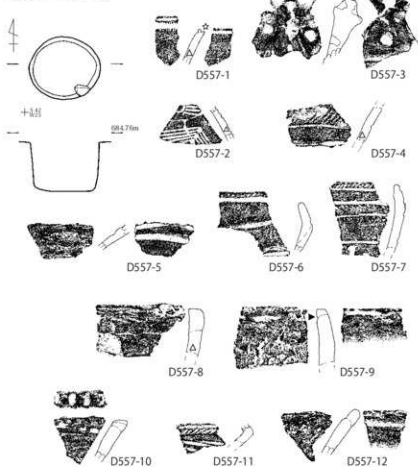


図 107 土坑及び出土土器実測図・拓影 (65)

[土坑 555] (第 1 分冊 図 37)
(D555-1 ~ D555-3)



[土坑 557] (第 1 分冊 図 37)
(D557-1 ~ D557-12)



[土坑 561] (第 1 分冊 図 32) (D561-1 ~ D561-11)

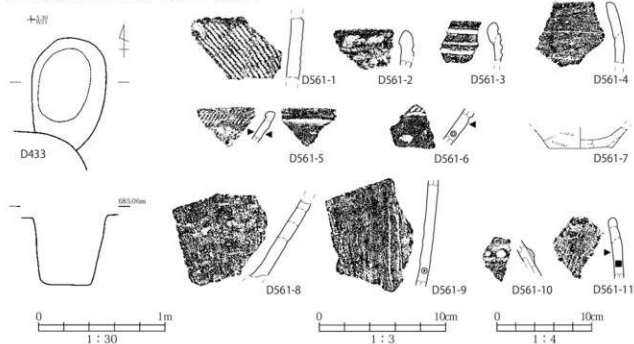
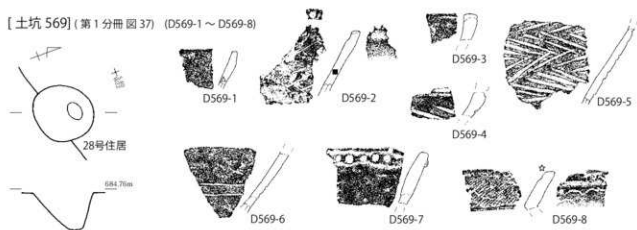
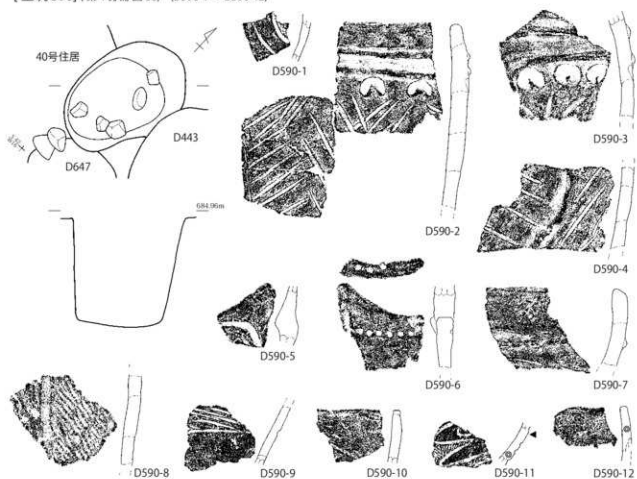


図 108 土坑及び出土土器実測図・拓影 (66)

[土坑 569] (第 1 分冊 圖 37) (D569-1 ~ D569-8)



[土坑 590] (第 1 分冊 圖 38) (D590-1 ~ D590-12)



[土坑609]



图 109 土坑及び出土土器実測図・拓影 (67)

[土坑 609] (第1分冊 図36) (D609-1 ~ D609-43)

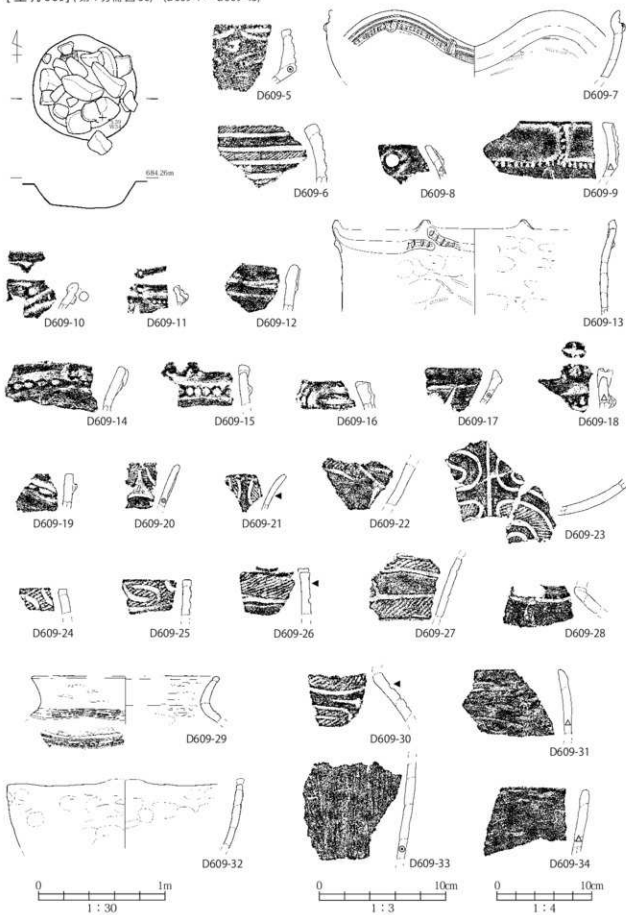
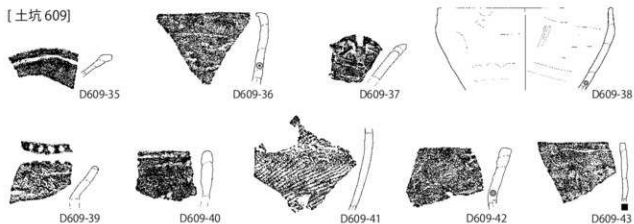
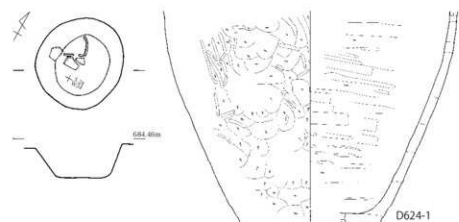


図 110 土坑及び出土土器実測図・拓影 (68)

[土坑 609]



[土坑 624] (第1分冊 図 31) (D624-1)



[土坑 631] (第1分冊 図 38)



[土坑 634] (第1分冊 図 33) (D634-1 ~ D634-15)

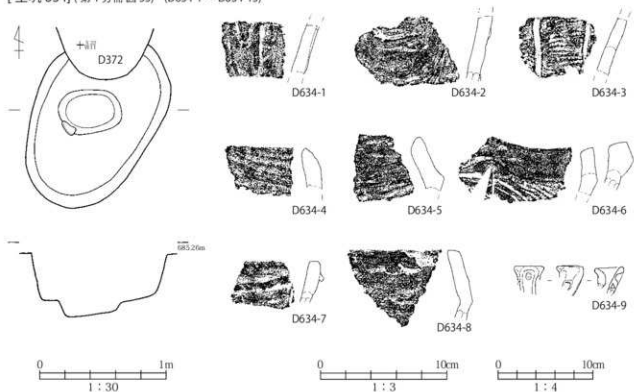
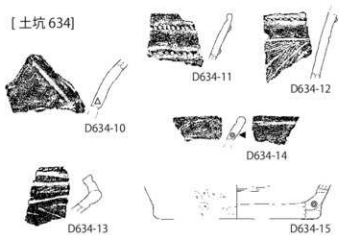
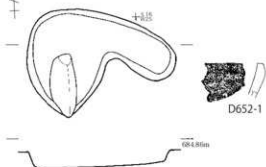


图 111 土坑及び出土土器実測図・拓影 (69)

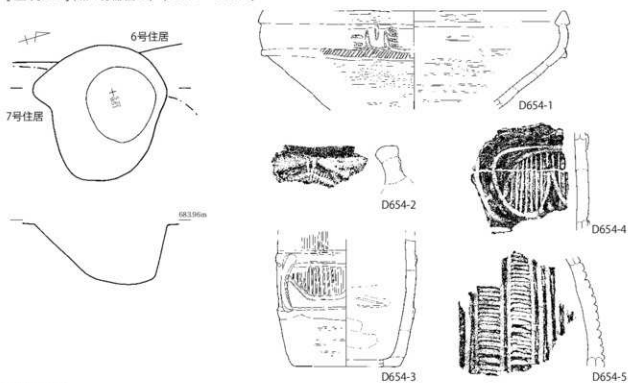
[土坑 634]



[土坑 652] (第1分冊 図32) (D652-1)



[土坑 654] (第1分冊 図30) (D654-1 ~ D654-5)



[土坑 750] (第1分冊 図36) (D750-1 ~ D750-5)

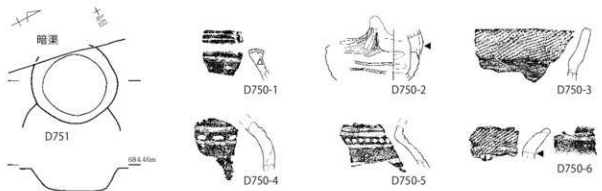
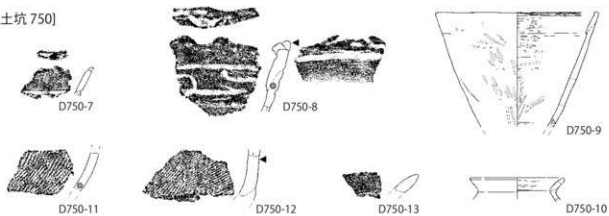


図 112 土坑及び出土土器実測図・拓影 (70)

【土坑 750】



【ピット 51】(第1分冊 図 37) (P51-1～P51-2)



【ピット 89】(第1分冊 図 28) (P89-1)

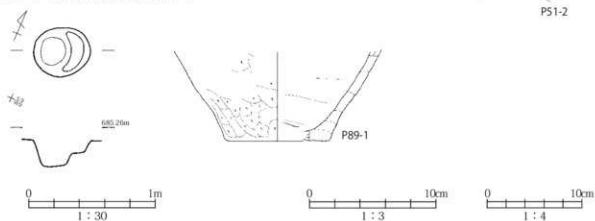
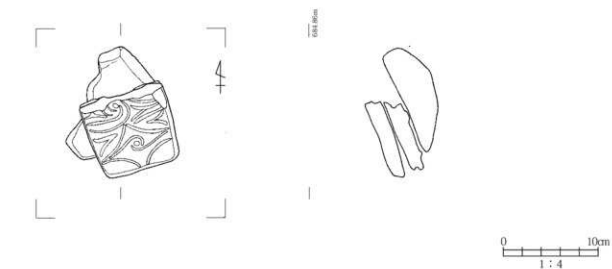


図 113 土坑・ピット及び出土土器実測図・拓影(71)

人面付土版埋納土坑 [S36W27] (第1分冊 図37)



黒曜石集中出土地点 [S30W36] (第1分冊 図31)

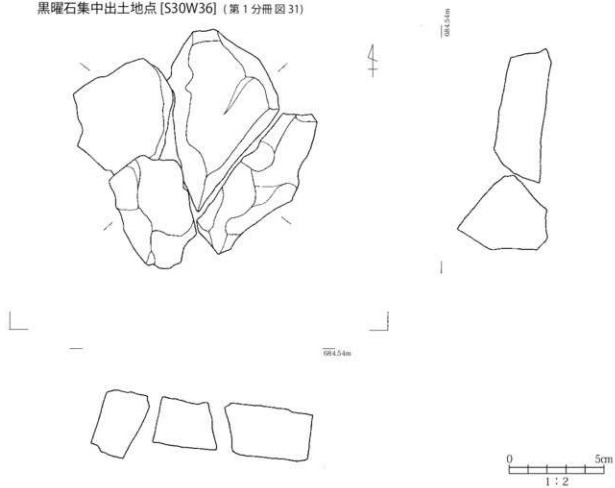


図 114 人面付土版埋納土坑・黒曜石集中出土地点実測図

(上段:口縁部破片数、下段:口縁部重量 g)

地点	総重量 g	中期					後期					晩期			後晩			所見	
		藤内	井戸	唐草	加E	不明	底部	称名	胎内	加B	上段	中K	前葉	中葉	後葉	無文	不明		底部
N9		1	1				2	11	25	16	64	108	13		156	17	21		
E3	78310	10	100				100	110	340	350	1680	4450	190		4770	210	1590		
N9			1					4	10	8	30	223	44	1	301	3	275		
EWO	159270		30					80	150	130	890	7690	1290	10	5570	160	8700		
N9							1		5	3	12	68	11		26	7	3		
W3	37830						30		80	40	330	1070	140		730	70	140		
N6								1	2	1	6	18	4	1	112	1	66		
EWO	26850							10	40	10	320	1150	60	10	1890	10	3460		
N6		1	2	2	1		1	3	9	5	65	226	22	1	571	14	237		
W3	138435	30	100	50	50		20	40	280	100	1940	6730	820	50	11420	180	11100		
N6									3	9	17	88	11		124	9	91		
W6	30830								50	330	440	1700	240		2550	280	3520		
N3		1		2			3	2	8	15	46	114	27	2	201	6	115		
W3	45965	20		90			100	30	160	340	860	3260	580	20	3370	60	5150		
N3			2	2			7	18	53	86	89	161	23		503	29	151		
W6	109905			130	60		220	360	260	2010	3010	2800	220		7420	360	4690		
N3				11	2		4	6	10	51	151	138	51	1	559		251		
W9	112330			370	150		110	110	200	1310	7490	3140	1210	30	10660		10110		
N3			1	2		1	1	5	10	37	87	117	50	5	460	37	141		
W12	86015			10	50	210	40	90	180	600	2600	2720	980	50	8040	310	6180		
NSO				9	6		1	27	19	35	19	4	9	1	109	9	45		
W6	34870			250	130		20	530	180	510	310	50	110	10	2130	200	1520	36住	
NSO				3	6		5	27	26	46	42	52	8		231	25	164	36住、	
W9	54720			50	150		150	620	340	920	870	940	120		5710	330	4730	が2	
N3			1					1	8	6	21	46	26	4	127	5	58		
W15	27505		60					10	90	80	400	1160	560	110	1800	30	2860		
N3		1				1		2	8	7	7	26	42	5	158	15	67		
W18	29685	20				30		50	80	50	90	330	1460	90	1830	90	2230		
NSO				7			8	17	66	149	185	181	37	7	797	41	276		
W12	145805			250			240	220	990	6310	6350	5550	840	170	15250	450	12470		
NSO			2	3		2	1	11	42	54	94	256	77	6	542	29	252		
W15	33510		100	40		90	30	160	540	1370	2510	10090	1570	180	10280	230	12750		
NSO			1	4				7	19	35	42	215	119	9	697	54	262		
W18	59680		80	50				130	260	740	1060	6230	2710	140	14860	490	15320		
S3		3	2	14	3	5	2	18	50	22	22	8	17	2	1	73	10	81	
W12	33435	80	40	300	60	90	60	800	1240	560	480	200	280	40	10	1290	80	2860	
S3		1	1	6	2	1		3	10	28	43	46	114	10	253	11	119		
W15	55370	80	20	150	60	10		150	250	680	1080	990	4120	290	4450	190	5470	19住	
S3		2	3	12	1			7	28	74	65	110	159	35	3	619	39	256	
W18	114010	80	50	250	20			110	460	1120	1050	4090	3870	670	20	11700	440	10600	19住

表 11 廃棄場Eとその周辺出土土器の時期別個体数

N9E3～NS0W9は廃棄場E1、N3W15～S3W18は廃棄場E2である。

廃棄場E1のうち網を掛けたグリッドにはカウント漏れが多く、正しい数値はこれ以上になる。

(上段:口縁部破片数、下段:口縁部重量 g)

地点	総重量 g	中期						後期				晩期			後晩			所見	
		藤内	井戸	唐草	加E	不明	底部	称名	堀内	加B	上段	中K	前葉	中葉	後葉	無文	不明		底部
NSO									1	7	13	6	39	14	1	158	3	66	
W21	34945								10	70	320	100	1050	660	10	4790	40	6140	
NSO					1				4	2	2	4	20	28	26	116	8	90	
W24	39175				50				40	10	10	70	900	590	850	2790	40	7260	
NSO				1						1		2	12	9	12	44	0	27	
W27	13735			30						10		30	160	760	270	410	0	1360	
S3		1		2					4	22	28	13	34	63	9	383	16	138	
W21	86225	10		100					20	330	560	340	1180	8760	220	12100	440	12170	
S3				1					5	13	10	5	57	74	88	434	19	207	
W24	118315			40					120	280	150	90	1130	2570	3010	13420	170	18480	
S3									4	1	4	1	31	29	21	160	5	66	
W27	34865								40	20	70	20	730	980	530	3440	40	5530	
S3		1							4	6	5	1	19	15	13	108	5	60	
W30	32330	10							40	80	80	10	750	1230	270	7590	30	3970	
S6				2	2				9	22	13	8	15	13	1	90	18	72	
W18	27490			30	110				110	790	250	140	250	210	10	1330	230	2040	19住
S6									19	77	39	38	38	14		185	12	72	18住、
W21	41155								370	1690	790	1330	540	270		3910	140	2310	19住、
S6		1	1	6	1	2			10	57	28	27	79	66	31	593	25	194	17住、
W24	106440	10	100	130	10	20			50	880	750	680	1490	2370	1590	10180	200	9730	18住
S6		1		2		1			3	17	20	30	56	108	85	583	21	213	
W27	122045	20		50		30			120	250	280	770	1060	2100	3620	15430	190	14100	17住
S6		1		4		1			4	13	13	5	23	21	4	89	9	46	
W30	27060	30		260		10			70	580	250	100	620	1900	100	1440	90	2230	

表 12 廃棄場Mとその周辺出土土器の時期別個体数

NS0W21～S3W24は廃棄場M1、S3W27～S6W30は廃棄場M2である。